

MediaNet NO.8

2000

慶應義塾大学メディアセンター



「特選」 新世紀への「付育」を目標としてメディアセンターの付育プログラム

三田メディアセンターの総括: 専門職としての図書館員

三田メディアセンター研修会

政策・メディア研究科に塾内留学して

企業等派遣研修を終えて

医学メディアセンターの研修

UCSD体験記 — 研修を通して感じたこと —

環太平洋図書館会議に参加して

アイルランドの製本屋とイギリスの図書館の訪問

EDC Basic Seminarに参加して

米国出張かけ足報告

NCC Conferenceに参加して

海の向こうで図書館員 — UCSDでの半年間 —

Converge on London 8ICML見聞記

Mita Media Center

Hiyoshi Media Center

Medical Information and Media Center

Information and Media Center for Science Technology

Shonan Fujisawa Media Center

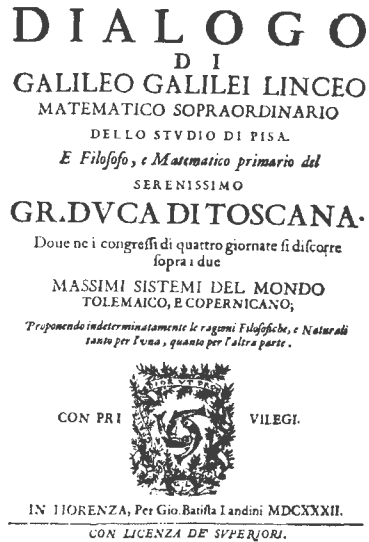
Keio
University
MediaCenter



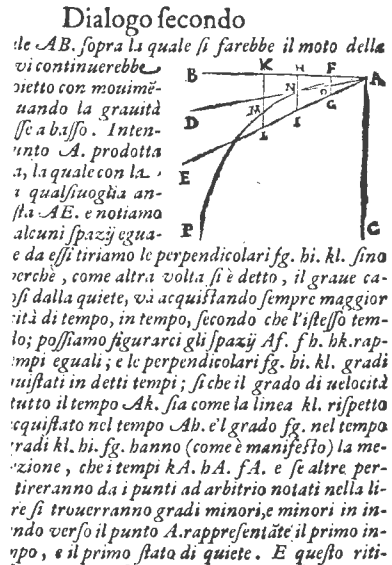
ガリレオ・ガリレイ「天文対話」

もろもろの天は神の栄光をあらわし、
蒼穹はその御手のわざをしめす。

(詩篇第19篇1節)



(三田メディアセンター所蔵は1632年の初版)



ガリレオはシェイクスピアと同じ年、1564年に斜塔の町ピサで出生。天上界の現象を観察して人類の宇宙観に大きく貢献したが、その一生はシェイクスピアの劇を思わせるような波瀾の生涯であった。同時代の学者の中で、ガリレオが特に馴染み深いのは本書「天文対話」のためであろう。この書物のためにガリレオは宗教裁判にかけられ、地動説の放棄を命じられたが「それでも地球は動く」と言ったと伝えられ、以降真理を守る殉教者の姿が定着しているからであろう。

本書は書名の主要部分を「ガリレオ・ガリレイの対話。四日間のお会合でプトレマイオスとコペルニクスの二大世界体系について論じられ、どちらの側からも同じように哲学的・自然科学的根拠が提示される」と読み、通称「天文対話」の名で親しまれており、日常のイタリア語で書かれ散文の傑作にも数えられている。

その内容を見ると、当時の思想界を象徴する三人の人物が登場する。地動説論者サルヴィアチ（ガリレオを代弁）、天動説の善良なる逍遥学徒シンプリチオ（アリストテレス、プトレマイオスを代弁）、穏健な知識人ザグレド（両者への質問役）。

第1日目は天体の物体は地上の元素とは全く違った第五元素からなっていると言ふこと、また地球も月や惑星と同様に運動する天体とみなす事を検討し合う。

第2日目は、地球が不動の物体ではなく自転・公転する天体であると仮定した場合に、地上の物体の運動を検討する、大地が回転しても石や象や塔や町がなぜ遠心力で天空に吹き飛ばされないかを検討する、この辺り数式を用いず簡単な図（写真参照）で誰にでもこの形容詞が誇張でない程、解り易く解き明かす技術はガリレオならではのものである。

第3日目は太陽黒点による地球の運動の証明で、月の運動、また惑星の速度につき討議し合う。

第4日目、68歳のガリレオに「天文対話」を出版させる動機ともなった地球の自転・公転による潮の干満現象の証明である。そもそも当時の科学知識では、天動説にも地動説にも相当の根拠があり、万人を納得させるに足る証拠を双方とも見出し得なかった。その時、ガリレオが地動説の動かざる証拠としたのが、以前より主張していた潮の干満現象であった。しかも、この彼の論は全くの誤論であり、ティコ・ブラーエや一部聖職者等の説く月の引力説の方が正しかったのである。

全体にガリレオがコペルニクスの仮説に理解を示している間は、教会関係者も内心の不満を押さえて自重していたが、彼が聖書の語句の解釈にまで干渉し、また本書によって天動説を嘲笑するに及んでは、宗教裁判を開かざるを得なかった。出版後ガリレオはローマに召喚され異端審問にかけられることになる。筋を通すかあるいは獄死かの選択を迫られ、「太陽が宇宙の中心であり地球が動くという誤った説を全く放棄し、以降これを口にも筆にも取り上げたりしない」と宣誓し、死を免れる。長年の眼病がたたって晩年には失明、失意のうちに1642年没。享年77歳。翌年ニュートンが誕生。ケプラーの惑星の法則、ガリレオの仮説等いわゆる巨人の肩に乗り、万有引力による新しい宇宙論を数理的に論証していく。

徳川三代将軍家光の御世、地球の裏側での出来事である。

(三田メディアセンター調査役 森園 繁)

目 次

巻頭言

所長就任にあたって	飯田 裕康	1
伝統の医学図書館に求められる新機能	相川 直樹	3
騒がしさと静かさの共存：SFCメディアセンターのこれから	小島 朋之	4
新米事務長の独り言	岡林 隆	5

特 集 新世紀への人材育成を目指して：メディアセンターの研修プログラム

三田メディアセンターの研修総括：専門職としての図書館員	加藤 好郎	6
三田メディアセンター研修会	加藤 好郎	9
政策・メディア研究科に塾内留学して	梁瀬三千代	11
企業等派遣研修を終えて	村田優美子	12
医学メディアセンターの研修	加藤 孝明	13
海の向こうで図書館員 — UCSDでの半年間 —	保坂 睦	15
UCSD体験記 — 研修を通して感じたこと —	佐藤友里恵	16
環太平洋電子図書館会議に参加して	田邊 稔, 筒井 利子	17
アイルランドの製本屋とイギリスの図書館の訪問	市古 健次	19
EDC Basic Seminarに参加して	松本 和子	21
米国出張かけ足報告	金子 康樹	23
NCC Conferenceに参加して	永嶋千夏子	24
Converge on London SICML 見聞記	長谷川博子	25
御伽草子と展示	石川 透	27
三田メディアセンター・インターンシッププログラム	加藤 好郎	31
マナー向上委員会の活動	村上篤太郎	35
西洋貴重書の閲覧と保存—小さないたわり —	市古 健次	37
三田メディアセンター オープンPCの展開	保坂 睦	39
日吉メディアセンターの蔵書再編成への取り組み	新井 圭子	41
外国雑誌価格と出版社の動向について	平吹佳世子	45
完成した矢上新棟：拡張された理工学メディアセンター	酒井 明夫	47
電子ジャーナルの導入 — 理工学メディアセンターの事例 —	舘 田鶴子, 杉本 若葉	51
白楽サテライト・ライブラリーへの蔵書移管について		
— 湘南藤沢メディアセンターの事例報告 —	杉山 良子	57
白楽サテライト・ライブラリーの現状と今後	宮木さえみ	59

メディアネットレポート HPのリニューアル

三田メディアセンターホームページ改訂に携わって	松本 和子	63
日吉メディアセンターホームページ	豊田 紀子	65
ホームページのリニューアル — 湘南藤沢メディアセンター —	島田 貴史	67

ティールーム

情報の質	牧 厚志	26
「シェルプールの図書館」	阿川 尚之	34
日吉情報センターの思い出	金田一真澄	36

スタッフルーム

本とさっちゃんから学んだこと	佐久間公子	40
電車の発車音楽は体に悪い？	吉井由希子	50
情報基盤について	石原 智子	62
高島正夫先生の思い出	宮木さえみ	70
心に残る1枚 ～安西郁夫さんを偲んで～	酒井 明夫	70

資料

メディアネット・メディアセンターに関する書誌	71
スタッフによる論文発表・研究発表	71
年次統計資料	74
ガリレオ・ガリレイ「天文対話」	表Ⅱ
メディアセンター（全塾）ニュース	14
三田メディアセンターニュース1	10
三田メディアセンターニュース2	38
三田メディアセンターニュース3	73
三田メディアセンター小展示ニュース	73
日吉メディアセンター平成11年度企画展示一覧	22
日吉メディアセンター平成12年度企画展示一覧	33
三田図書館・情報学会月例研究会	20
展示会予告	表Ⅲ
訃報	80
寄付報告	80
編集後記	80

巻頭言

所長就任にあたって



いいだ ひろやす
飯田 裕康

メディアネット所長
メディアセンター所長
三田メディアセンター所長
慶應義塾図書館長

慶應義塾大学メディアネットとして新たな時代に相応しい理念のもとにスタートしてはや7年が経過いたしました。その間われわれを巡る環境は長足の勢いで変化し、その動向はとどまるところがないほどです。わが国大学図書館の内であって質・量ともに第1級のコレクションを有する図書館を中心に、高度な情報技術に支えられた新たなメディア環境に適合しかつそれらをよりいっそう高い水準に引き上げる先駆的な活動を展開している当メディアネットには、まさに時代の先端を行くものとしての自負を禁じ得ないものがあります。はからずもこのような誇るべきメディアネットと関わることとなったことは誠に光栄です。同時に、このネット資産のサーヴィスを享受する一研究者として、メディアネットとの関わりについて、利用者の側にいっそうゆきとどいた理解が求められていることも痛感しています。

メディアネットは今日まで輝かしい歴史を歩んできました。それはまさに、慶應義塾における教育・研究・医療の先導的な展開・発展の途と並行する歴史でありました。メディアネットは慶應義塾における学問・教育の欠くことのできない両輪の一つとなってきたわけです。今日、情報通信技術の飛躍的な発展によって、半世紀前、いや10年前には想像もつかなかった知的生産活動や、それをもととする教育活動が、まさに地球規模で展開されようとしています。このような時代の大きな転換の中でメディアネットが今まさに新たな方向をめざし、これまで培ってきた教育・研究支援の体制をより高い水準に引き上げようとする体制構築に積極的に取り組んでいる現状を見て、そこに脈々と息づいている伝統との調和をはかりつつ、その伝統の新たな像を彫り上げようとする姿勢に、まことに力強いものを感じる次第です。5のキャンパスに展開するメディアネット

トの専門的・知的集団こそ、今日の慶應義塾を支えて最前線にいる人々であるとの印象を、日々強くしていることを表明しておきたいと思います。そして今日にまで導いてきた先人たちの価値ある努力にたいして、感謝の念を禁じえないものです。

しかしながら、慶應義塾といえども単純な一枚岩的な組織でなく、多様な知的関心と価値観の複雑に絡み合う組織であること、情報やメディアへのサーヴィスの最大の受け手である大半の学生はつねに入れ替わり、彼らの生活様式もめまぐるしい変化を遂げていること、などを考えるとき、今日までの精一杯の努力にもかかわらずなおそれを上回る際限のない努力が期待されていることも、厳しく受けとめなければなりません。学生はいかなる情報やメディアへのニーズをもっているのか、それはどのように変わりつつあるのか。研究者の研究関心はいかなる方向に向かおうとしているのか、研究者はいかなる組織のもとに研究活動を展開しようとしているのか。研究活動とはどのようなもので、それが情報支援と如何に結びつくのか。研究・教育活動を直接間接に支えている職員は、いったいどのような情報ニーズをもっているのか。塾員たちは彼らの知的関心をいかなる形でわがメディアネットと結びつけようとしているのか。塾長の言をもってすれば、彼らの永遠の書齋としてメディアネットはどうあるべきなのか。一貫教育の優れたシステムをもつ慶應義塾にあって、大学以外の一貫教育の現場といかに関わっていったらよいのか。一貫教育のシステムの改革にたいし、メディアネットとしていかなる寄与をなし得るのか。このような、およそ慶應義塾そのものに発する問題だけでも、挙げればきりがありません。

他方、今や情報通信技術の発展は、まさに国策的に議論されるまでになっていることはいまでもあ

りません。塾のこの面での先駆的な努力によって、きわめてユニークな組織として発足したITCをもつメディアネットは、情報通信技術の相応な開発と利用の面においても大きな課題を背負っているといわなければなりません。端末機器の量的不足や、それらを設置する場所的な限定等の物理的限界をひとまずおくとして、メディアネットは塾の誇るに足るIT開発の資源すなわちソフトを率先してより有効に活用する用意を怠ってはならないでしょう。5つのキャンパスを見て、この面でもメディアネットは他大学にない優れた人材を有していることを確認できたと考えております。しかし、この面についてもサービスの受け手側の事情には情報通信技術のあまりにもテンポの速い展開に後れをとり、そのために貴重な情報資源を利用できず、研究や教育に生かし切れない部分があることは否定できません。また、キャンパス間においてもこの種の格差が存在し、容易に埋まらない現実があります。なにより個々の研究者の努力にまつほかないものではありませんが、メディアネットとしての不断の啓発活動も、なおいっそう強められねばならないように思われます。

さて、情報通信技術の進歩は情報のデジタル化をさらに大規模に推し進めることは、もはや常識とってよいほどです。メディアネットのこの面での貢献はけっして小さくはありません。デジタル・ライブラリーとしての方向付けに、曖昧なものがあったはならないように思われます。まさにメディアネットがメディアセンターとITCとの統合組織である長所を遺憾なく生かしてゆかなければならないと考えます。とくに海外図書館との緊密な関係を押し進めるためにも、いいかえれば、情報の広範な共有を実現し、世界に向けて発信するためにも、そ

れは不可欠なものと認識しています。デジタル情報の内容的な質・精度ともにより高いものを目指して、わがメディアネットの組織上の長所を存分に発揮できる体制を、さらに整備する必要があるでしょう。

いうまでもなく、慶應義塾図書館は600万点に余る図書・資料を所蔵する世界に誇れる大学図書館です。その大半を占める紙媒体の資料は、今日なお情報サービス利用の最大の対象でしょう。OPAC (KOSMOS) に代表される検索システムが、学習や研究に貴重な情報を提供し続けていることは、誇ってよいでしょう。しかし、資料形態別のより有効な検索システムを整備する必要性は焦眉の課題となっているように思われます。紙媒体資料を死蔵に終わらせないためにもこのことは見のがせません。すべてのデータがデジタル化されるというのはあまり現実的な考えではありませんが、書誌情報の徹底的なデジタル化を図ることに躊躇があってはならないでしょう。

最後に一つ個人的な体験を記して締めくくりたいと思います。昨年10月より本年3月末まで、塾派遣留学の機会を与えられ、British Libraryにて資料探索の機会をもちました。中央ホワイエにそびえ立つKing's Library (George III世蔵書)の重厚な背表紙を眺めつつRare BookやManuscripts Roomに向かう日々でしたが、Reading Room設置の端末上で、しばしば慶應義塾図書館のOPACにアクセスし、所蔵状況を確認することができました。そのたびに単純にもすごいと思ったことでした。ITのもたらすものとはいえ、わがメディアネットの存在感に感銘を受けました。月並みですが、世界の慶應義塾に相応しいメディアネットを目指し、精々努力を惜しまない所存です。

巻頭言

伝統の医学図書館に求められる新機能


 あいかわ なおき
 相川 直樹

(医学メディアセンター所長、医学部教授)

平成11年10月1日付けで、医学メディアセンター所長兼北里記念医学図書館長の辞令をいただきました。従来、金子章道教授(医学部生理学)が医学メディアセンター所長と医学ITC所長とを兼任していましたが、この度、金子教授が医学ITC所長、小職が医学メディアセンター所長となりました。所長が独立したとはいえ両センターの機能は相互に関連しますので、医学ITCとの綿密な協力関係により情報革命の時代に対応した医学メディアセンターの整備を進めていきたいと思っております。

医学メディアセンターの前身である北里記念医学図書館は、1937年に開館した我が国有数の医学図書館で、今日まで、信濃町の医学生や教職員に「北里図書館」と呼ばれて親しまれてきました。同時に、社会に開かれた図書館として塾外の研究者にも広く利用され、わが国の医学教育と生命科学を支援してきた図書館であることはご存知のことと思っております。

現在の蔵書数は、単行本91,566冊(うち国外刊行本45,429冊)、製本雑誌224,402冊(うち国外刊行雑誌152,959冊)で、年間購読雑誌は3,618タイトル(うち国外刊行雑誌1,826タイトル)となっており、産経新聞の本塾と東京大学との比較記事では、医学図書館蔵書数で義塾に軍配があがり、大変誇りに思いました。永年にわたる投資と図書管理とが今日の医学メディアセンターの名声を築き上げたわけです。このような伝統ある医学メディアセンターの所長は重責であり、身の引き締まる思いがあります。

医学部キャンパスと大学病院からなる信濃町の現在の機能は、医学部学生の卒前教育と研修医らの卒業臨床教育、基礎医学、臨床医学教室における研究と大学院生の研究指導、さらに特定機能病院としての高度先進医療を中心とした診療であります。医学メディアセンターは、信濃町の教育、研究、診療からなる3本柱のそれぞれの機能にバランスよく対応することが求められています。

現在の医学メディアセンターは、医学情報媒体と

その利用法の変貌に対応し、その姿を大きく変えつつあります。急速にデジタル化しつつある図書館においても、冊子体の蔵書整備は重要です。医学生や研修医には、最新の教科書を網羅しておく必要があります。とくに医学書は高価で、頻繁に改訂されますので、一人一人が全ての専門部門の教科書を購入するには限界があります。メディアセンターでの閲覧や貸出しで利用できるよう、できれば複数整備したいと考えています。さらに、臨床知識や診療手技を学ぶには、ビデオなどの教材整備も重要です。診療支援には、evidence based medicine (EBM)に必要な情報として、とくに臨床系英文雑誌の購読を充実していかなければなりません。

このような蔵書整備とともに、文献検索機能も重要視です。医学中央雑誌やIndex Medicusを手引きで検索した時代から、CD-ROMによる検索と検索結果のダウンロードが可能になりました。さらに最近では、メディアセンターに出向かなくても、研究室からイントラネットで医学メディアセンターにアクセスし、MEDLINEやPubMedにリンクして世界の文献検索と検索結果のダウンロードが簡単にできるようになりました。医学メディアセンターが契約している電子ジャーナルで論文を研究室のデスクトップで読むこともできます。ネットワークで利用できるデータベースや電子ジャーナルの整備はこの数年で最も重要な事業となると思います。

生命科学と医療の進歩のスピードは極めて早く、分野によっては数週間遅れると研究のpriorityが失われる時代になりました。このような環境の変化に敏感に対応できる医学メディアセンターを構築して、生命科学情報のメッカにしたいと思っております。幸いなことに、医学メディアセンターには武事務長、加藤課長、館課長代理はじめ、塾の財産とも言える極めて優秀な司書が揃っています。彼等と共に情報提供サービスの向上にも努めていきたいと考えています。

巻頭言

騒がしさと静かさの共存： SFC メディアセンターのこれから

こじま ともゆき
小島 朋之

(湘南藤沢メディアセンター所長)



SFCメディアセンターの3階には、「静かエリア」がある。「じっくり考えたい、しっかり資料を読みたい、集中してレポートを作成したい」。そう思ったとき、学生たちはここにやって来る。このエリアはそう広くなく、もっとスペースを増やして欲しいという要望がある。しかし同時に、グループ・ワークのための“騒がしエリア”こそ、もっと増やすべきだとの声も小さくない。図書館が主として学生や教員スタッフが個人的に書籍や雑誌などから情報を検索・取得し、論文やレポートの作成など研究・教育に活用する場所である限り、「静かエリア」が中心になるのは当然である。しかし、情報の取得と活用が複数の作業が進められるとき、“騒がしエリア”であってこそより効率的になる。しかも、これこそがSFCの特色でもあるといえるのである。

SFCは1990年の創設以来、三田など他のキャンパスに比べれば、元来が“騒がしエリア”である。共同研究室はもちろん、教員の個人研究室にも学生や院生の姿が絶えず、夜間残留組も少なくない。そうなる最大の理由は、SFCでは研究と教育いずれにおいてもグループ・ワークが多いということだ。SFCメディアセンターも、それゆえにこれまで“騒がしエリア”であったかもしれない。しかし創設から10年を経て、SFCアイデンティティが定着するとともに、変化を求める新しい動きも見え始めている。“騒がしエリア”の存在意義を肯定しながらも、「静かエリア」も求めるのは新しい動きの1つであろう。

SFCには双子の学部（総合政策学部と環境情報学部）、1つの大学院（政策・メディア研究科）と1つの研究所（SFC研究所）があり、そしてメディアセンターが1つだけおかれている。三田をはじめとした慶應義塾の各キャンパスとはネットワークで結ばれているとはいえ、4,000名以上の学生、院生、教員とスタッフにとって、研究と教育いずれについても情報の取得と活用の主要な拠り所はSFCメディアセンターである。それゆえに、SFCメディアセンター

は“騒がしエリア”と「静かエリア」、いずれの要望にも対処していかなければならない。

こうした多様な要望に、SFCのメディアセンターはわずか28人のスタッフで対応している。専任職員はその半数にすぎず、三田の80人体制に比べればはるかに少数である。SFCメディアセンター所長に就任してから間もなく1年であるが、センターのスタッフの仕事振りには頭が下がる思いである。

センターが要望にかなりのところまで応えられたとすれば、その背景にSFCアイデンティティがメディアセンターにも根付いているからであろう。アイデンティティの1つは全員参加の文化である。キャンパスではさまざまな活動に学生、教員と職員が一体となって取り組むのが当然のこととなっている。メディアセンターの運営も同様であり、専任職員、委託・嘱託の職員に加えて、80人以上の学生たちがCNS、AV、データベースのコンサルタントとして常時協力している。学生コンサルタントの参加なしには、センターは円滑な運営は不可能といつてよい。

いま1つのアイデンティティは、IT革命の先取りである。計算機利用統計（利用課題数）をみると、1998年の場合、SFCのCNSワークステーション系が6,000前後に達している。三田や日吉がそれぞれ4,500から4,000にすぎず、SFCにおける情報技術の先行性が明確に示されている。センターのサービスも、電子ジャーナルやデータベースなど電子媒体の利用に事業の重点を据えてきた。データベースについてはCD-ROMだけでなく、インターネット上や専用回線によるオンラインデータベースに加えて、各研究室独自のデータベースの共用化もすでに試みられている。

今後もこうしたSFCアイデンティティを活かしながら、“騒がしエリア”の中で「静かエリア」も共存できる24時間キャンパスを支えるメディアセンターでありたいと思っている。

巻頭言

新米事務長の独り言

おかばやし たかし
岡林 隆

(メディアセンター本部事務長
兼 三田メディアセンター事務長)

メディアセンターの事務長に就任して早 10ヶ月になる。図書館をメディアセンターと称していることに当初戸惑いもあったが、今ではこう称することにした義塾の関係者の慧眼に敬服している。

私が利用者として、大学の図書館に頻繁に出入りしたのは、大学は違うけれど、遙か 40 年程前にもなる。座席取りと狙った本の確保には苦勞をしたが、本当に良く利用させて貰った。大学生活を振り返ってみると、図書館での生活は後年ある種の郷愁となって蘇ってくるのではないかとそれだけにサービスを行う立場になってみて、学生にはしっかりしたサービスを行いたいと日頃思っている。

ここ 10 数年の情報通信技術の進歩には驚かされる。PC や CD-ROM など情報機器の発展、アプリケーションソフトの進化、インターネットの普及などは図書館業務にも大きな影響を及ぼしている。特に情報の検索、保存、スピードには目を見張るものがある。図書館をメディアセンターと称する所以である。私も図書館情報大学の HP から全国の国公立大学の図書館の HP を、職場あるいは自宅から覗かせて貰っているが、その動向が手に取るように分かるのは誠に有り難い。少し前まではこのような形で情報に接するとは考えもしなかった。多くの大学図書館では、関係予算の縮減やスタッフの削減とその対策に頭を悩ませており、また、蔵書と資料の増加による保存スペースの狭隘化とその確保、目録情報の遡及入力の経費と人手の問題、中央図書館と部局図書室の集約分散を巡る軋轢、溢れる電子情報への対応と選別、学生への情報リテラシー教育の徹底などで苦勞しているのが良く分かる。これらの多くは慶應義塾においても頭の痛い問題である。

大学経営の厳しい現況を考えると、関係予算の大きな増額は望めない。三田メディアセンターの図書等の購入予算はここ数年 3 億 7 千万円ほどで推移しているのが実情である。従って職員を選書能力に磨きを掛けること、重複する図書や資料の購入は避けること、他大学との相互貸借を更に推進すること、他大学の電子情報資料の収集や所蔵資料の電子化の

情報を的確に把握し相互協力を行うことなどが考えられる。限られた予算の効率的な執行は、これから職員一体となって取り組むべき課題である。

保存スペースの確保も、慶應義塾では山中湖や白楽の書庫を活用しながら凌いでいる。新しい図書や資料は急速に増え続ける訳であるから、仮に新館を設けるにしろ根本的な策にはなり得ない。昨年度の三田メディアセンターの例では、単行本、雑誌合わせて 4 万 2 千点の純増である。利用頻度の高い図書の電子化、複数ある図書の一部除籍、全く利用されない図書の廃棄などが対策といわれるが現実には難しい。他のいくつかの大学とも共同して、プロジェクトを設け具体策を練る必要のある事柄である。

これからの情報通信技術の発展が、図書館をどのように変えていくのか、学術審議会の答申やいろいろな識者の論文などを読んでみても、今一つ積然としない。それだけ先の変化が見通せないということだろう。しかし、中身とスピードは定かではないが、図書、雑誌などの紙媒体は電子媒体に変わっていくことは十分考えられる。電子媒体が更にどう進歩するかは不明であるけれど、情報の媒体が粘土板、竹、木、紙と変わって来たことを考えると不思議なことではない。閲覧も自宅など館外からのアクセスが圧倒的に増えるだろう。収集すべき資料がいかなる形のもので、それがどう使われようと、図書館としての資料の収集、整理、保存、提供という基本的役割は、これからも変わることがないのは間違いない。

我がメディアセンターの職員は、外から来ている人も含めて、とても仕事熱心で優秀である。少ない人数でよく働く。長年の経験からして優秀な人と共に仕事することは楽しいし、逆は悲劇だと思っている。取り巻く環境が時代の流れの中でどのように変わって行くのか分からないが、新米事務長としては、慶應義塾の教育と研究の充実向上に一層役立つことが出来るように、優秀な人たちと共に、更に研鑽、努力を重ねたいと思うこの頃である。

三田メディアセンターの研修総括： 専門職としての図書館員

かとう よしろう
加藤 好郎

(三田メディアセンター事務次長)

1. はじめに

昭和57年に三田キャンパスに新図書館が誕生した。地下1階と地下2階は図書館図書、地下3階には文学部図書と法学部図書、地下4階は和雑誌、地下5階には洋雑誌を配置した。一方、地上階は6階に事務部門の本部、総務課、整理課、5階に図書館・情報学資料室、図書館・情報学科の授業を主に行う研修室、そして貴重書室と情報処理室(当時は磁気テープで埋まっていた)、4階が総合資料室(教員を中心にした研究施設)、3階が雑誌室、2階に西・東・大学院閲覧室とグループ学習室、1階に入ると左側に受付・貸出し兼用カウンター、正面を見るとズラーと並んだカード目録ボックス、奥に新聞閲覧コーナーと複写カウンター、正面から右に入るとレファレンスルームでメインカウンターとレファレンスカウンターが行儀よく並んでいた。1階の奥はゆったりとした事務スペースがあった。旧館には、経済学部図書と商学部図書、旧分類図書等が配置された。但し、旧館のオープンは4月以降もパブリック・サービス担当が作業を続け、正確にいうと57年10月である。

あれから19年目に入った。当時、18年は充分持つといわれていた書庫スペースは、現在、山中資料センター、白楽サテライト・ライブラリーなくしてサービス運用を語ることはできない。

旧館しかなかった時代、学部生が立ち入ることができた書庫は旧館第3書庫の地階1階・2階だけであった。目録情報も図書館図書のみで、研究室にある図書情報を知るツールは全くなかった。大学院生・教員は新研究室の右半分を利用した書庫が、法資・経商資・文資等の資料室ごとに別れていた。

新図書館構築のコンセプトは、学生の足を図書館へ向ける事、そして資料を集中させ、一部を除き全館オープンスタック(開架書庫)にし、利用しやすく親しみやすい図書館を目指した。このサービスマ

インドは今も引き継がれている。

2. 想像を絶する急速な変化

学生の足は図書館に向き始めた。57年当時新館は、三田キャンパス上において冷房も含めて何しろ一番快適な施設であった。そのこともありサービスの充実、資料に対するアクセスのしやすさは他の大学図書館とは比較にならないものであった。慶應義塾図書館の新館がオープンしてから、他大学の図書館建築ブームが続いた。いずれのコンセプトも、学生を図書館へ、そして大学経営の観点からは、図書館の充実が大学の特色ある教育のひとつと考えられていた。同時に、受験生集めのための戦略のひとつにもなっていた。

そのこともあり、学生がよく図書館を利用するようになった。慶應義塾図書館新館は、毎日4千5百人(三田キャンパスの学生総数は1万人)を超える利用者に対してスタッフは必至に業務を遂行している。旧図書館時代には想像も出来ない忙しさで、それはすさまじいものがあり、今も新しい事業展開とともにこのことはエンドレスに続いている。

資料の形態も変わってきている。カード目録がOPACへ、紙の資料がCD-ROM、電子ジャーナルへ、VHSがDVDに等、予想もしなかった技術革新が行われ、今IT時代に突入している。

書庫も狭隘化し、前述した二つの保存図書館を持つことになった。ILLを有機的に展開してはいるが、三田の利用者からは現物を側において欲しいという要求は相変わらず根強い。

以上のような要因から、図書館の様相は一変している。1階のカードボックスは消えオープンエリアに、奥の新聞閲覧コーナーはAV視聴コーナーに、レファレンス・カウンターは物理的に半分になりCD-ROMコーナーに、3階和雑誌、4階洋雑誌となり総合資料室的な機能を維持することが出来なく

なった。このことに対する教員の不平・不満は根強い。また、昔から持っている図書館機能が変革することに不平をもらす利用者もいる。

3. 教育支援から研究支援へ

物理的な問題として解決しがたい書庫と閲覧室問題を抱え、頭の痛い日々が続いているが、専門職としての図書館員が次の世代に向けてやっておかねばならないことがある。学生（修士課程を含めた）に対するサービスは、あるいは学生に焦点を合わせたサービスは、一定の評価も受けているし、かなりこなしているという自負を持っている。19年前の新館オープンにおけるコンセプトは見事に実現したと言える。つまり、教育支援については、サービス内容、スタッフ等一定のレベルを超えたサービス展開がなされていると考える。

一方、教員、大学院生（博士課程）へのサービス支援については、量的な意味での最大の利用者である学生に対する支援と比べると図書館サービス運営において検討する必要がある。

組織は生き物だから当然呼吸をしており、ある時は膨らみ、ある時は縮小する。19年前の資料の集中管理によるサービス展開というコンセプトを生かしながら、資料あるいは主題の分散化によるサービス展開を検討する時期に来ている。

カリフォルニア大学のパークレー校では、メインライブラリーと学部生用の図書館の他に、23のブランチライブラリーがあり、それぞれの主題ごとに分散しており、同時に主題専門家としてのライブラリアンが配置されている。アメリカとの比較をそのまま慶應に当てはめる気は毛頭ないが、今後の図書館運営における方向性を示していると考えられる。

研究支援に対応できる「物」については、創立150周年記念事業での施設面の拡大を期待するとして、「人」と「金」についてはメディアの責任において、「人」は育て、「金」は集める図書館運営が必要になる。「人」については後述するとして、「金」については、メディア組織のなかに事業部を作る事で収益を上げ、非営利組織に経営的コンセプトを導入することで事業化する戦略も視野に入れている。

4. 図書館員の養成・育成計画

①プロフェッショナルイズムの萌芽

異文化コミュニケーションの世界では、良く語られることだが、文化とは、「価値観」という核を「常識」で包み、その一番の外側は、常識を包むかたちで「行動」とか「もの」で包まれている。従って我々が異文化に接するときは、最初に「行動」「もの」に触れることになるが、文化が「行動」「もの」にあらわれるまでには、その文化の常識さらには、底辺に価値観があることを認識しなければならない。

実際に、欧米のプロフェッショナル・ライブラリアンと仕事をする中で、その行動パターンから文化・常識・価値観を知ることができ、専門職としてのコンセプトとその実力を知ること、目標を持ちそこに到達する方法も学ぶことができると考える。そのために積極的にスタッフを海外へ派遣することにしている。

昨年度は、海外派遣（先方から要請のあったもの）、海外研修（育成のために派遣するもの）に延べ14名を派遣している。個々の報告については、別の紙面で研修者それぞれがその成果と実績を示してくれているのでご一読願いたい。

因みに、今年度も8月現在4名を（環太平洋電子図書館会議、UCSD交換プログラム、洋古書修復技術とILLサービスの研修・視察）海外研修に派遣した。

②アーキビストの養成

三田メディアセンターでは、2年前に「日本石炭産業関連資料コレクション」を購入した。この内容は北海道の大手炭鉱会社の一次資料、労働組合の一次資料である。具体的には、三井鉱業、三井鉱山、北海道炭鉱汽船、住友鉱山等の総務、労務、鉱務、測量、会計、取締役会議事録が明治から閉山まですべて網羅されている。現在、目録・データベース作成プロジェクトと研究プロジェクトが動いており、11月に中間報告としてワークショップを開催する。

1名の図書館員がこの目録作業に従事おり、作業を通じてアーカイブの目録作成方法やアーカイブを利用しての研究手法、研究者の資料へのアプローチの仕方、研究手法を知ることがアーキビストへの第

〈特集〉新世紀への人材育成を目指して：メディアセンターの研修プログラム

1歩と位置づけている。因みにこのプロジェクトは2年計画である。

③書誌学にアプローチできる図書館員

斯道文庫の協力を頂き、今年度から「和装本目録研修」を開始した。この研修の目的は、和装本や漢籍の目録をとれるカタログガーを少しでも増やすことにある。決して書誌学者を養成するのではない。しかしながら、書誌学を専門にしている研究者と共通の言語を持ち、目録作成、選書判断において図書館員として研究者と同等の対応ができなければ、この種の資料を多く保有している三田メディアセンターでは、業務に支障をきたすことになる。表紙、封面、首日、本文巻頭内題、版式・写式、尾題、跋・後語等、刊記・奥付・奥書、その他特記事項を確認したうえでの目録作業は、当然書誌学をさわることになる。現在、3名がこの研修を受けているが、12月以降メンバーの追加も考慮しながら、一度研修の評価をすることを考えている。

④主題専門家の育成

経済学部の教員との共同プロジェクトとして「慶應義塾図書館所蔵ドイツ語雑誌（経済・社会・歴史）の書誌検索と解題作成」が3年計画で今年度から動き出した。この研究の目的は、ドイツ語雑誌の書誌事項の検索・分析を通じてその内容分析を行い、雑誌の解題を作成しドイツ語雑誌の知識の体系化をはかるものである。2名の図書館員をこのプロジェクトに参加させているが、二人の使命は検索・調査作業ではなくて解題作成にある。その作業は研究者により近いものになり、欧米の図書館員なら当たり前サービス展開している主題知識をもつことと、雑誌の書誌・内容に関する知識を体系的に利用者に提供する能力を持つことを目的としている。

⑤デジタル・リサーチ・ライブラリアンの養成

三田メディアセンターでは、平成12年度の事業計画のひとつとして、経済学関係の資料をデジタル化することで研究データベースを作成する事業を開始した。この研究データベースのタイトルは「Biographical Database of Keio Economists（仮称）」で、慶應義塾の経済学者達の人名辞典を作成し、慶

應義塾の経済学の歴史を示しながら著作目録・研究文献にリンクさせ書簡、顔写真、自筆ノート、講義ノートを画像データとしてリンクすることを計画している。図書館員として、貴重書担当、マルチメディアサービス担当、レファレンス担当の5名が参加し、経済学部から3名の教員がプロジェクトメンバーとして参加している。但し、今年度の丸善展示会として「慶應義塾と経済学」が開催されるが、必ずしもこのプロジェクトとはリンクしない。電子図書館プロジェクトは来年以降も計画しており法学部との共同研究、文学部との共同研究等を企画している。

⑥現場の教育者の養成（臨床医も講義をする）

三田メディアセンターでは、現在二つの講義を担当している。「レファレンスサービス論」「研究情報処理」。このことは、教えるという視野からもう一度業務（サービス）を見直す良い機会になることと、日常の業務から気分転換をはかれることにある。また、講義を受ける側は、より実際の図書館利用に則したレクチャーをうけることで理論で学んだことをより具体的に実践で使える確信を得ることが出来る。

5. さいごに

インターネットを介しての情報検索・収集が可能になり、慶應義塾図書館は、グローバルなリソースシェアリング（相互貸借、ドキュメント・デリバリー・サービス、分担収集等）実現に努力しなければならない。一方において、「変わってはいけないもの」文明の継承、知的生産、人格の陶冶という大学の使命を支援する図書館機能も持ちあわせなければならない。21世紀の慶應義塾図書館は専門職としてのコンセプトをしっかりと持った図書館員が支えていくことになる。

三田メディアセンター研修会

かとう よしろう
加藤 好郎

(三田メディアセンター事務次長)

1. 研修会の立ち上げ

三田メディアセンターでは、平成12年度より三田メディアセンター研修会を立ち上げた。その目的は次のとおりである。①メディアセンターの職員の知識を深めること。②メディアセンター職員の技能を高めること。③メディアセンター職員の研究意欲を高めること。④メディアセンター職員であることと同時に、大学職員としての感性をもたせること。平成12年度の研修目的は、前述のことを踏まえながら、三田キャンパス上にある研究所、センター等の現状把握と、事業目標および業務内容を確認することで知識を膨らませることに主眼をおいている。同じキャンパス上にありながら、普段どのような事業目標のなかでどんな業務が行われているかを知ることが日常業務を遂行するうえで必要不可欠なことと考えるからである。同時に、このことは、近い将来三田メディアセンターの事業展開と他部門とのそれを考えたときに、業務の擦りあわせを通して共同事業の開発、あるいは、組織の再編成などに役立つものと考えている。

2. 研修会の運営方法

平成12年度の運営方法は、次のとおりである。

① 研究所および各センター等の所長を招いて講演をしていただく。講演内容は、「設立のコンセプトの説明」「図書等の所蔵資料の紹介・説明」「メディアセンターへの要望」「メディアセンターとの今後の共同事業展開の可能性」等を中心に講演をお願いしている。開催頻度は、毎月1回で5階の研修室を使用している。

② 研修委員は、責任者：加藤、渉外係：遠藤、資料係：永嶋（布目と5月交替）、会計係：古賀、会場係：保坂の5名で構成されている。今年は三田キャンパス北館を会場に、5月22日に私立大学図書館協会国際図書館協力委員会主催の国際シンポジウム、7月14日の慶應義塾図書館・早稲田大学

図書館主催のOCLCのシンポジウムが開催されたため、研修委員はおおいにその活躍の場を拡大した。因みに12月には、北館で国公立大学図書館協力委員会主催のシンポジウム（21世紀のレファレンス・サービス）が開催される予定である。③ 予算は、今年度は30万円を計上しており内容は、講師謝礼。

④ 研修対象者は、基本的には三田メディアセンターの専任職員、嘱託としているが、希望があれば本部を含めた各地区からの参加も歓迎している。

3. 研修会実績

第1回 4月20日（木）斯道文庫 講演者：高橋智助教授、参加者 31名

内容：三田メディアとの相互補完（和装本、東洋学研究書等）、慶應義塾全体の貴重書目録・漢書目録の作成について

第2回 5月20日（木）福澤研究センター 講演者：坂井達朗センター長、参加者 26名。

内容：センターの沿革、慶應義塾入社帳、福澤書簡集の再編纂、蔵書および所蔵資料の概要と整理方法等

第3回 6月15日（木）メディア・コミュニケーションセンター研究所 講演者：関根政美研究所長 参加者 21名

内容：新聞研究所からの沿革、マスメディアに関する教育と研究、インターネットによる研究成果の公開について

第4回 7月21日（金）アートセンター 講演者：鷺見洋一センター長 参加者 13名

内容：COEプロジェクトの紹介、創造的デジタルメディアの基礎と応用、ジュネスティック・アーカイブ・エンジン、4つのテーマでアーカイブ構築①土方巽②イサム・ノグチ③滝口修造④博物図鑑、NDC分類の限界とアーカイブ分類の必要性等

4. 研修会予定

第5回 9月28日(木) 知的資産センター 講演者：
清水啓助センター長

第6回 10月19日(木) 言語文化研究所 講演者：
大津由起雄教授

第7回 11月16日(木) G-SEC 講演者未定

第8回 12月14日(木) HUMI プロジェクト 講演
者未定

第9回は2001年の1月、第10回は3月に予定して
いる。第10回はメディアセンター担当理事から今
後のメディアセンターの展開について話を伺うこと
も考えている。

5. 研修会の思わぬ副産物

第1回の研修会のことで斯道文庫と調整している際
貴重書室にある和装本の滞貨の整理について高橋助
教授と話をする機会があった。滞貨の解消と和装本
目録研修とをリンクさせられないかとの話になり、
7月4日に「和装本日録研修公開講座」と銘打って
高橋助教授に講義をしていただいた。その後、7月
14日には、関場斯道文庫長からも講義をしていた
だき、そのことを通じて和装本日録研修受講者の希
望者を募り、現在3名(山中、筒井、保坂)が受講
している。この研修は12月まで続け、その後受講
生を増やしながら継続していくことを考えている。
一人でも多くの和装本(漢籍も含める)の目録をと

れるスタッフを育てたいと考えている。尚、和装本
の滞貨は現在すでに解消されている。

6. 研修会とは別の研修紹介

慶應義塾の学事振興資金による研究として、「慶應
義塾図書館所蔵ドイツ語雑誌(経済・社会・歴史)
の書誌と検索と解題の作成」というプロジェクトに
2名のスタッフ(古賀、村田)を参加させている。
プロジェクトの内容は、18・19世紀あるいは20世
紀に公刊されたドイツ語雑誌(廃刊も含めて)の書
誌事項を探索し、体系化し、そして解題を作成する
ものである。このプロジェクトを通じて、ドイツ語
の知識と、雑誌の書誌・内容についての体系的な知
識が得られることを期待している。

7. 今後の研修会の展開について

今年度の研修会の成果、反省を踏まえて来年度も継
続していくつもりだが、主題専門家、図書館のマネ
ジャー、システムライブラリアン、アーキビストと
いった研究支援に耐え得る、いわゆる専門職を育成
するための研修会を企画・実施していきたいと考え
ている。

また、1997年の6月から私的な研究会としての「抄
読会」を継続的(月2回)に実施しているが、この
活動も研修会とのすみわけも考慮しながらより充
実・発展させていきたいと考えている。

三田メディアセンターニュース1

土曜日の開館時間を1時間延長

秋学期授業期間中の土曜日の開館時間を1時間延
長し、18時閉館が19時閉館になりました。

学部生への貸出冊数を増冊

9月1日から学部生への貸出冊数を5冊から7冊
に増冊しました。

自動貸出機の導入

秋学期授業開始にあわせて、図書館1階メイン
カウンター前に、自動貸出機を1台設置しまし

た。これによって、利用者自身で貸出手続きがで
きるようになりました。

ただし、この機械で貸出手続きできるのは次の
場合のみです。

- 1 磁気カード方式の学生証を所持している方、
SFCの磁気カードを所持している方対象
- 2 バーコードラベルが貼られている図書が対象
(雑誌、辞書、辞典類はバーコードラベルが貼っ
てあっても貸出対象ではありません)

上記以外の場合は、従来とおりのメインカウン
ター貸出窓口において手続きを行います。

政策・メディア研究科に塾内留学して

やなせ みちよ
梁瀬 三千代

(三田メディアセンター課長代理)

はじめに

平成10年4月より平成12年3月までの2年間、政策・メディア研究科へ第4期職場研修生として塾内留学をした。レファレンス・サービス担当を7年間担当し、この機会に、大学院生という立場からメディアセンター（以下、MC）を利用することができたことは大きな収穫となった。

2年間の大学院生活については個人のホームページ、<http://www.sfc.keio.ac.jp/~yanase>に履修科目、授業内容、修士論文などを掲載している。

1. 研究テーマ

「慶應義塾大学図書館における知的財産の活用法ーメディアセンターの蔵書に見る一考察ー」とし、メディアネット本部より5MC、過去4年分の受入・貸出データ入手し、そのうち三田、日吉、湘南藤沢の3MCを対象に解析することとした。3MCとした理由は、蔵書および収集資料の主題が経済、法学、経営など重なる部分があったからである。

研究内容は、当初、MCが所有する資料群の価値について、資料経営論、図書館＝博物館論の面から論じようとしていたが、ゼミ発表で回を重ね、最終的には図書館統計データを活用した資料マネジメント、意思決定論（管理面、業務面、利用面）へと変化した。逼迫した書架スペースの改善には、図書館統計データの有効活用が必要であることを訴え、図書館の受入・貸出データ、特に今回の研究で初めて名付けた0件データ（貸し出されていないもの）は資料を動かす時の意思決定支援に有用であることを実証した。そして図書館統計データに基づいた資料の移動は利用者へのサービス向上につながるということを導き出すことを最終目的とした。

調査方法は、文献調査、データ解析、ヒヤリング調査（山中資料センター、白楽サテライト・ライブラリー）、アンケート調査（レファレンス分科会メイリングリスト）とした。

また、活用できる図書館統計データを抽出するためにKOSMOS-IIへの提案を行った。これらについては、平成12年3月27日に人事部が主催した報告会で発表し、今年度発行の『塾監局紀要』にも原稿を提出した。

2. 業務への反映

平成12年4月より職場復帰し、6月までは貴重書室に席を置き、貴重書室担当業務、三田テクニカルの開設準備などを遂行した。

6月からは資料マネジメント担当として、選書と三田テクニカルを業務としている。この2年間、保存書庫へ足を運び、三田、日吉、湘南藤沢の3MCを利用し、大量な図書館統計データを見たことは、三田MC、全塾の蔵書構築を考える上で非常に役に立っている。

また、現在、全塾リソースシェアリング委員会のメンバーとして雑誌重複の統計データと取り組んでいるが、研究テーマを補充する上でも大きく、何らかの成果を出したいと考えている。

おわりに

研修期間中、湘南藤沢MCをはじめとして、他地区のMCを利用し、保存書庫を直に見たことで、地区のサービス、全塾のサービス、利用者へのサービス、蔵書構築などを改めて考えさせられた。

湘南藤沢MCは時代に即した資料を揃え絶えず変化していくMoving Libraryとして、日吉MCは主題範囲を多くカバーし活発に動いていくWorking Libraryとして、そして三田MCは長期的な展望を見据えながら全塾の資料保存という役割を担うReserving Libraryとして展開していくことも考えられるのではないだろうか？

最後に、研修へ快く送ってくださったMCの皆様にご心より感謝致します。2年間貴重な時間を本当にありがとうございました。

企業等派遣研修を終えて

むらた ゆみこ
村田 優美子

(三田メディアセンター)

企業等派遣研修は、民間企業等への派遣を通して顧客満足度を高めることを中心に必要な知識、技能を習得させるために創設された制度で、私はその1人目として、平成11年10月4日から12月27日までの約3ヶ月間、東京都港区台場にある、ホテル日航東京にて研修をさせていただいた。

ホテル日航東京は、平成8年(1996年)3月にオープンした。「東京バルコニー」というコンセプトのもとに、光、海、風という周囲の環境を生かしたアーバンリゾートホテルである。

研修内容や、研修中に感じた習慣・文化の違いなどにも触れたいが、以下では簡単に研修内容を説明し、感想を述べることにしたい。

研修の初めの2ヶ月はベルガールの仕事を経験した。ゲストがホテルに入ると初めに玄関やロビーで応対するスタッフである。はじめの1ヶ月間はスタッフの1人に一挙一動チェックを受けながらゲストを案内し、残りの1ヵ月間は単独で業務を担当した。研修生バッジをつけているとはいえ、ゲストにとってはホテルの従業員にほかならず、緊張の毎日であった。

最後の1ヶ月は、営業の方と一緒に取引先の訪問をしたり、フロントやレストランでの対応、客室清掃業務などを見学したりした。

研修のなかで特に印象的だったのは、立ちっぱなし・歩きっぱなしの仕事でも常に笑顔でゲストに接している研修先のスタッフから感じられた、サービス業のプロとしての姿勢である。業務内容が異なるとはいえ、メディアセンターはホテルと同じサービス業。私も相手が満足するようになると思う気持ちを大切にするように心がけているつもりではある。しかし「たった1回のあなたの手抜きがこのホテルをつぶしてしまう」という教育をうけ、毎日稼働率や客室単価の動きを目の当たりにし、ゲストからの対応の良し悪しをコメントシートに書かれる彼らの緊張感と、自分がメディアセンターの業務で感じている緊

張感との間には、残念ながら差異があるように思われた。

私たちのサービスは、数字や他との比較という形で評価されることはほとんどなく、大学図書館の存在意義は所与の前提として、あらためて問われることはない。ともすれば研究教育機関、さらにはその図書館、という大事に守られた環境に慣れ、甘えてしまいがちである。

民間企業と大学図書館との差異を全く無視することもできないであろうが、本質的には同一であると感じた。研修先で私が感じた緊張感は、単にゲストの顔色や数字を気にするという小手先のものではなく、常にゲストが何を望んでいるのかを考え、よりよいサービスを目指そうという高い意識に基づくものであったからである。

常に利用者のニーズ、大学や社会の動きを把握・先取りしてそれをサービスに反映させようとする姿勢。メディアセンターの顔であるという意識と責任感。これらを「自ら」厳しく維持していかないと、よりよいサービスを提供するどころか現状維持もおぼつかなくなってしまう。研修を通して、そんな危機感を抱いた。

研修から1年が経つ。「左様でございますか」「かしこまりました」と思わずIについて出てしまいそうになったのも研修後数週間のことであった。けれども、ふっと気が抜けて甘えてしまいそうになるとき、あの3ヶ月を思い出すようにしている。業種の違いを超えて学んだ「仕事」「サービス」というものに対する姿勢は、これからも自分にとって大きな財産であり続けるだろう。

最後にこの場を借りて、このような機会を与えていただいたことに深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

医学メディアセンターの研修

かとう こうめい
加藤 孝明

(医学メディアセンター課長)

大学医学図書館員の養成には、避けて通ることのできない必修科目があって、それは：

- ①医学用語
- ②医学情報の流通機構
- ③「医学教育・研究の方法論」についての知識である。

「①医学用語」については、米国NLM (National Library of Medicine) のMeSH (Medical Subject Headings) という主題検索用のキーワード集を操らなくてはならないので、データベース検索、図書分類を仕事とする部門の館員にはTerminology習熟はぜひ必要である。それ以外の館員にとっても、主な利用者である医学部教職員学生が何気ない質問 (quick reference) で使用する専門用語や略語をある程度まで理解 (あるいは推測) できないと、簡単な案内・利用指導が覚束なくなる。

新米の貸出係が最初に覚えるのは、「in」は内科で、「ped」は儿科などという隠語めいた略称で、そのうち段々と製本雑誌の背表紙の意味も分かるようになってくれば、監督責任のある閲覧主任はだいぶ安心するのである。

MeSHの存在を知らない学生はデータベースのフリーターム検索で時間を浪費する傾向にあるが、統制された (周到に組み合わせられ、相互の包括関係が定義され明示された構造を持つ) キーワード・ツールによって初めて効率的なノイズレスの検索が可能になるのであって、この間の事情は、インターネットのHP検索で、一語入れても何千何万件と候補がリストされ、絞り込みに苦労した体験をお持ちの方なら容易に理解できよう。フリーターム検索におけるブラウジング効果というものは、あるにはあるが、それは精確な検索がなされた後のおまけのようなものである。

「②医学情報の流通」といっても、図書館では情報を載せた「文献」が利用者にとってどう使われているか

が主な関心事で、さらに文献とその搭載媒体の生産事情・流通機構が分かれば、蔵書収集やレファレンス・サービスに大いに役立って、利用者のニーズに合致したより良いサービスができる、というのが今までの考え方であった。ところが昨今は急速な電子ツールの発達によって、利用者自身が最も自分にフィットした情報媒体を選択し、これを自分の机上 (カスタマイズしたPC) で他の媒体と組み合わせながら、情報を探し吟味し加工し貯蔵するという環境になってきている。したがって医学図書館員 (この呼称は古臭いが、不明瞭なカタカナを使うのが不便なのでご容赦願いたい) は、ネットワークの組立からホームページ経由の情報源へのリンク技法まで、いちおう理解し、また自力で簡単なメンテナンスをする程度の技量を持つ必要がでてきた。このような環境での医学研究情報の収集と加工・蓄積については、まだ今のところ文献時代の旧式な流通機構を理解していれば類推が可能な範囲であるが、今後もその既成概念を固定して医学図書館を運用するのは危険である。頭の中の保守主義は何ら益がない。医学専門雑誌の生産側たる出版界でも、電子媒体へのシフトはこの二、三年うちに試行錯誤を繰返しつつ急速に実用に耐え得るものとなってきた。ところが価格面ではまだ「実用に耐え得ない」のが現実である。近いうちにより低価格の新テクノロジーが実現する可能性は大いにあり得るから、あまり商業ベースにみずから乗って踊らされるのも不体裁、そのへんの塩梅が殊更にむずかしい。

「③医学研究・教育の方法論」を理解する事は、他の分野の専門図書館員に通底する必要作業である。自然科学・応用科学は分かりやすい方法論を使用しているもので、いまさら説明の余地すらないほどである。余分な事をいえば、文科系の方法論の隅々までを比較理解しておく事は案外に等閑視されており、医学図書館員を総合図書館員として転用する際に大

きな障害となっている。分野の研究方法論が違えば、専門図書館の運用方法も違ってくるので、時には文科系・理科系の館員は互いに全く別の職種に見える事すらあるのは困ったものだ。

このあたりは、研修システムの設計ミスというよりは、図書館学自体の貧困からくるもので、文献に研究成果を記録し、これを利用しつつ、さらに研究を生み出していく学術研究・調査のシステムが、どのような方法論によって実行されているのかを精密に把握しないまま、たんに文献の流通と管理という皮相な現象面における対症法を論じてきたためである。知識の発掘・流通ルーティンが文献の生産・利用パターンに対応している事を深く追究してこなかったのは、その余裕がなかったから、というよりは、ひとつの大学図書館において、大規模なあらゆる分野を混交した総合図書館運用の必要が、さし迫った課題とはなっていなかったからである。

しかし、これからは、そうもいかない時代と変わってくるので、人材を最大限に活用する必要からいっても、館員が個別研究者の研究方法論と教育の手法を最大限に精密に把握するところから、その専門性を伸長していく事を始める頃合いと思われる。

以上の3項目のうち「1 専門用語」は、津田良成名誉教授（もと北里記念医学図書館主任司書）が1955年頃より始めた館員教育（in-service training）の柱となっていて、当時主流のドイツ語に加え、ラテン語初歩の習得がカリキュラムに組込まれていたほどである。教育そのものは当番発表者が主に二次資料（参考図書などのtool類）の使用方を解説し、それに他の出席者が徹底した質問をして、さらに理解を深めるというものであったが、講師を招いての基礎医学概説（生理学、医化学、内科学、解剖学など）

や、医学部講義の聴講も行われ、「2 医学研究・教育」の実際に触れさせ、「3 研究方法論」を理解させようとする努力がなされた。これに館員は常勤、非常勤を問わず、館務にさしつかえない限り出来る限り出席する仕組となっていた。

後にこの研修は、館員が当番で発表した内容を掲載した雑誌「きたさと」として定期刊行されるまでに発展した。その後、研修は1970年代初めに惜しくも中断されたが、1980年代に入ると大沢充副所長（当時）のもとで外国記事輪読会として復活し、勤務終了後に有志館員が利用者サービスの基本文献をレビューした。

間をおいて佐藤和貴事務長（当時）時代の1999年より輪番制の報告発表会として再出発し、現在は毎週金曜日の開館前25分間を利用して継続されている。研修での主要発表は、医学メディアセンターのホームページに記録・公表されているので、お暇な折に参照されたい。（<http://www.lib.med.keio.ac.jp/index-jp.html>）

日本医学図書館協会が毎年行う研修会は、当センターも頻繁に利用しており、館員には「基礎研修会」「継続教育コース」「研究会」と、初級から上級まで3段階のコースのすべてを経験させるようにしている。大勢の参加者が集まり、期間も短いのので、あまり突っ込んだ内容とはならないが、現在のトピックスが取上げられ、討論に参加できるので、特に他館種より転動してきた館員には、よい刺激となっている。

医学メディアセンターは医学部のほかに病院というサービス対象を抱えているため繁忙で、組織的な部内研修が難しいが、扱う主題からいえば高度な研修が必要とされている分野である。さらに工夫を重ねていきたい。

メディアセンター（全塾）ニュース

どこでも返却

平成12年4月から図書の返却が貸出地区と異なる地区でも返却できるようになりました。

経営管理研究科（KBS）図書館図書の取り寄せサービス

平成12年4月からKBSの図書（一部対象外あり）を、教職員・大学院生に限り取り寄せることができるようになりました。

海の向こうで図書館員 — UCSD での半年間 —

ほ さか む つ み
保坂 睦

(三田メディアセンター)

はじめに

University of California, San Diego(以下, UCSD)との図書館員交換協定が結ばれたのは1999年3月のことである。私は第1回目の派遣図書館員として、UCSDのSocial Science and Humanities Library(以下SSHL)で半年間の業務研修を行うべく、1999年7月1日に日本を発った。三田メディアセンターではレファレンスのセクション(当時)に所属していたため、UCSDでは主に、調査・研究支援を業務とするResearch Serviceを起点に研修を行った。

研修内容

この研修の目標は、大学図書館における利用者サービス全般の調査・体験と各地の図書館見学である。研修先のSSHLでは、各セクションのLibrarianへのインタビューやミーティングへの出席、カウンター業務等の現地研修を行った。UCSDは比較的Aggressiveな利用者サービスを特徴としており、利用者と積極的なコンタクトをとっている。Webでのコンテンツ提供や各種Introductionの充実ぶりはさすがであった。好景気を反映してか、Librarianのステップアップ転職も盛んなため、職員の出入りが激しいところにもお国柄を感じたものである。

UCSD以外の図書館としては、西海岸ではSan Diego State University, University of California, Berkeley(UCB), 同じくLos Angeles(UCLA), Stanford University, 東海岸ではHarvard University, Yale University, Columbia Universityの各図書館をそれぞれ見学させてもらった。UCSDのLibrarianから無理矢理、他大学のLibrarianを紹介してもらい、見学を要請するのだが、アポイントやホテル・交通機関の手配にてんてこまいであった。見学旅行の中で印象に深かったのは、見学を受け入れてくださった方々が実に親切であったことと、Renovation(改築)を終えた、あるいは途中という図書館が非常に

多かったことである。そのためか図書館の設備は、ネットワーク関係も含め、ゴージャス極まりないという状況であった。現アメリカ社会のオカネモチぶりがうかがわれる。

英語生活

研修に行く前になにより心配だったことは、もちろん英語である。学生時代の私にとって、英語は筆頭苦手科目であった。事前の英語学習はまったくといっていいほどできず、不安は増すばかり。7月から1ヶ月間のEnglish Language Programにも通ったが、このクラスではそれほど上達したとは感じられず、結局最後まで、自分の英語に自信はもてなかった。しかし、実際の生活ではとにかく話をしないと始まらないので、英語に対する度胸はついたのかもしれない。こんな私が曲がりなりにも半年間、図書館で研修し、生活基盤を整え、道を聞きまくったという実績だけはあがったのだから、英語が苦手な方も、ぜひ海外研修にチャレンジしてほしいと思う。

おわりに

この研修で私が得たことを挙げればきりが無い。さまざまな図書館のサービス、ホスピタリティに触れられたこと、その図書館のスタッフと知り合いになれたこと、英語と多少お近づきになれたこと、各種交通機関の使い方、部屋の探し方、etc。図書館の研修だけでなく、海外生活の経験は、私にとってかけがえのない宝となった。UCSDのスタッフが、いつでも笑顔を忘れない姿勢で、しかし真剣に仕事にと向き合っている姿を、これからも忘れることはないだろう。国は違っても、図書館という場所を舞台に仕事をしていることに変わりはないのである。最後になったが、忙しい最中に気前よく、私を研修に送り出してくださった三田メディアセンターの皆さんに感謝の意を表したい。

UCSD 体験記

— 研修を通して感じたこと —

さとう ゆりえ
佐藤 友里恵

(メディアセンター本部係主任)

1. はじめに

UC San Diegoで研修する機会を与えていただき、2000年1月から6月までの間、Geisel LibraryのCatalog Dept.に席を置いて、目録を中心とした業務研修を受けてきた。この間、他大学図書館等10機関を訪問見学し、それぞれの図書館やテクニカル部門の組織構成、業務の流れ、目録(MARC)、日本語資料の扱いについて話を聞いた。この6ヶ月間の体験の中で自分が感じたことを以下に簡単に書き連ねてみたいと思う

2. 研修期間

まず第一に、6ヶ月間という時間であるが、これまでの研修のような長期計画でもなく短期決戦でもなく、妙に中途半端な長さではないかと研修前から感じていた。その感覚は研修期間中も続き、そして研修後も払拭することはできなかった。しかし、これは単に個人の姿勢の問題なのかもしれないと反省もしている。私の場合は図書館見学に多くの時間をとられたことも、中途半端さの原因となったのかもしれない。

3. 研修の進め方

研修を進める上で、当然のことではあるが自己管理は必須である。加えて積極性と、良い意味での凶々しさも必要である。しかし、ある事情によって当初の第一目標を失い、次なる目標や全体のスケジュールを設定するまでに相当の時間をかけてしまった。そして各担当のスタッフはみな多忙であり、ちょっとした時間でもとってもらうのがなかなか難しく、思い通りには進められないのが現実であった。

相手が忙しいだろうと遠慮していても、何もできないし、何も進まない。押しの手で粘ればなんとかできたかもしれないと、今さらながら思うのだった。

4. 日本に対する興味

研修の最終週に、Catalog Dept.のスタッフを対象にして、慶應のテクニカル業務(集中処理機構)についてのプレゼンテーションを行った。常々日本での目録業務等に興味を抱いていたようで、彼らからはこの後、数多くの質問を受けた。それほどまでに興味があったのかと正直驚いたのだが、目録業務だけに限らず、慶應の全体の状況を知って面白そうにしている様子を見て、自分なりの達成感を得ることができた。見学先でも、日本での様子について聞かれることが多く、中には、自分が質問をしに行ったのか、慶應のOPACの説明をしに行ったのかわからなくなったところもあった。私の英訳の説明では誤解を生じているかもしれないという不安もあるのだが、そこは後続の方、あるいは、この先その図書館を訪問される方に訂正していただけることを期待している。

5. Catalogerの意識

少なくとも私が見学した図書館においては、よりよい目録をつくりあげていこうとする意欲と、そこに誇りをもっている様子が印象に残っている。目録に対する思い入れは相当なものである。

また、彼らと話をするたびに、目録概念の違い、制度の違い、システム等の環境の違いというものも考えさせられた。今後、国を超えて、言語を超えて動こうとする時には、どうしても壁になってしまうものだろう。一方に寄り従って解決することでもないので、ある程度歩み寄りつつどうにか解決できないだろうか、現在データ整備を進めながら考える日々を過ごしている。

6. さいごに一言

以上が研修を通して特に強く感じたことである。国内外を問わず、今後の業務研修に出られる方にとって少しでも参考になれば幸いである。

環太平洋電子図書館会議に参加して

たなべ みのる
田邊 稔

(メディアセンター本部係主任)

つつい としこ
筒井 利子

(三田メディアセンター)

はじめに

今回の研修はシアトルのワシントン大学で開催されたPRDLA(Pacific Rim Digital Library Alliance) Membership Meeting(環太平洋電子図書館会議)への出席及びその周辺の大学図書館の見学をすることだった。PRDLAとは環太平洋諸国の大学図書館など13機関が参加するコンソーシアムで、主にCJKのインターネット経由での利用を容易にすること、人的交流や蔵書構築を含めた環太平洋電子図書館を構築することを目的としている

研修計画

今回、出席した会議は4月17、18日の2日間のみだったがその後周辺の図書館を見学するため、日程と見学先の検討を2月初旬から開始した。見学先については海外出張経験者に意見を聞き、最終的に会議が開催されるシアトルから近いバンクーバーのブリティッシュコロンビア大学(以下、UBC)アジアライブラリーに決定した。ここには慶應の図書館情報学科出身の権並恒治さんという方が勤めているので連絡をとりやすいということもあった。2月下旬には旅費などの見積もりをとり国外出張届を提出し、3月初旬に会議の登録や会議用のホテルの予約などをすませた。このころよりUBCの権並さんへメールするがなかなか連絡がつかない。電子メールは日本語で2通送り、その後英文でもう一度送り、最後にはFAXも送って出発前日ようやく連絡をつけることができた。後で先方にソフトがなくて日本語は文字化けして読めなかったことが判明した。海外へのメールは相手が日本人であっても英語で書くのが無難だと思った。

研修日程

- 4月16日(日) 成田午後発 シアトル午前着
- 4月17日(月) PRDLA会議

- 4月18日(火) PRDLA会議 午後図書館ツアー
- 4月19日(水) バンクーバー公共図書館見学
- 4月20日(木) UBCアジアライブラリー見学
- 4月21日(金) シアトル公共図書館 見学
- 4月22日(土) シアトル午後発
- 4月23日(日) 成田午後着

会議に参加して

会議は2日間とも、ワシントン大学のスザロ・アレライブラリー4F485室:ドナルドE.ピーターソールームで行われた。参加者は、我々2名を含め総勢25名であった。

広い会議室の真中に楕円の大きいテーブルがあって、そのテーブルを囲んで体格のいいアメリカ人や饒舌なアジア人達が足を組みながら意見を戦わすといった映画の1シーンをスクリーンの外から見ているかのような感じだった。会議は議事次第に沿って淡々と進行され、ほとんど発言できないまま終わってしまい、悔しい限りだった。発表用の資料も用意はしていたが、慶應に発表の機会は与えられなかった。おそらく、今回は早稲田大学図書館が招待されて発表した関係で、日本側の発表時間がなくなったからであろう。

今回参加の13機関の内、Z39.50サーバのTest Sitesを開いているのが、約7機関で、慶應とかソウル大は、寂しく「No Server」と書かれていた。私は、UCSDのMr.Karl LOに、慶應では年内にZ39.50サーバを立ち上げる予定であること、OCLCにメタデータを渡すための仕組みを作る用意があることを伝えるのが精一杯であった。Karlが「楽しみにしているよ」と言ってくれたので、いくらかでも救われた気がした。また、同席した早稲田の方々には、慶應のZ39.50サーバが立ち上がり次第テストさせてもらうように頼んでおいた。向こうからも是非お願いしますと言われ、お互い「早慶ILL」まで発展さ

せましようということ合意した。とにかく、今回参加された方々の大半は図書館の館長とか教授とか計算センター長とかお偉いさんばかりで、その場で意思決定ができる方々ばかりなのに対し、なぜ慶應はこんな何の権限もなく、何の発言もしない人間が来ているのかと思われたことだろう。次回行くことがあれば、少なくとも1名は権限のある者が参加した方が慶應のため、というか日本のためだとつくづく思った。ただ、個人的には、権限もなく経験も浅い我々にこのような貴重な機会を与えてくれた上司に大変感謝している。

見学先

(1) ワシントン大学スザロ・アレンライブラリー
会議2日目の午後に図書館員に図書館ツアーをしてもらった。スザロライブラリーとアレンライブラリーは建物が表と裏でつながっている二つの図書館で複雑な構造になっている。ILLセクションではワシントン大学も参加している日米DDS試行実験について質問しようとしたがあいにく担当者が不在のため、直接話が聞けなくて残念だった。



▲スザロ・アレンライブラリー 遠景

(2) バンクーバー中央図書館

有名な建築家が設計した建物でユニークな形をしている。入り口付近に自動貸出システムやCD-ROMコーナーがあり、国際都市らしく日本語・中国語など多言語コーナーが充実していた。

(3) UBC アジアライブラリー

UBCのアジアライブラリーでは、権並さんが資料を準備して丁寧に説明してくださった。アジアライブラリーは日本の政府刊行物受け入れセンターとして指定されており、日本語の蔵書数は北米でも有数の規模を誇る。また戦前バンクーバーで発行され

た「大陸日報」や1877年以来の日本人移民の資料など日系カナダ人史コレクションではカナダ最大である。現在ではアジア環太平洋国際関係学の研究教育支援のため、社会科学分野の日本語の蔵書を拡張していく予定である。

(4) シアトル公共図書館

いわゆる普通の公共図書館だったが、無料で利用できるインターネット端末が設置されている部屋があり、朝早くから使われていた。

研修後の様子

会議内容については帰国後に録音した会議録を聞き直し理解を深めた。システム関連では、Z39.50サーバの開発に着手し、年内にリリース予定である。また2000年7月14日(金)にはOCLCワークショップを開催し、Z39.50のデモを実施した。また、東工大ベースのILLシステムの導入も検討中である。UBCの権並さんからは帰国後もメールでレファレンスの質問をうけるなどその後も交流がある。今回の出張で海外研修についての抵抗感が多少緩和された。

後輩への助言

OCLCの動向、Z39.50サーバの開設状況、データフォーマット(USMARC)と文字コード(Unicode)、メタデータ(Dublin Core)などについて先輩職員等による勉強会を実施するなど事前に概略を把握しておく必要がある。また会議に参加するには十分な英語力が必要で、特にヒアリング能力をつけるべきである。そのほかにPC持参でメールやインターネット等を行う場合、海外のアクセスポイントと海外での接続方法を事前に調べておくことが大切である。メールはWebメール(インターネットさえつながれば、どこでも送受信可能なメール)のほうが安上がりで便利である。

おわりに

今回の出張は初めてのことばかりでとまどうことも多かったが、帰国してみると日常業務を離れての海外出張は貴重であり新鮮な体験だったと実感した。特に、会議に参加することで単なる見学や視察といった研修では得られない緊張感を味わえたことは大いなる収穫であろう。

アイルランドの製本屋とイギリスの図書館の訪問

いちこ けんじ
市古 健次

(三田メディアセンター課長代理)

出会い

1999年3月のある日、文学部の先生と塾員を介してアイルランドの書店兼製本屋であるケニーズが来館した。要修理本の存在、遠方からの来館、そして接することで製本の知識を習得して行けばとの上司の助言を得て、ケニーズに積極的に対応した。ケニーズは兄のコナーが書店を、弟のジェリーが製本屋をやっているとのことであった。

ケニーズにはフリートライアルで出来具合の確認をすることにした。貴重書・準貴重でなく、1800年以降の図書で、表紙がはずれた「ボードオフ」本と、全部表紙を張り替える図書を出すことにした。ボードオフ本の修理法は、背と本体を新しい革でつなぎ、その上に古い背の革を張る「リバックング」法である。1ヶ月位で修理された図書は戻ってきた。たまたま洋書店で古書に詳しい人が別件で私を尋ねてきた。仕上がりを見てもらうと、「VG」であった。

ゴルウェイ

アイルランドのゴルウェイにあるケニーズに行つて、どういう書店と製本屋なのか、製本職人の数、製本の工程を調べることを目的とした出張が実現した。ゴルウェイへは1999年9月2日に発った。ロンドンから飛行機でダブリンへ入り、国立図書館とトリニティーカレッジの見学をすませ、ダブリンから列車で3時間でゴルウェイに着いた。まず、ケニーズ書店を尋ね、そしてコナーが店内を案内してくれた。

製本屋は書店から車で10分のところにあり、書店の倉庫と一緒に建物であった。早速ジェリーが修理工程を説明してくれた。4、5人の職人が作業を分担して行っていた。最初に表紙に革を張る作業、次に紹介してくれたのは綴じる作業である。ソーイングスタンドに図書を挟み、セクション毎に針と糸で綴じるわけである。非常に作業が細かく、単純で

根気がある作業である。仕上げは金箔を^{こて}で背表紙や表紙に埋め込むトゥーリングである。1千度近くまで温めたアルファベットの文字、様々な模様の鍍金を正確な位置に埋め込む作業である。

慶應に来館した時に、製本は弟のジェリー一人がやっているとだったが、各工程に職人を雇っていることが分かった。そして兄コナーの書店が日本の大きな洋書店と取引をしていることを聞き、ケニーズ製本屋に親近感を少し抱くようになった。



見学

大英図書館(以下BLと略す)と、オックスフォード大学のボードリアン図書館への訪問には3つの目的があった。それは書庫環境の見学、請求記号ラベルの有無および、蔵書印と蔵書票の確認、そして閲覧室の利用である。閲覧への関心は、閲覧者の側に立って図書館を見る必要性を感じていたからである。

セント・パンクラスにあるBL新館の地下書庫は、厳重な扉を何回も通り、着いた所は、檻のような中に書架があり、勿論24時間稼働の空調に守られ、貴重な図書が並んでいた。現在アメリカで主流の蔵書票を用いず、「British Library」という小さな印を使っていたのは知っていたが、請求記号ラベルが背表紙に貼られているとは思っていなかった。貴重書

には余り貼らないのではと聞くと、「図書が多く、混乱を招くので貼っている」と答えてくれた。

一方、ボードリアン図書館は、新館と、あのデューク・ハンフリー図書室がある旧館からなっている。四季の温湿度の変化が東京ほど大きくないオックスフォードでは、ハンフリーの空調は、自然まかせだという。新館はやはり24時間空調であった。ハンフリーの書架にある古刊本は、ブックシェウに入れられているのもあった。聞くと、時代によって扱い方が変わるんだと言っていた。ここでは請求記号ラベルは貼ってはず、図書の見返しの部分に鉛筆で請求記号が書かれていた。慶應でもブックシェウをすべてはかせ、シェウにも請求記号を書けば、混乱は避けられると直感した。さらに図書を見ていくと、タイトルページの裏に蔵書印が押されていた。新館の書庫に入ると、埃を被った古刊本が配架されていた。その中には修理箇所が明記されたメモを挟んでいる要修理本もあった。それが目につ

くので、聞いてみると、修理費が十分に取れず、利用頻度を考慮して修理に出しているとのことであつた。

慎重に

印象に残ったのはやはりBLとボードリアンで、両図書館はイギリス屈指の大図書館。わが図書館でも参考になる情報を得られた。ケニーズ製本屋との関係で考えると、予算が厳しい状況においては、利用頻度に応じて修理製本に出すことも必要であろう。修理製本にしても、製本屋によって随分技量が違うと思う。ケニーズだけでなく、雄松堂を通じてのロス・アンジェルスにあるヘリテージ、ニューヨークのアンジェラ・スコット、ボストンのハーコート、そして月島にある個人経営のREIなど製本屋の情報が集まってきた。「修理製本は慎重に」をモットーに仕事を進めたいと思っている。

三田図書館・情報学会月例研究会

第102回

日時:1999年12月11日(土)午後2時~4時
 テーマ:情報検索における統計的手法
 発表者:岸田和明(駿河台大学文化情報学部)

第103回

日時:2000年3月18日(土)午後2時~4時
 テーマ:子ども読書年と国際子ども図書館-国際子ども図書館設立の意義
 発表者:亀田邦子(国際子ども図書館長)

第104回

日時:2000年6月10日(土)午後2時~4時
 テーマ:逐次刊行物の動向-価格問題と電子雑誌
 発表者:長谷川豊祐(鶴見大学図書館)

これらの研究会は非会員にも公開している。

また、年2回刊の機関誌Library and Information Scienceは、個人会費(年額¥3,000)機関会費(年額¥5,000)を支払った会員に送付される。

学会への入会、機関誌等に関する問合せは、慶應義塾大学内、三田図書館・情報学会事務局(Tel.03-3453-4511内23147)で受付けている。

EDC Basic Seminar に参加して

まつもと かずこ
松本 和子

(三田メディアセンター課長代理)

はじめに

1963年以來EU(欧州連合)の情報を市民・研究者に提供するため世界に約500以上(うち大学300)の機関にEuropean Document Center(以下EDC)が設置されている。EDCは欧州委員会の教育文化庁の監督下にあり、EUの官報にあたるOfficial Journal等が無料で寄贈される。三田メディアセンターは1982年EDCとなった。日本国内のEDCは駐日欧州委員会のもと、年に2回のセミナーや研修会を開き、情報交換、情報の更新を行っている。今回ブリュッセルで行われた研修はそのinternational版にあたり、各国のEDCのライブラリアンや、駐在欧州委員会の各国代表が参加してEUの動向やEDCで提供する資料について講義を受けた。研修プログラムは20年近い歴史を持つが、日本が参加したのはこれで3年目である。講義やディスカッションは英語かフランス語で行われるため、どちらかの言語でコミュニケーションが取れる必要がある。今回の参加者は英文の履歴書の提出と駐日欧州委員会の広報担当と英語による電話インタビューにより選考された。応募者は5名、その中から私と東北大学付属図書館のEDC担当の2名が参加することとなった。なお旅費・ホテル代等は全て駐日欧州委員会が負担してくれるが、参加の条件として、研修成果のレポートを英文で駐日欧州委員会に提出すること、日本のEDCセミナーで報告することが課せられた。

プログラム

研修は3日間(1月24日~26日)行われた。1時間の講義が13コマ。その他1日目の午後にディスカッションと3日目の最後に欧州委員会の図書館の見学が組み込まれていた。講師はEDCに送られてくる資料を刊行する機関の担当者その他、今年2002年の通貨ユーロの実質的誕生に伴う広報活動

や、問合せ窓口の担当者も含まれていた。

研修成果

①情報のアップデート

今回の研修内容はEDCの資料を扱うライブラリアンにとっては情報のアップデートという側面が強かったと思う。まったくの初心者では資料そのものの解説等がなく、情報流通に関する説明に重点が置かれていたので理解することが難しいのではないかと思われた。日本では資料に関する研修が年に1~2回駐日委員会主催で行われている。今回の研修にはこの国内コースを受講済の者を対象にした方がより効果があったと思う。

②EU情報提供政策ビジョンとEDCの今後

EUは紙での情報提供をWebでの提供に変更する方針であることが示され、各庁が行っているWebサービスを統合してひとつのインターフェースで検索できるように計画中であると知らされた。現在EUのWebサイトは各種の情報が提供されているが、残念ながら情報がどこにあるのかわかりやすいとは言えない。ただし公用語である11ヶ国語でページ維持すること(今後参加国が増えれば15ヶ国語)を考慮した上で使い易いページをデザインすることは大変な作業になるだろう。

また今回印象に残ったサービスの一つにEurope Directというテレフォンサービスがある。外部企業に委託して訓練された25名のオペレータがヨーロッパ中からかかってくる市民からの電話でのクレームや問合せに対応するサービスである。更にホームページ上での対話や直接対話の機会を増やしたりと市民への情報提供に積極的に取り組もうという姿勢がうかがえた。マルチ言語、マルチ文化をどう統合していくか、EUは世界の先達となるべき方法を積極的に探っており、それは見習わなくてはな

〈特集〉新世紀への人材育成を目指して:メディアセンターの研修プログラム

らないと思う。EDC ライブラリアンはこういったEUの姿勢に注目し、サービスに結びつける努力が必要となるだろう。

③ 人的な交流の広がり

私自身はEDCの資料管理をしていないし、三田から離れていた期間が長かったため他のライブラリアンと比べると問題意識が薄かったことは否定できない。それでも経験者の話を聞くことは随分勉強に

なった。研修の間、参加者は缶詰状態で、朝、昼、晩と食事も一緒である。なるべく多くの国の人たちと交流するように努めたが、英語が第2外国語という参加者の英語のレベルも様々で、日本人だからとか、英語ができないからというような心配はまったくいらないと思った。今後この研修が継続するかは駐日欧州委員会次第ではあるが、チャンスがあれば他のスタッフにも参加してもらいたい。

日吉メディアセンター平成11年度企画展示一覧

日吉メディアセンター平成11年度企画展示委員会

	展示期間	タイトル	内 容
第1回	4月1日～4月30日	福澤諭吉と慶應義塾	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新入生オリエンテーション ・ 情報リテラシーのすすめ ・ 展示（貴重書）
第2回	5月1日～6月30日	ミステリー・サスペンス小説はすごい!	<ul style="list-style-type: none"> ・ 展示 ・ 映画上映 「依頼人」 「ミザリー」 「スリーパーズ」
第3回	7月1日～9月30日	東洲斎写楽撰	展示
第4回	10月1日～11月30日	グリム童話	展示
第5回	12月1日～1月31日	小泉八雲の世界	展示
第6回	2月1日～3月31日	環境問題って何だ?	展示

米国出張かけ足報告

かねこ やすき
金子 康樹

(三田メディアセンター係主任)

1999年秋と2000年春に、米国で開催された会議に参加した。ここでは、それぞれの会議の様子を紹介する。

1. ICPSR

1999年10月14日から17日にかけて、米国ミシガン州立大学において、ICPSR代表者会議が開催された。ICPSR (Inter-university Consortium for Political and Social Research) は、ミシガン大学に本拠地のある、社会科学データアーカイブであり、慶應義塾大学も1990年から加盟会員となっている。この代表者会議は、2年に1回開催される総会であり、世界中の社会科学研究者、データライブラリアンが集合し、データ解析法や、社会科学教授法、データサービスのあり方などが報告される大きな会議となっている。

筆者がこの会合に参加するのは、前回(1997年)に続けて2度めであった。様々なセッションが並行的に行われるため、すべてのセッションに参加することはできない。筆者は主にデータサービスの実践のためのセッションに参加した。前回、今回とも、社会科学データを効率よく利用するためのコードブックの電子化の問題が話題の中心であり、前回はPDF形式のファイルが大きくクローズアップされていたにも関わらず、今回はXMLによるコードブックが主流を占めていたのには、時代の流れの速さを改めて感じさせられた。

ICPSRの会合が終了した後、New Jerseyに移動し、Princeton大学の貴重書室を訪ね、資料のデジタル化についてのインタビューを行った。Princeton大学では、保存のためのデジタル化を第一義と考えており、劣化の激しいものからデジタル化を開始していた。

Princeton大学の次に、筆者が1997年に滞在していたRutgers大学を訪問した。筆者の滞在時に作成した手稿コレクションのWebサイトのファイルが紛失したという連絡を受けていたため、旧恩のある方や友達に再会する喜びを味わったのもつかの間、

コンピュータの前に座ってあっちこちのファイルを探して回るという、非常に地味な作業に追われることになってしまった。

2. OCLC

2000年3月13日～17日まで、米国Ohio州に行き、OCLCの主催する諸会議に参加した。

OCLCの会議に先立ち、3月13日午前中に、Ohio LINKとOhio州立大学を見学した。Ohio LINKは、Ohio州内の大学図書館、州立図書館のコンソーシアムであり、共同日録機関として、またILLシステム提供機関として、そしてデータベース・電子ジャーナルサービス提供機関として、加盟図書館の利用者へのサービスを行っている。非常によく機能しており、利用率も高く、Ohio州立大学の担当者聞いても、評価の高いコンソーシアムであった。

3月13日午後から、14日にかけては、OCLC館長会議が開催された。この会議は、毎年開催されるもので、OCLCを利用している研究図書館の館長のための各種講演と討議セッションが行われる。現在の研究図書館を取り巻く環境の変化や、こうした変化に対応するためのキーコンセプトなどを中心に討議が行われた。15日～16日午前にかけてワークショップが行われ、グローバル時代における図書館間の協力に関して、グループ討議を行った。今後はcooperativeではなく、allianceという言葉で語られるべきであるという発言が印象に残った。

さらに、16日の午後は、OCLCのアジア・パシフィック地域のためのグループセッションが開催された。ここでは、アジア・パシフィック地域の参加館の事例報告が行われた。慶應義塾については、加藤三田メディアセンター事務次長から慶應大学の紹介と義塾メディアセンターの諸活動についての近況報告を行い、それに続けて、筆者から日本の書誌データフォーマットに関する問題点や、Z39.50ターゲットの開発計画、三田メディアセンターのデジタルライブラリー計画などに関する報告を行った。

以上、文字通りかけ足報告とする。

NCC Conference に参加して

ながしま ちかこ
永嶋 千夏子

(三田メディアセンター)

2000年3月5日から11日までの1週間、San Diegoで開催されたNorth American Coordinating Council on Japanese Library Resources (旧日本語名=全米日本研究資料調整委員会)(以下NCC)、Council on East Asian Libraries Association for Asian Studies (以下CEAL)の年次会議とUCSD Libraryの見学を目的として海外研修の機会をいただいた。出席した会議の報告と成果を、以下にまとめた。

1. はじめに

参加した会議はNCCのYear 2000 Conferenceと、CEALのCommittee on Japanese Materials(日本語名=日本資料研究会)Annual Meetingの2つで、三田メディアセンター事務次長の加藤に同行する形で出席させていただいた。もともとこの会議に参加するきっかけとなったのは、2000年1月に国際交流基金が主宰した「海外における日本資料提供のネットワーク」ワークショップに出張したことである。この場で発表された、日本資料に関する国際的な協力体制の今後について引き続きNCCで討論されたと理解している。

2. NCC

3月6日から7日、San DiegoのTown & Country Innを会場として、日本資料についてのリソース・シェアリング、蔵書構築、技術革新、国際協力を主なテーマとして行われた。会議内容はテーマごとに9つのセッションが話し合われ、初日はLC、国際交流基金ニューヨーク支部、国立情報学研究所等からの活動報告、およびNCCへのニーズ、著作権、ILL・ドキュメントデリバリー、デジタル資料の今後について、NCCメンバー館からの事例が発表された。2日目は分科会形式での話し合いが行なわれ、単行書、逐次刊行物、テクニカルサービス、利用者サービス、研修制度の各部門ごとに、今後行なうべき活動方針と意見が出され、最終的に全体会議でNCC全体意見としてまとめられた。NCC Conferenceプログラムの詳細については、Duke University, East Asia Collection Libraryサイトに掲載されている

ので、こちらを参照していただきたい
(<http://www.lib.duke.edu/ias/eac/ncc/>)

3. CEAL

3月9日にNCCと同じホテルを会場として日本資料委員会の年次会議が行われた。プログラム内容は、「電子図書館プロジェクト」(京都大学)、「海外ILLについて」(早稲田大学図書館)、「印字本の目録作成」(Freer Gallery of ART)、「国際交流基金、国会図書館主宰 日本司書研修制度を受けて」(ピッツバーグ大学図書館)の報告が行なわれた。CEAL Annual meetingの概要については、以下のサイトで参照可能である。

(<http://msnhomepages.talkcity.com/NonProfitBlvd/hideyuki-morimoto/home.htm>)

4. 成果

慶應義塾に関連した成果としては、日米ドキュメントデリバリープロジェクトの延長、メアリー・ジャクソン氏を迎えた日本でのシンポジウムの開催が決定され、今後の環太平洋データベースへの協力についても意見交換があった。

今回の研修で私個人が得た成果としては、会議で人的交流ができたこと、その後5月に三田で行われたメアリー・ジャクソン氏のシンポジウム開催、OCLCワークショップ開催などに際して、準備やサポートを行う研修委員として業務につなげることができたことが挙げられる。また日本資料に関する会議であったことで、国内のドキュメントデリバリーの現状や相互協力の現状が認識できた点や、NCC側より今後のメディアセンターの海外ILL協力の可能性についても質問があり、期待の大きさを肌で感じるようになった点も、月並みではあるが収穫のひとつと言えるのではないかと。メディアセンターとしては、2001年1月には日米ドキュメントデリバリー実験についての評価を行うこともあり、今後も現場レベルでつながりを持っていくことになるのではないかと。

Converge on London

8ICML 見聞記

は せ が わ ひ ろ こ
長谷川 博子

(医学メディアセンター)

今回第8回国際医学図書館会議(8ICML)に参加する機会を得た。会議は2000年7月2日から5日までロンドンで開催された。第1回(1953年)がロンドンで開催されて以来回を重ね、第4回(1980年)のベオグラードからは、5年に一回主要都市で開かれている。第5回(1985年)は東京で行われたが、当センターは事務局を務め、図書館見学ツアーの拠点にもなった。

ICMLは、世界の医学図書館員が、一堂に会して日頃の研究を発表し、情報を交換する集いである。今回の参加者は76カ国1400名を超え、日本からも15名の参加があった。会議は、ロンドンの中心地ウェストミンスターにほど近いQueen Elizabeth II Conference Centreで行われた。会議前日参加登録の手続きのため、会場を訪れたが、入り口では手荷物検査があり、物々しい感じだった。

7月2日会議初日。混声合唱が会場に響き、厳かな雰囲気の中開会した。会議のテーマは、“Converge on London” ロンドンに集まり、医学図書館を取り巻くすべての境界を越えようというものだった。Opening Sessionに続いて、WHOのJulio Frenk氏のTrends and Challenges in World Healthと題する基調講演が行われた。

Plenary SessionはScholarly Communication, The Information Centre, Standing on the Shoulders of Giants, The Health Care Context, The Information Professionalの5回あり、それぞれ60分で2名の講演があった。講演者は出版社のディレクターや、著名な医師やジャーナリストなど錚々たる顔ぶれであった。

Parallel Sessionは7回あり、同時に9テーマに分かれ、それぞれ90分に2~4名、総勢358名、196編、日本からも2編の発表があった。2000年開催ということもあり21世紀を展望する話題が多く、Digital Library, Evidence-Based Health Care, Global Health Informationなどの言葉が飛び交って

いた。

Librarians' Teaching Role Explored 2という分科会は医学生に対する図書館教育をテーマとしており、発表者が、全員女性図書館員で和やかな感じで印象に残った。医学メディアセンターで現在行っている基礎医学特論とよく似た事例を発表していた。そのほかの発表も日頃の研究成果や実例を発表したもので、プレゼンテーションの仕方も工夫されていた。発表後に質疑応答が行われ、活発なやりとりが繰り返された。パネルディスカッションのような形式で発表者どうしの討論も聴きたかった。また、会議以外でも雑誌価格の高騰について話題になっていたが、出版社どうし、あるいは、図書館と出版社の間で率直に話し合う場があってもよかったように思う。

Exhibition Session, Poster Sessionも並行して行われ、前者は、50以上の協賛企業のデモンストレーションやレクチャーが行われた。後者は60以上の出展があり、まさしくElectronic Postersといえる数々だった。

会議最終日。実行委員長であるTony McSeán氏は会議の成功を喜び、参加者に感謝の言葉を述べた。続いて、次回開催のサンパウロの役員が2005年の再会を約束して閉会した。

国際会議に出席したのは初めてであり、戸惑うことも多かった。しかし、日常業務に追われて視野の狭くなっている私にとってはとてもよい刺激になった。

世界の医学図書館員と交流を持てたことは何よりの収穫である。医学メディアセンターでは、ICMLのほかアメリカで開催されているMedical Library Associationのannual meetingに参加できる研修がある。毎回は無理かもしれないが、この制度をぜひ継続して、多くのスタッフに貴重な経験を与えてくださることを希望する。

情報 の 質

まき あつし
牧 厚志
(商学部教授)

IT革命の波は大学にも押し寄せ、特に図書館ではその影響が大である。それこそ20年前の図書館といえば、図書館という箱物の中に書籍と紙にかかれた資料だけが存在していた。しかし、現在ではテープ、CDなどといった磁気媒体や従来は計算センターで管理されていたものの一部も図書館で管理されるようになった。

またインターネットの導入によって、書籍や資料の検索に大きな革新があった。インターネットの導入によって、三田図書館にない書籍や資料が比較的速やかにどこにあるかが確認できるようになったのである。図書検索を考えると、三田図書館の3階や4階で検索をすると、三田に該当の書籍が在架しない場合にも日吉や矢上、藤沢の情報が同時に検索され、当該書籍を即座に日吉や藤沢に請求できる態勢にある。また、慶応が所有していない書籍でも、日本国内のどこの大学が所有しているのかも即座にわかる。

各種の資料の場合にはもっとドラスティックである。例えばGDP(国内総生産)の値が必要になったとしよう。これまでは図書館に行って、「国民経済計算年報」から必要な箇所をコピーしたり、また、日経NEEDSのデータをMTから取り出さなければならなかった。しかし、現在ではインターネット上で経済企画庁のホームページを探せば、GDPのデータそのものが即座に見られる。データをダウンロードすれば、それで自分のPCにもデータが確保できるのである。

また、海外データの場合にはさらに大きな変化があった。分析上、アメリカやヨーロッパのデータが必要になったとしよう。その際には、必ずしも図書館に備えられていないデータも多々ある。近年、慶応ではOECDの専用コーナーがB3にでき、またかなりの国のデータも4階に収録されているが、慶応にない資料もあり、その場合には現地の友人にコンタクトを取って取り寄せたり、また現地に知人がいない場合には、日本にある連絡事務所や大使館に問い合わせた。しかし、相手から「ありません」といわれれば、諦めるしか方法はなかった。

現在では状況がかなり変わっている。インターネットのホームページを探すという方法が

加わったからである。それではこのようなIT革命の中で図書館の役割はどのように変わる必要があるだろうか。将来の図書館の役割を考えてみよう。

図書館の役割は情報の供給媒体であり、できるだけ質の高い情報を提供することであろう。今も昔も学生や研究者に対して情報サービスを提供する媒体としての図書館の性格は変わっていない。しかし、情報の質という点では今後考えなければならないことがある。

IT革命によって先進国間の情報ギャップが縮小してきた。このことが研究の世界にも波及してきており、昔は知らないで済まされたものが済まされなくなっている。時系列的視点からの例をあげよう。現代に生きている研究者はエジプトの古代社会や古代中国の社会生活を直接的に見聞することはできない。インターネットが

発達していなかった20年前にも、日本にいたのでは直接観察できない古代遺跡や古代社会の研究書や写真はあった。しかし現在では、インターネットを通じて、これらの情報の一部は世界中で同時に提供され、日本

に居ながらにして古代の社会生活を想像できるようになった。このように、日本のような辺境にいるから知らない、では済まされなくなってきたのである。また横断的な状況でも、日本に居住していれば、ヨーロッパやアメリカの現時点の出来事を直接的に体験することは不可能である。しかし、日本にいても世界中の出来事を、ネットワークを通じて、居ながらにして知ることができる。

このように、分析の前提になる情報量はインターネットの発達によって豊富になっている。そこで研究の際には、分析対象に対して最も適切なデータを使っているのか、あるいは他の研究者の研究と自分の研究がどのような位置付けにあるのかを、今まで以上に、はっきり認識することが重要になる。

大学が学界、産業界に対して質の高い情報の発信を続けていくためには、今後ますます図書館と研究者の間で情報の質を高めるための交流と情報交換が必要となるだろう。



御伽草子と展示

いしかわ とおる
石川 透
(文学部助教)

1. はじめに

御伽草子は、展示に向く題材である。日本の古典資料の中で、これ以上の題材はおそらくないであろう。本文としての美しさはもちろんであるが、挿し絵の存在が彩りを添えている。

挿し絵にも、さまざまな種類がある。本格的な大和絵の系統を引くもの、稚拙な中にもおもしろみがあるもの、絵草紙屋かどこかで量産されたと思われるもの、などである。

また、その挿し絵が付される本のかたちにもさまざまなある。巻物、袋綴じにした冊子、綴葉という綴じ方の冊子、折り帖、それぞれに大中小の大きさがあり、冊子には横の幅が長い横型もある。

御伽草子の代表は絵巻物と奈良絵本といわれるが、細かく見ると、このようにさまざまなのである。これらの手で書かれた写本以外にも、刊本といわれる印刷本がある。御伽草子が流行した時代は、日本文学作品が印刷され始めた時代と重なる。

その印刷本も、初期の活字で作られたものと、一般的な印刷である整版で作られたもの、それぞれに挿し絵のあるものとなないもの、挿し絵に丹緑といわれる簡単な彩色が付されたもの、などがある。

このように、御伽草子の展示を行うと、日本古来のいろいろな本のかたちや、挿し絵のさまざまなすがたを、一堂に見ることができるのである。

2. 御伽草子の購入

御伽草子は、国宝級の絵巻物と違い、一巻で何億円もする品物ではない。それでも、バブル経済の頃は、一巻一千万円の値を付けるものも多くあった。その後、値は下がったといっても、購入できる所は限られている。

十年以上前、当時斯道文庫長であった松本隆信先生が、斯道文庫の一室に、横山重氏の遺品である赤木文庫本を、管理なさっていた時期があった。横山重氏の旧赤木文庫本は、現在でも慶應義塾図書館蔵

御伽草子の主流を占めているが、それらの多くは、まだ横山氏が在世中に慶應義塾に売り渡されたものである。

横山氏は、新しい資料を買うために所持していた資料を売って資金に充てたのである。その行為は、商いと変わらないということで、だいぶ非難もされていたようであるが、横山氏が立派なのは、集めた資料をほとんど自費出版同然に活字化し、後の研究に資したことである。原本は販売されて行方不明であるが、横山氏の紹介によりその存在が知られている資料も数多いのである。

話を元に戻すと、このように転売を繰り返していらっしやっただから、お亡くなりになった時にも、百点以上の御伽草子が赤木文庫にあった。それを松本先生が管理なさっていたのである。松本先生はよく、この残った赤木文庫本全てが一括して慶應義塾に入ればとおっしゃっていたが、結局それはかなわなかった。その十分の一ほどは、慶應義塾図書館で購入できたが、残りの百点ほどは、億を超える金額で著名な業者に渡されていった。

もちろん、慶應義塾図書館に入ったものは、御伽草子展の時に展示されていたし、各自で閲覧することも可能なのであるが、現在のところ、その残りの百点の資料は、閲覧できる状況にはない。今さらではあるが、斯道文庫で保管している時に、じっくり見ておけばよかったという反省しきりである。

3. 用語

御伽草子は、国文学作品の中でも、異本が多い作品群である。異本とは、題名が同じで、基本的な内容が同じであっても、本文が異なる伝本のことをいう。当然、何か一つ基本的な伝本があり、それに対して異本であるという言い方をする。研究者によっては、本文が同じでも、別の写本であるという意味で使うこともある。しかし、ここでは、本文や内容に変化がある伝本のことを指すものとした。

ところで、国文学史の用語も意外と共通認識が欠けていることが多い。御伽草子研究においてよく使われる奈良絵本という言葉も、人によって指す範囲が異なっている。

私も、最近まで絵巻を含めて使用していたのだが、今は、奈良絵本・絵巻というように並列させて使うことが多くなった。講演会や学会発表では、やはり分けて使った方が誤解されずにすむからだ。

このように、同じ一人の人間でさえ使う範囲が揺れているのであるから、統一見解は、得られそうにない。奈良絵本は、絵本を指すと決めても、いろいろな種類があるから、どれを奈良絵本とするかでもめるのである。

4. 奈良絵本の製作地

奈良絵本という言葉自体は、明治時代の古物を商う業者が使用し始めたのだといわれている。奈良の興福寺周辺に絵仏師がいたため、今われわれがいう奈良絵本も、奈良の絵仏師が作ったのであろうと考え、奈良絵本と名付けたのだという。ちなみに、猿沢の池の脇にある絵屋橋（現在、川はながれていない）は、興福寺の絵仏師たちがいたところらしい。

現在では、奈良絵本は奈良で作られたという説は否定され、奈良絵本は京都で作られたといわれている。しかし、それを証明するものはほとんど存在しない。わずかに、奈良絵本に近似する絵巻物に、京都の絵草紙屋の印記がみられるとか、当時の京都の記録類に、京都と思われる絵屋が登場するにすぎない。

しかし、私が最近報告した、奈良絵本の反故紙に使用された、絵草紙屋と思われるところの大福帳（寛永年間の年記あり）には、「京にて売る」ということがさかんに記されている。わざわざ「京にて」といっているところをみると、どうも京都以外の地に絵草紙屋があるように思えるのである。

また、有名な岩佐又兵衛の絵巻群は、江戸初期に越前で製作されたもののようである。さらに、奈良絵本でも元禄年間頃製作の縦型本には、江戸の本屋の反故紙が使用されたものもある。

確かに、江戸時代の前半は、文化の中心は京都にあったのだが、このようにみると、京都だけで奈良絵本が作られたとは考えにくいのである。この辺の

問題は、まだまだ研究の途上にある。やがて、そのすがたも明らかになっていくことであろう。

5. 奈良絵本の研究

奈良絵本の研究は、近年やっとなさかんになってきた。これまでは、国文学上の本文研究の一つとして、その本文の紹介などはよくされていたのだが、挿し絵を含めた総合的な研究は、ほとんどなされていない。美術史の方からは、取り上げられることさえまれであった。

それが、5年ほど前からは、絵本の会という、国文学、歴史学、美術史のそれぞれの専門家が集まる研究会ができ、2ヶ月に一度、会を開いている。また、2000年8月には、扇の草紙研究会が開催された。いずれも、数年前には考えられなかったことである。

それらの研究会以外にも、1997年の中世文学会では、絵画と文学のシンポジウムが開かれ、多くの学会でこれと似たシンポジウムや研究発表、さらには、国文学と絵画を関連付ける雑誌の特集号が刊行されたりした。そのいくつかには、私も関わったが、いずれも、反応がよいのである。

6. 御伽草子の展示と影印版

今回の慶應義塾図書館蔵御伽草子展も、そうした流れもあってか、専門家にも大勢お集まりいただいた。

また、たまたまではあるが、1999年秋から2000年春にかけては、御伽草子を中心とした展示が各地で開かれた。大阪青山短期大学博物館、京都大学図書館、サントリー美術館、などなどである。また、題名だけではよくわからないが、御伽草子が展示の中心となっていたものもあった。

その内、京都大学では、あらためての調査も行われ、従来未紹介の作品が見出され、新聞に大々的に取り上げられた。そして、この秋からは、京都大学で所蔵する御伽草子を影印した、12冊の集成を刊行することになった。

実は、御伽草子類の影印刊行を予定する機関は、私を知るだけでもいくつかある。10年ほど前に、早稲田大学出版会から、『奈良絵本・絵巻集』全15冊が出た時には、これが売れるのかと驚いたものであ

るが、意外にもよく売れたらしい。それで、というわけではないだろうが、これからしばらくは、各機関がつつぎと御伽草子類の影印版を出すことになるであろう。

これは、研究にとって非常にありがたいことである。というのは、最近、御伽草子類の奈良絵本や絵巻は、貴重書ということで、閲覧が出来ないことが多くなっているからだ。機関によっては、奈良絵本・絵巻は全て閲覧中止ということもある。聞けば、機関の中の人さえ見られないのだという。

残念なことではあるが、こういう機関は増えていくであろう。というのも、簡単なことで、奈良絵本・絵巻は、一度開けば、程度の差こそあれ、確実に損なわれていく。もちろん、目に見えるような損害を受けることはまれであろうが、絵の具の部分動かすのだから、わずかではあっても、絵の具は落ちてしまう。

ともかく、これらの本にとって一番良いのは、人の手に触れずに置くことである。そこで、本体は、閲覧させない代わりに、写真を見せることになるのである。しかし、困ったことに閲覧停止にしているにもかかわらず、写真がないところもある。それは仕方ないとして、写真版が出版されれば、ある程度は現物を見ることの代わりとなるのである。

7. 影印版の出版

さて、影印版の出版が、研究にとって有効であることは間違いない。御伽草子は前に述べたように、異本の多い作品群である。国文学研究の一番の基本である本文研究は、江戸時代以前の写本や刊本を比較することから始まる。

『伊勢物語』や『源氏物語』は、写本や刊本の伝本が多くても、本文的に一致することが多く、比較する労力は大変なのであるが、研究上のおもしろみは少ない。しかし、御伽草子は、異本が多く、どのように、なぜ異本が生み出されたかを考える良い材料となる。

その異本を比較するさい、影印版が出版されていれば、それを手元に置くことにより、複数の伝本を容易に比較できるのである。

しかも、影印版であれば、挿し絵の部分も掲出されているから、挿し絵の比較も容易である。実は、

国文学の研究者は、本文の方には注目して、それを活字化することもあったのだが、多くの場合は挿し絵を掲載することはなかった。当然のことながら、挿し絵の研究は、その本文以上になされていないのである。

また、本文が活字になっているものでも、間違いかどうかを確認したいところもある。活字にするというのは、難しいことであって、どんなに優秀な人が担当しても、必ず、どこかに間違いがある。御伽草子展の図録の解説に、「誤刻率」という表現を使ったが（私が作った言葉なのだが、なぜか喜んでくださった方が多かった）、誤刻率に差はあるにしても、必ずあるものなのである。

だから、たとえ本文が活字化されている伝本であっても、影印版が出ることには意義があるのである。

8. 異本の問題

御伽草子の異本については、松本隆信氏が「伝本から見た御伽草子二十三編について」(『中世庶民文学』所収)において、古写本が多く残る作品に異本が多く、江戸時代以降の新しい写本しかない作品には異本が少ないと述べられている。

その後の私の調査においても、基本的な結論に差はない。ただ、私は、異本の現象は御伽草子だけに限らないものであると考えている。

異本は、御伽草子以外では、『狭衣物語』や『住吉物語』にも多く見られる。また、『平家物語』は、琵琶法師によって語られたという事情があり、問題は複雑なのであるが、書き写された段階でも異本は発生している。

御伽草子を含めたこれらの異本をみてみると、異本は御伽草子や『狭衣物語』や『平家物語』だけの現象ではなく、江戸時代前期以前のすべての物語類にあてはまるのではないかと、思えるのである。

異本は、同じ作者が校正を繰り返した結果だとみるのは、今日的な考えである。紙の乏しい昔に、そのようなことができようはずもない。

それよりは、名前もわからない無数の写し手(書写者)が、異本の発生に荷担しているとみたほうがよいであろう。

実は、昔の物語には、作者という意識がなかった

のである。それは言い過ぎにしても、少なくとも、作者は、自分が作った物語に署名をすることはなかった。だから、物語の伝本を見ても、書名は記されていて、作者名が書かれていることはない。もし、作者名があったならば、それは後の人のさかしらだと疑うべきである。

『源氏物語』の作者が紫式部である、とわかるのは、当時からの伝承と、他の資料の研究によるのである。紫式部であっても、決して署名はしていない。だから、今でも『源氏物語』五十四帖の全てが紫式部の作かどうか、もめているのである。

他の物語についても、作者が明らかなものはない。御伽草子においても同様である。

また、これは、江戸時代以前の書物の常識であるが、作者が書いた原本が残っていることはほとんどない。では、なぜわれわれが作品を読むことができるかという、それを何度も何度も写し継いできたからである。書物はどんどん減んでいくものである。流行した作品は、こうして必ず後世に伝えられるのである。

このように、書物は書き写されてきたのであるが、ついでにいうと、それらの本を書き写した人も署名することは少ない。

誰が作者なのか、誰が書き写したのかわからないとなると、それを書き写す人間は、作品の内容に手を入れてしまう。これでは、おもしろくないとか、文章がわからないとなると、おもしろく、わかりやすくするのである。このようにして、異本が発生したのではないだろうか。

原本の最初の写し手は、作者の身近な人間であるかもしれないが、それでも、著作権などはないのだから、よりよいように手直ししてしまうであろう。

私は、異本の発生をこのように考え、物語が作者の意志とは関係なく勝手に変えられることから、物語の成長と呼んでいる。

では、異本が少ない作品があるのはなぜかという、それは単純なことで、あまり書き写される機会がなかったのである。別な言い方をすれば、はやっていたいなかったのである。だから、異本の少ない本というのは、現在残っている古写本の数も少ない。

ただし、この例外となるのが、『源氏物語』である。

『源氏物語』は、写本の数が多いにもかかわらず、異本が少ない。やはり、書きかえるには、あまりにも有名で、なおかつレベルが高かったのであろう。

この説はまだ仮説であって、研究も十分なわけではない。ともかく、異本の問題は、日本の文学史にかかわる重要な問題なのである。

9. おわりに

異本の問題について、長々と述べてしまったが、そのような研究のためにも、御伽草子の作品の一点を調べる必要があるのである。

展示はそのような研究のきっかけにもなるし、各地の展示を見ても、こんな本があったのかと勉強させられることが多い。

もちろん、これは研究する立場からの意見であって、展示によって得ることは、各自違うことであろう。

幸い、御伽草子は見て楽しめる作品群であるから、日本にこんな話があったのか、こんな挿し絵が描けたのか、などと思われた方も多いのではないだろうか。

慶應義塾大学は、学会なども多く開かれる。今後は、そのような行事での、展示に携わることになるのだが、今回の御伽草子展での経験をいかして、よりよい展示を目指したいと考えている。

なお、御伽草子展のさいの5人の講演の記録は、『魅力の御伽草子』として、三弥井書店から出版した。あわせて御参照いただければ幸いである。

三田メディアセンター・インターンシッププログラム

かとう よしろう
加藤 好郎

(三田メディアセンター事務次長)

1. はじめに

この制度は、今に始まったことではなく、医師や教員、看護婦になるためには昔から一定の条件となっていた。しかしながら、最近のインターンシップは国が推進しており、その目的は、医学部等の学生だけではなく文系の学生も学生時代に社会の現場で働く経験を持つことになっている。平成12年度の三田評論の4月号にも、時の話題としてインターンシップについて特集が組まれている。その内容を少し紹介すると、商学部が1999年度より設置した短期インターンシップ科目「社会との対話」の紹介と、労働省が中高年失業者の再就職のために「職場体験講習」制度を開始したことなどの社会人のためのインターンシップの紹介、同時に、欧米型のインターンシップの紹介、そして企業（伊勢丹）側から見たインターンシップの意義として①企業としての社会貢献②大学への企業ニーズの反映③企業に対する理解の促進があがっている。

2. インターンシップ実施状況

インターンシップを実施している4年生大学は、1997年で全体の17%、1999年で35%と増加している。これを学生数でみると約1万7千人で全体の割合で0.7%である。米国では全学生の70%がインターンシップを経験して卒業している。欧州では英国が60%、イタリアは全学生が経験するように法律で定められている。外国では、インターンシップを就職のためにおこなうことが一般的になっており、その人物を良く観察しておいて就職後のさまざまなトラブルを避けようとする目的がある。実際インターンシップ後に受入先に就職する率は、50%から70%とされている。インターンシップの期間も日本と海外では異なっている。日本は、夏休みなどに1週間から3週間というケースが多いようだが、海外では、3ヶ月、6ヶ月、長い場合は10ヶ月という

事例もある。期間が長いメリットとして、学生側からすれば仕事になれ自信がつくことで、周辺の仕事にたいしても興味を持ち業務が広がることになる。企業側からすると、仕事に慣れることで戦力化できる。企業によってはその力量に応じて報酬を出すところもある。このことは学生側からすれば、有り難いことで進んでインターンシップを受けることになる。送る側、受入れ側双方ともに相乗効果を生むことになる。

インターンシップを経験した後の感想として、日本では「人間がしっかりしてきた」という評価があり、海外では「インターンシップ前よりもより勉強するようになった」との評価が多いようである。日本インターンシップ学会では、次のことが報告されている。「学生達の就職を選択する基準がインターンシップ経験の後でおおいに変わってくる。就職の選択基準が①やりがいい②仕事の内容③尊敬できる人物（経営者）の有無④得られる人脈⑤組織の風土」となり、インターンシップ経験前に重要視していた①給料②労働条件③組織の規模等に関する興味は少なくなる。

3. 三田メディアセンター・インターンシッププログラム導入要領

三田メディアセンターでは、次のようなインターンシップの受入れ要領を平成12年5月1日に制定した

- 1 導入の趣旨・目的：前述したとおり米国の高等機関の多くがインターンシップ制度を導入しており一定の評価を受けている。三田キャンパスには実学の色彩の強い文学研究科図書館・情報学専攻があり、研究領域に関連する実務を体験させ、研究領域の一層の理解を深めることで、研究者の養成と同時に高度な専門職業人（ライブラリアン）の育成をする目的で導入した。

- ②受入れ対象：当面、図書館・情報学専攻の修士課程と博士課程在籍者を対象とする。但し、現状においてもそれ以外の研究科在籍者からの要望があれば、受入れ方法等十分に考慮した上で受入れられる方向で考えている。このことは、スタッフの育成を考えた場合、図書館・情報学以外の主題を持った利用者（インターン）との意志の疎通がはかれる良い機会だと考えている。
- ③受入れ期間：4月から7月の前期と10月から1月の後期、それぞれ4ヶ月としている。現場での実習は、受入れ側の体制も考慮して週2日程度としている。
- ④受入れ部署：資料サービスと資料マネジメントの両部門での受入れを考えている。
- ⑤受入れ人数：原則、前期・後期各1名ずつ。
- ⑥選考方法：インターンシッププログラム受講希望者は、指導教員の推薦状と研修計画書をメディアセンターに提出し、面接を受ける。
- ⑦研修方法：研修計画に基づき実施するが、特定の業務だけでなく三田メディアセンター全体の実務を体験し、研究上必要な業務分析を行う。報告書はプログラム終了時に提出させる。
- ⑧評価：受入れ担当部署の評価および報告書に基づき、インターン、指導教授、三田メディアセンター事務次長、受入れ部署担当者で報告会を開催する。

4. プログラムの実施状況

今年の4月（実施要領は4月1日から適用）から文学研究科図書館・情報学専攻博士課程1年生を受入れている。期間は4月から7月までの4ヶ月。実習は、博士課程1年生ということもあって、授業頻度のことを考慮して当面火曜日の10：00から18：00ということを取り決めた。受入れ担当部署は、1階のレファレンスで、内容は、カウンター業務をいずれは手伝うことを前提に、レファレンスカウンターに席を設けてレファレンスのスタッフと利用者とのやり取りを見ながら、利用者の質問内容、スタッフの対応、利用された資料など記録を取らせている。利用者が少ない時間帯には、レファレンスの演習問題をさせ資料になるべく多く触れる機会を設けている。インターンは、公共図書館での実務経

験は持っているが、大学図書館での経験がないことと、三田の規模の大きさに多少戸惑ったようである。7月に終了して、8月にその評価を行った。資料が豊富なため、資料を覚えるにはとても良い環境であること、同時に、利用者の利用頻度の高い資料を把握できた点、一方、カウンターに来る利用者が意外に少ないと感じどのように利用者自身が解決しているのか不思議に思えた等の感想をもらった。評価についての話合いの結果、「最新のツールも含めて、実際に大学図書館で使われるツールをもう少し自分の研究に生かせる形で継続的に追って見たい」という要望が出てきた。三田メディアセンター側としても、レファレンス業務を実際にする機会が持てなかったこと、レファレンス業務以外にも大学図書館の業務を実体験してもらいたいため、後期も継続して受入れることになっている。

5. インターンシッププログラムの今後

今後、見直しをはからなければならない事項を列挙する。

- ①送出し側の取り扱い：図書館・情報学専攻としてはこのプログラムを単位化する方向で検討しているようだが、文学研究科レベルでの検討には時間がかかると思われる。三田メディアセンターとしては、そのことの早期実現を望んでいる。
- ②他の研究科からの受入れ拡大：図書館情報学専攻以外のインターンを受入れることで、メディア側としてはその主題における研究動向あるいは資料に対するニーズを通して資料選択に生かせることができるし、利用者は図書館の資料をスタッフの立場で存分に利用することができるであろう。実際に研修させるなかでその「人」と「なり」を見ながら、主題専門家として図書館に採用することができればとも考えている。
- ③受入れ側の問題：人手の問題がどうしても解決できない。もっと多くの学生へ機会を与えられればと思うがスタッフの負担はやはり大きい。欧米の大学図書館では一定の規模を超えると、図書館組織の中にリサーチ機能を持ったライブラリアンを配置している。インターンシッププログラムのような新しい事業展開を考えたとき、このような組織の必要性を痛切に感じるが、専

門職制の確立から始まってまだまだ実現するにはいくつか超えなければならない壁がある。他大学とのコンソーシアムを組むことでその実現を目指すことも一つの打開策と考えている。インターンを多く受入れ、そのアウトプットを一定の量で生産するように出来るには、少し時間がかかりそうである。

- 4 報酬の問題：勿論、力量に応じてのことではあるが、このことがある程度実現できれば、インターンを長期に継続させ、同時に戦力化することで、将来のスタッフとしてリクルートすることも可能になる。

6 おわりに

三田メディアセンター・インターンシッププログラムはまだ始まったばかりである。問題指摘型ではなく、問題解決型の思考で、大事に育てていきたいと考えている。

参考文献

高良和武，“インターンシップの動機”，読売新聞，6月30日東京朝刊，P.17“時の話題－インターンシップ”，三田評論，1023，2000，4，pp40－47

日吉メディアセンター平成12年度企画展示一覧

日吉メディアセンター平成12年度企画展示委員会

	展示期間	タイトル	内 容
第1回	4月1～5月31日	福澤諭吉と慶應義塾	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新入生オリエンテーション ・ 情報リテラシーのすすめ ・ 展示（貴重書）
第2回	6月1～9月30日	万能の天才！レオナルド・ダ・ヴィンチ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 展示 ・ 素描集（複製）を額装してギャラリーに展示
第3回	10月1日～11月30日	「三田文学」創刊90周年記念展示	展示

「シェルブールの図書館」

あがわ なおゆき
阿川 尚之

(総合政策学部教授)

三年ほど前、フランスへ日帰りの旅をした。と言っても東京から飛んだわけではない。イギリスに数日滞在中、ふと思立ってポーツマスの港から夜行フェリーに乗り、英仏海峡をわたった。対岸のシェルブールに到着したのは夜明け前、帰りのフェリーでフランスを離れたのがその日の夕方だったから、日帰りなのである。

なぜこんな物好きな旅をしたか。一つにはフェリーに乗りたかった。船が好きな私は、そこに海があって船が浮かんでいると飛び乗るといふ悪いくせがある。もう一つには、フランスの思想家トクヴィルの旧宅を訪れたかった。アレクシ・ドゥ・トクヴィルはノルマンディー出身の貴族である。1831年に大西洋をわたって10ヶ月間アメリカを見聞してまわり、「アメリカの民主主義」という歴史的名著を残した。数年前トクヴィルのアメリカ旅行について本を書いた私は、シェルブール近郊に今も残るトクヴィルの邸宅をいつか訪問したいと願っていた。フェリーの便があることを知り、イギリスから日帰りの旅を思い立ったのには、そんな背景があった。

さて、港からバスで町へ出て、慣れないフランス語を操りながらどうにかこうにかタクシーでトクヴィル村に辿りつき、教会の裏庭にあるこの人の墓参りをし、トクヴィルの館に入ろうとしてドーベルマンに噛み付かれそうになったのが、この文章の主題ではない。邸内は見学できなかったが、尊敬するトクヴィルが生まれ育ち、そして死んだノルマンディーの風物を見て、大いに満足だった。

問題はその後である。朝5時にフェリーで港へ着いたものだから、トクヴィル村訪問が終わってもまだ午前10時にしかならない。ポーツマスへ戻るフェリーの出港は夕方の6時である。8時間もこの港町で何をしたらいいだろうか。特に行きたいところもない。帰路タクシーの運転手と英仏ちゃんぽんで相談しているうちに、ふと思いついた。そうだ図書館へ行こう。シェルブールの町にも図書館があるはずだ、入場はタダだろう。昼寝もできる。「ラ・ビブリオテック、シルブプレ」と言ったらすぐ通じて、運

手は「ウィ、ムッシュー」と、町の中心にある公共図書館の前に車をつけてくれた。

困ったときの神だのみならぬ、図書館だのみ。思惑はまんまと当て、受付で「旅のものだけれど、しばらく居ていいか」と尋ねると、親切な青年図書館員が「もちろん」と返事をした。荷物を預けて中に入る。この国で図書館を訪れるのは初めてだが、日本の公立図書館と共通の雰囲気を感じさせている。宿題をかかえてリファレンスのお姉さんに質問する小学生。孫に童話を読み聞かせるおじいさん。一心不乱に勉強する学生。調べものをする年配の紳士。本を開いたまま机につぶして居眠りする男性。図書館のなかは静かで、冷房が効いていて、快適である。

残念なのは本がすべてフランス語で(当たり前だ)、読んでもわからないこと。それでもせ

かくだからトリファレンスデスクの女性にたどたどしいフランス語で「トクヴィルの本ありますか」と尋ねると、わざわざ立ち上がって書棚まで案内してくれた。「ヴォアラ、イスイ(ほらここよ)」。なるほど、「アメリカの民主主義」やトクヴィルの

書簡集などが並んでいる。はるばる日本からトクヴィルにあこがれてシェルブールまでやってきて、図書館で探すとこうして彼の本が書棚の隅で私を待っている——そう思ったら私は妙に感動してしまい、図書館の片隅でしばらく、あまり手に取られた形跡のないトクヴィル書簡集のページをめくっていた。

図書館に荷物を置いたまま、その日はそれから午後いっぱい、昼飯を食べに出、公園でブランコに乗り、本屋をみつけてトクヴィルの本を買い、港を見物にでかけ、教会を見て歩いた。疲れると図書館に戻って昼寝をした。言葉も満足に通じないフランスの一地方都市に、図書館があり、そこで働く人がいて、利用者がいて、いねむりする者もいる。わずか一日の滞在でフランスの文化や社会がわかったはずもないけれど、シェルブールの公共図書館は、なつかしく親しく思い出される。



マナー向上委員会の活動

むらかみ とくたろう
村上 篤太郎

(三田メディアセンター課長)

図書館がうるさい。入館者数に比例して、騒がしさのボルテージは上がってしまう。学期末試験の頃は、あたかも全館グループ学習室の様相を呈している。これはなにも今に始まったことではなく、しかも私語以外にも図書館を利用する際のマナーに問題は拡大され、解決をより困難にしている。

昨年11月の三田祭期間中の閉館時に業務委託職員を含むほぼスタッフ全員に対して、三田メディアセンター職員研修を開催した。その際に利用者からの報告を、教員1名、大学院生2名にお願いしたが、彼らに共通の話題として、図書館がうるさい、利用者のマナーが悪いなどというコメントがあった。確かに従来は閲覧担当が中心になって最低限の館内巡回を実施しているが、まさにそれが十分ではないということを証明していた。そこで今回は、それらの訴えを危機的に感じ、組織的に取り組もうと決意して、本年1月からマナー向上委員会を設置した。メンバーは、私のほかに、閲覧、レファレンス担当の3名から構成した。まずは新学期を迎える前に、マナーの対象となる項目を次のように列挙した。

- <騒音関係> ①携帯電話の着信音と通話②私語③指定の場所以外でのパソコン、電卓の利用④居眠りのいびき
- <飲食> ①館内での飲食
- <喫煙> ①館内での喫煙
- <コピー> ①図書館資料以外のコピー②図書館資料に対する著作権法31条を超える場合のコピー③検索結果の大量出力
- <資料> ①書き込み、切り取り②無断館外持ち出し③放置本④公衆道徳に反する不適切な資料の利用
- <施設> ①壁、机などへの落書き②席取り③床に座ったり、資料を広げたりする利用

- <盗難> ①居眠りの利用者②荷物放置
- <制限違反> ①利用資格のない利用者が利用している場合
- <渋滞> ①冊子体目録前での滞在②出入口付近での立ち止まり

また、これらの項目に注意する範囲、対策、注意の根拠などをまとめてスタッフ側の意識をあわせた。この際に、従来は館内で一ヶ所だけ喫煙ができたが、次のような理由から館内の合意を得て4月から館内禁煙に踏み切った。それは、以前から利用者の苦情があったこと、図書館資料・設備にも影響があること、喫煙者の環境を保とうとすれば設備投資をしなければならず、それは図書館本来の機能ではないことであった。

春学期は4月と7月とをマナー向上月間と位置づけ、具体的な運用マニュアルを作成し、館内静粛キャンペーンを実施した。この期間中は、次のことを行った。

- 静粛、飲食禁止、携帯電話禁止、ノートコピー禁止(7月のみ)のポスターを作成し、館内の主な箇所に掲示をした。
 - 午後に1回、2人1組で館内巡回をした。巡回の際には、注意をした内容の統計もとった。
- 巡回の結果、荷物放置が一番多く、これは盗難の危険性があること、席取りの可能性などがあることのために注意書きのピラを置くようにした。この他には飲食、携帯電話が目立っていた。

今回の対応では、まだまだ不十分ということは自覚している。利用者からの不満の声も相変わらずしばしば聞いている。利用者が満足できる環境に復活するためにも、こうした伝統的で地道な努力を今後とも強化していきたいと思っている。

日吉情報センターの思い出

せんだいち ますみ
金田一 真澄

(理工学部教授)

今から10年ほど前、新米教師として慶應でロシア語を教えていた私は、学習指導副主任の役をつとめながら、もう一方で、博士論文作成のために、使えるすべての時間をひたすら文献資料収集と原稿の升目を埋める作業につやしていた。毎夜、最低3時間ワープロの前に身を置くことをノルマとしていた。

東京大学で大変お世話になった指導教授栗原成郎先生の退官が2年後にせまって、それまでに博士論文を提出するというまったく無謀な約束をしていたからである。

論文テーマは、ロシア語の時制用法について、11世紀頃の中世スラヴ語から現代ロシア語まで、その変遷を追ったかなりよくばったものだった。

すでにロシア語の時制に関する9編の論文といくつかの小論文を発表していて、後はそれら一つにまとめればいだろうと軽く考えていたのだが、実際にはまだ多くの重要文献が未見のまま抜け落ちていた。ロシアの古い専門図書を手に入れるためには、モスクワにあるレーニン図書館に注文を出さなければならなかったが、それができる窓口は、日本では昔からロシア語と縁の深かった早稲田大学、東京外国語大学、日ソ図書館の3ヶ所しかなかった。しかたなく早稲田大学の図書館で、一人1回3件までという制限に従って、細々と注文を繰り返した。

そんなおり、日吉情報センター（今の日吉メディアセンター）で、レファレンスカウンターにすわっていた女性職員のTさんに、「ここでも注文できますよ」と言われた。一瞬、私は信じられず、思わず「エ！ウソでしょ！」と大声で聞き返した。

それ以来、大学に来ると、まず日吉情報センターに立ち寄り、レーニン図書館から注文図書が届いていないかどうかをTさんに確かめるのが楽しみな日課となった。文献が届いていれば目を通し、新たに必要な文献が見つければすぐに注文する。とにかく日吉で即座に注文できるのがうれしかった。

ロシアの図書館はお役所的で、こちらの注文にすぐに応えてくれることは少く（それでも2

週間かかる）、ウンともスンとも言っていないままのことも多かった。

Tさんはまじめな人柄で、こちらが深刻な顔をしたり困った様子を見せると、すぐに悩みを察して、適切にアドバイスをしてくれた。必要な本がなかなか届かなければ、何度でも厭わず問い合わせをしてくれ、また他大学にあると思われる文献を閲覧に行く時は、すぐに紹介状を用意してくれた。

古い貴重な図書の場合は、レーニン図書館から現物ではなく、マイクロフィッシュの形でくることも多かった。3階のマイクロリーダーを使って読もうとしても、フィルムが傷だらけでよく読めない。しかたなく数千円払って、紙に焼き直してもらった。それだけ手間暇かけて、必要な部分が数百ページのうち数行だけということも珍しくない。

こうして、楽しくも悪戦苦闘の1年が経った。

日吉情報センターに通うようになって2年目の秋に博士論文がようやく完成し、論文審査を受け（当時の東大の言語学科主任と国語・国文学科主任と指導教官を含む計5名の教授によって、2時間行われた）、なんとかお情けで通過することができた。当時、文部省から各国立大学に博士をなるべく出すようにというお達しがあり、たまたま順風が吹いていた時期だったことが幸いした。

さっそく、Tさんに論文がパスしたことを報告すると、あまり表情を変えない彼女も、その時ばかりは自分のことのように喜んでくれた。

私は博士論文を本にして残すのが念願だったので、審査で指摘された欠点を再度書き直した後、索引を付けて2年後に書籍の形で出版した。

できたての「ロシア語時制論」をもって、私は久しぶりにTさんのいるレファレンスカウンターを訪れたが、そこには彼女の姿はなかった。すでにTさんは、家庭の事情で慶應をおやめになっていた。

1週間後、私は留学のため、ロシアのモスクワ大学へと旅立った。

今も、その本は恵存の署名入りで、部屋の書棚の片隅に置いてある。



西洋貴重書の閲覧と保存 — 小さいたわり

いちこ けんじ
市古 健次

(三田メディアセンター課長代理)

閲覧と保存

表紙の革と、本文の紙と異質な材料からできている西洋貴重書を保存・管理するには、書庫内を恒常的に一定の温度、湿度、換気、空気の循環、低照度を保持してあげることが必要である。この環境が保持されていけば、「世紀」というタイムスパンで西洋貴重書の保存が可能となる。残念なことに本塾図書館ではこうした環境を維持してきたわけでない。まだ改善しなければならないことも多い。

ところで図書として生まれた限り、「閲覧」という行為が伴う。閲覧があって図書としての存在意義がある。閲覧すれば、古い図書は傷む。閲覧と「保存・管理」は二律背反する。そんな事を念頭に欧米で見てきた西洋貴重書の閲覧について紹介したい。

ブックフートン

自然な行為として180度開いて図書を読む。新刊本ならとにかく、西洋貴重書なら「保存」という観点から180度開くのは極力避けた方が良い。無理に開けば、ジョイントに負担をかけるし、背が割れることも考えられる。どのように工夫すれば、貴重書が傷まず、閲覧に提供できるのであろうか。

1998年にシカゴのニューベリー図書館で閲覧の際に次のような体験をした。図書館員はまず図書を、すぐ後に布製のマットを持ってきた。それを図書の下に敷いてくれと言われた。これは「ブックフートン」(写真1: Book Futon)と呼ばれるものである。ブックフートンの使用目的は、図書が180度開くのを防ぐためである。始めの方のページを読むときは、ブックフートンの左を丸めて厚くし、左側の表紙が机に着かないようにブックフートンで表紙を支える。真中の辺のページを見る時はブックフートンを左右均等に丸めこみ、ちょうど図書がV字型に開くようになる。最後のページは、始めの方のページと逆になる。このようにして閲覧という図書を傷

める行為から図書を守っている。ブックフートンの仕立て図を送ってもらい、製作して閲覧に供している。

(写真1: Book Futon)



ブックフォーム

大きなフォリオ版では、次のように対処していた。それには「ブックフォーム」(写真2: Book Foam)と言うブックレストで、スポンジ製で、機能的に三つのことが考慮されている。一つは図書が180度開かないようにしている。次に貴重書を閲覧しやすいように角度がつけられている。手前を低くし、後ろを高くしている。最後に図書の厚みに応じてスポンジの位置をずらすことが可能になっている。図書には薄い1センチくらいのものから、10センチのものもある。二つのスポンジの間隔を図書の厚みに応じて、スポンジの位置をずらしてあげれば良い。このブックフォームは日本国内では探せなかったので、アメリカのメーカーに注文して入手した。ブックフォームは、ニューベリー図書館、シカゴ大学図書館、イェール大学図書館のバイニッキ貴重書図書館、そして1999年出張で訪れた大英図書館、オックスフォード大学のボードリアン図書館でも使われていた極めて一般的なブックレストである。

このほか、ブックレストを自作してみた。ブックフートンに対抗して「ブックソファ」や、貴重書図

書館として有名なニューヨークのモーガン図書館で使った写本用で、蝶番を工夫したブックレストなどである。ブックレストへの関心こそが、貴重書担当者がまず気が付かなければいけないことであると痛感した。

(写真2: Book Foam)



いたわり

ニューベリー図書館で驚いたことは、貴重書書庫と閲覧室との温度と湿度の差を少なくするように配慮していることである。ペラムのように湿度に敏感な製本は、乾燥して暖房の利いた閲覧室で長時間閲覧していると、表紙が曲がる可能性が高い。温湿度における書庫と閲覧室との関係、そしてブックレストの使用は日本では余り聞かない。閲覧室環境の整備は、建物の構造に関わり、そう簡単に改善はできない。しかしながら、閲覧時における図書の傷みを防ぐことは容易である。ブックレストは製作も可能だし、購入できる。もっと西洋貴重書にこの小さないたわりを持って良いのではないだろうか。西洋貴重書こそが、日本においてまさに稀観書、「稀まれに観みる書」であるから。

三田メディアセンターニュース2

特別図書の金額変更

特別図書予算が年間20万円から年間21万円に増額されました。

三田地区テクニカル業務担当発足

本年4月より三田地区のテクニカル業務担当が発足しました。

2階、5階にNTワークステーションを導入

4月に2階グループ学習室、5階図書館・情報学資料室へノートPC型のNTワークステーション(オープンPC)を導入しました。NTアカウントをお持ちの方に限りご利用いただけます。

貸出用カメラの台数を追加

AV編集室の貸出用デジタルビデオカメラ・デジタルスチールカメラの利用増大に応じて8月から貸出用カメラの台数を追加導入しました。また、三脚の貸出も開始しました。

5階研修室にノート型パソコンを設置

5階研修室にノート型パソコン10台を設置しました。授業などの際、実習用に利用できます。

E-mailレファレンス対象者を拡大

教職員の方を対象に実施していたE-mailによるレファレンスサービス(所蔵調査・事項調査に限り)を大学院生まで拡大実施することにしました。

あて先: reference@mita.lib.keio.ac.jp

大学院生のためのライブラリーオリエンテーション

毎年4月に実施している簡単な館内ツアー、OPACの操作方法の紹介を行うライブラリーオリエンテーションに加え、大学院生入学者を対象に蔵書やサービスを詳しく案内するライブラリーオリエンテーションを5月、6月、7月に各1回ずつ開催しました。

三田メディアセンター オープンPCの展開

ほ さか むつみ
保坂 睦

(三田メディアセンター)

はじめに

三田メディアセンターでは2000年7月より、キャンパス・ネットワークに接続可能なWindows NTワークステーション・オープンPC（パソコン）を増設し、あらたな運用を開始した。現在、2階グループ学習室に20台、5階図書館情報学資料室に8台のノート型PCを設置し、利用者の便に供している。利用時間は、8時45分から20時40分までで、慶應義塾大学所属者のうち、NTワークステーションのアカウントを取得した者が利用可能である。ただし、プリンタは設置されていない。

経緯

従来三田メディアセンターでは、1998年春学期より、1階オープンエリア（旧目録ホール）にてデスクトップPCを提供してきた。ここにはWindows NTワークステーションが30台、ネットワークプリンタが5台設置され、開館時間中は自由に利用できる。図書館が提供する各種データベースのみならず、各種文書作成ソフトのほか、画像コンテンツを編集するためのソフト、統計分析ソフト等が利用可能である。デスクトップ各台を壁で仕切り、十分な個人用スペースが確保されているため、レポートやデジタル・コンテンツの作成、就職活動の情報収集などに、幅広く利用されている。図書館の資料を参照しながらの利用が多いという側面もある。

増設の必要性

オープンエリアでは、特に昨今利用者が急増傾向にあった。8時45分の開館と同時に利用者がなだれ込み、常時、空き待ちの行列ができていた状態である。閉館時間ぎりぎりまで満杯状態であることも珍しくない。三田キャンパス全体では500台以上ものPCが設置されているが、そちらでは図書館内の禁帯出資料を参照できないこと、いったん図書館から退出する必要があること等の理由から、オープンエリアに利用が集中していたといえよう。一日の平均入館者が2500人を超す、という状況の中で、図書館内で提供されるNTワークステーションはたった30台しかない。しかも図書館内には、CD-ROMコーナーの検索専用端末を除き、簡便にネットワー

クへアクセスできるPCが存在しなかった。そのため、並ばずに利用可能なPCを増設する必要性に迫られていた。

オープンPCの特性

三田メディアセンターでは、現在3種類の利用者用PCを提供している。1番目はOPAC専用端末、2番目は各種データベース検索や資料閲覧用端末、3番目がキャンパス・ネットワークへの接続が可能な端末である。オープンエリアのPC、および2階・5階のオープンPCは3番目のカテゴリに分類される。利用者登録と環境設定は、IHITCの運営方法に準拠している。

これらのPCはWindowsNT4.0・SP6を搭載し、それぞれの利用方法に合わせてクライアント環境を調整している。個人スペースの広いオープンエリアに対し2階・5階では、細長い台に複数のノート型PCを設置するという方針をとった。ここでは、手軽にネットワークアクセスができるということを重要視したため、椅子およびプリンタ、画像編集系ソフトを提供していないが、メールチェックやデータベース検索端末として、簡便に利用できるようになっている。

現在の問題と今後の展開

夏休みの利用頻度はそれほど高くないようであるが、秋学期以降は、入館者数の増加と認知度の高まりにより、利用者の増加が見込まれよう。利用に際しては、閲覧席の椅子を運んできて利用する例や、ケーブルを長く引っ張り閲覧机に載せて利用する例が問題となっている。ケーブルについては短いものを用意して差し替えを行ったが、ポスター掲示等を通して、オープンPC設置の趣旨を正しく理解してもらう必要があるだろう。

最近では個人のPC普及率が飛躍的に高まっている。大学側・図書館側から全面的に利用者用PCを提供するという環境は、過渡的なものであるかもしれない。そのため将来的には、図書館内で情報コンセントを提供することで、個人の端末から直接キャンパス・ネットワークにアクセスできる環境を、あわせて整えていきたいと考えている。

スタッフルーム

本とさっちゃんから学んだこと

さくま きみこ
佐久間 公子

(理工学メディアセンター)

私の家にはここ何十年もの間、連休になると子供たちが遊びにやって来る。子供たちの内訳は以前は従兄弟やほとこやその友達だった。今は甥や従兄弟の子供やその友達、そして私が知らない子もいる。自分の部屋に閉じこもっていれば彼らの相手をしなくてもいいのだが、食事だけは一緒にすることになっていた。私が高校生になったあたりで、名前も知らない初対面の子供たちとおかずを分け合うのがなんとも不思議だった。

ある時から、さっちゃんという障害を持つ子がそんな仲間に入ってきた。ほかの子の親たちは帰ってしまうのだが、その子は一人では座れないのでお母さんが抱えている。私が帰宅すると男の子たちはテレビゲームを、女の子たちはさっちゃんの周りで本を読んでいた。その後、恒例の食事が始まり、幼稚園生から高校生までさまざまな関係の子供たち（その時は12人）が集うのだが、その風景に妙な安心感を覚えるのだった。

今の子供たちの遊びはビデオやテレビゲームが多く、有名推理アニメは私が見てもわくわくするし、ロボットアニメはスケールの大きさにつられて最後まで見てしまう。初対面であろうとも一緒にアニメを見たり、ゲームをすれば共通の話題や共感を得ることができる。しかしそんな遊びができないさっちゃんと遊べる自信が無く、彼女のおかあさんの気持ちも分からず、母にそれとなく文句を言った。

最近、書店で私の幼い頃の愛称と同じ書名をもつ中学生向けの絵本を見つけた。障害を持つ子がおねえさんの結婚式に出席するにあたり、その子の行動と家族の対応が描かれていた。

「もし、名前をかくしたり、かくれたりしなければならなかったら、きいちゃんの生活はどんなにさびしいものになったでしょうか。」

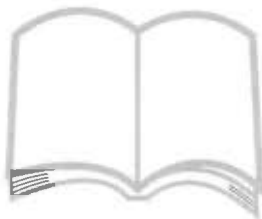
短時間で読めてしまうこの本の文中のフレー

ズが気になった。さっちゃんを気の毒に思い、私たちと一緒にいないほうがいいのだと自分勝手に思っていた。また甥や従兄弟の子供たちは、連れてきた友達から後で何か言われなかったのだろうか心配したりした。しかし本に書かれていたことが正しいのなら、さっちゃんは他の子供たちと一緒にいてよかったのだと思うようになった。さっちゃんは私達から隠れる必要もなく、あるがままにいていいのだ、そしてあやうく彼女の人生をさびしくさせようとするところだった。

本のあとがきに「地球には、男の人・女の人・国の違う人・ことばの違う人・背の高さが違う人・傷害のある人・ない人・いろいろな人がいます。生きている人はみんながすてきだと言うこと……」とある。子供たちとこの本から、同じ地球にいろいろな人がいるのが自然で、その存在を尊重しようと思った。

学校という小さな社会の中にもいろいろな人がいる。「兎の目」という本は、子供たちが学んだり、喧嘩したり、遊んだりしながら社会に適応していく姿や新たな才能を発揮したりする姿が、また彼らを取り巻く大人たちの愛情や格闘が面白おかしく描かれていて、ずんずん読んでしまった。あとがきに「…大人や子供たちの魅力は、すべて「美しく未熟であろう」とするところ」とある。魅力からくる摩擦もあるが、さまざまな魅力的な人間がいる世界はおもしろい。まわりを見回せば、素直な人・元気な人・反抗的な人・無表情な人、みな真摯に生きている。そして子供でも大人でも成長していく姿は美しい。

そういえばこの前は、従兄弟の子供がメキシコの少年たちを連れてきたそうだ。甥や友達が何語でコミュニケーションしたのかは定かではない。さっちゃんは異国の少年たちをどう感じたのかな。



日吉メディアセンターの蔵書再編成への取り組み

あらい けいこ
新井 圭子

(日吉メディアセンター係主任)

1. はじめに

日吉メディアセンターの図書館棟は1985年4月、40万冊の収容能力を持つ建物として新築された。40万冊の内訳は、当初から学生用20万冊、研究者用20万冊といわれてきた。当時、一般教養課程の学生を主たる利用者とする学生用コレクションは、専門課程のコレクションに対し学習用コレクションと位置付けられ、蔵書再編成作業により蔵書数の上限を20万冊とすることが予定されていた。¹⁾つまり、コレクションの中核はカリキュラムに即した基本学習図書及びその複本で占められ、資料の永久保存に重点を置くのではなく、常に活用される新しい資料を備えることが優先されていた。限られた書庫スペースを有効に利用するために学生用コレクションには蔵書再編成という課題が課せられたが、毎年を除籍作業は主に、亡失、汚損・破損、改版、重複によるものにとどまった。²⁾学生用コレクションは築15年が経過した今日、17万冊から34万冊(平成11年度統計)へと増加し、1996年に一部(藤山記念図書館時代に地下に別置されていた1965年までの受入図書)を保存書庫(山中資料センター)へ移管したが、書架は収容能力の限界に達しつつある。

一方、ここ数年で図書館のシステム化が進み、目録データの溯及入力・データのシステムへの搭載が完了し、慶應義塾大学全地区図書館の蔵書がWeb上のOPACで検索可となり地区を越えた重複調査が可能になった。併せて利用履歴データ等も調査できる閲覧システム、除籍・資料移動に伴う籍移動システムも整備された。

更に、地区間の相互貸借の運用体制が整備され地区にとらわれることなく資料を利用できるようになったこと、カリキュラム改定など利用者を取り巻く環境も変化してきたことから蔵書構成の見直しに本格的に着手した。

蔵書再編成の実施対象資料は学生用コレクション

の図書・雑誌であるが、必要に応じて教員と協議した上で研究室資料も含めることにした。作業を始めて半年ではあるが、途中経過と今後の展望について述べることにする。

2. 実施計画

蔵書再編成を実施するにあたり、以下の項目について作業を計画した。

1) 資料の買い換え、除籍

- 教科書や必読参考書として複数購入した重複資料で利用頻度から役目を果たし終えたと判断した資料の除籍。
- 酸性紙のために劣化が進んでいる資料の買い換え。
- 内容が年を追って逐次改訂され、あるいは改版等により改訂され利用価値を失った資料の除籍。

(但し、史料的価値の認められるものを除く)

- 内容が今日的な利用の意義を失ったと判断されたものの除籍。
- 媒体変換することにより、既存の媒体に利用価値がないと認められたものの除籍。

2) 資料の再配置

- 図書館、山中資料センターの各書庫の配置見直し。
- 日吉研究センター(仮称)レファレンスライブラリー(2002年4月オープン予定)開設に伴う再配置。教員側と協議をしつつ、2001年秋頃を目処に準備作業を完了させる。

3) 利用統計調査等による蔵書評価

主題ごとに、蔵書構成、利用実態等を把握した上で蔵書評価の実施および蔵書再編成の指針の作成。

4) 選定基準の整備

カリキュラム改革を反映させた選定基準を策定し、日吉の教育環境、利用者の多様化したニーズに対応

した適切かつ特色あるコレクションを構築する。

蔵書再編成の作業母体としては図書館図書選定委員会がその責を負う。実働部隊として検討事項の抽出、作業方針・作業方法の検討などを行うために筆者を主査とする「蔵書リフレッシュ・ワーキンググループ」(以下リフレッシュWG)を設置した。実作業(書庫調査、利用実態把握、除籍作業、買い換え発注等)はリフレッシュWGメンバーが中心になって行すが、必要に応じて各担当の協力を得ながら作業を進める。

3. 除籍作業実施手順

ここでは2.で述べた除籍について、もう少し詳細な実施手順と方法について述べる。

1) 重複図書の除籍

教科書・参考図書として複本購入したもの、重複調査ミス等により重複したものの除籍を目的とする。貸出対象図書全てについて請求記号をキーにして、重複リストを作成。リストをチェックして複本を必要部数まで減らす。(最近のものは3部まで、役目を果たし終えたものは1部所蔵を原則とする。)

2) 内容の改訂による旧版除籍

書名重複リスト(書名・責任表示、シリーズ名が同一のもの、版表示があるもの等をキーに)を作成。リストをチェックし最新の版を残して旧版の除籍を網羅的に行う。

3) 汚損・破損による除籍

図書返却時に発見される場合だけでなく、汚損・破損図書の除籍・買い換えという観点をもって日々の書架整理を行い、組織的に除籍を進める。従来のように修理に回すのではなく、可能な限り新版(刷)および類書によって置き換える。

4) 今日的な利用の意義を失ったと判断されるものの除籍

1)～3)の作業が終了した時点でリフレッシュWGメンバーだけでなく各担当スタッフにより主題ごとの書庫調査を行って除籍を進める。この作業については主題分野の専門家(教員)にも意見を聞き方針を固めてから慎重に進める。

5) 山中資料センター資料の除籍

日吉研究室,他地区メディアセンター所蔵と重複するものを他地区の了解を得た上で除籍する。

6) 雑誌の除籍

図書館・研究室で重複しているタイトルについては、研究室分を一時保存(1年間)とし、それを経過した時点で各部門の承諾を得た上で廃棄する。(1999年度第2回日吉メディアセンター・ITC協議会で承認済)

7) 研究室レファレンス資料の除籍

新しくできる日吉研究センター(仮称)レファレンスライブラリー(収容能力2万冊)の蔵書構築に向けて、研究室各部門から選出されたメンバーと事務局としてのメディアセンタースタッフからなるレファレンスライブラリーWGで協議して、研究室ごとに分散している既存の蔵書のうち除籍が相当と認められたものの除籍を行う。

4. 除籍作業途中経過報告

2000年8月現在、3の1)であげた、重複図書の除籍について作業を終了した。複本購入した教科書等で役目を果たし終えたと判断する根拠は資料の出版年である。今年度から15年溯った時点である1985年以前に受け入れられた重複図書が除籍候補となる。(収容能力20万冊を年間増加冊数13,000冊強で割った、約15年を適切な蔵書保有年数とする³⁾)

複本を必要部数に減らす際、同時にOPAC検索をして他地区とのバランスも考慮した。また、一律に除籍するのではなく、除籍候補となった図書を書架から引き上げた後、1995年から貼付しているDATE-DUEを見て、貸出回数を調査した。5年間で16回以上(年3回以上)のものは、可能な限り新版(刷)で買い換え、買い換え不可能の場合は除籍を取り止め必要に応じて修理するという救済措置をとった。

表1に主題ごとの蔵書冊数、重複冊数、除籍冊数、除籍取り止め及び買い換え冊数等を示す。

表から社会科学が全蔵書に占める割合(26.2%)、重複冊数(8,853冊)、除籍冊数(3,360冊)共に群を抜いて多く、社会科学の教科書複本が多いことがわかる。

しかし蔵書冊数に対する重複冊数の比率で見ると

表1 蔵書リフレッシュ 主題別重複図書除籍一覧

	蔵書冊数	対蔵書比率	重複冊数	対蔵書比率	除籍候補	取りやめ 買い換え	対除籍候補比率	除籍冊数	対重複冊数比率
000	19,553	6.2%	1,074	5.5%	299	0	0.0%	299	27.7%
100	22,802	7.2%	1,990	8.7%	914	44	4.8%	914	48.7%
200	35,310	11.1%	2,311	6.5%	969	16	1.7%	969	40.8%
300	83,187	26.2%	8,853	10.6%	3,383	120	3.5%	3,360	38.0%
400	33,333	10.5%	4,253	12.8%	1,839	202	11.0%	1,823	42.6%
500	19,383	6.1%	1,134	5.9%	481	54	11.2%	479	42.3%
600	7,814	2.5%	376	4.8%	225	1	0.4%	225	60.7%
700	22,992	7.2%	969	4.2%	426	4	0.9%	426	42.0%
800	12,371	3.9%	1,286	10.4%	496	5	1.0%	496	37.8%
900	60,520	19.1%	2,890	4.8%	1,20	3	0.2%	1,202	41.1%
合計 平均	317,265	100.0%	25,136	7.9%	10,235	449	4.4%	10,193	40.6%

表2 図書の主題別館外貸出の利用状況 (2000年1月7日～31日)

NDC	000	100	200	300	400	500	600	700	800	900	合計・平均
貸出冊数	793	1,305	1,401	7,113	3,875	1,786	461	1,598	584	1,773	20,689
%	3.8%	6.3%	6.8%	34.4%	18.7%	8.6%	2.2%	7.7%	2.8%	8.6%	100.0%
貸出タイトル数	659	1,118	1,239	5,604	2,868	1,476	405	1,405	522	1,559	16,855
利用回数	1.20	1.17	1.13	1.27	1.35	1.21	1.14	1.14	1.12	1.14	1.23

表3 日吉メディアセンター主題別蔵書数の比較 (参考図書,雑誌を除いた和書)

		000	100	200	300	400	500	600	700	800	900	合計
1984年度	蔵書冊数	4,376	11,566	14,958	33,792	13,856	5,899	3,242	8,881	4,587	30,100	131,257
	比率	3.3%	8.8%	11.4%	25.7%	10.6%	4.5%	2.5%	6.8%	3.5%	22.9%	100.0%
2000年度	蔵書冊数	12,727	21,048	30,049	78,453	30,622	18,150	7,350	19,333	9,799	50,167	277,698
	比率	4.6%	7.6%	10.8%	28.3%	11.0%	6.5%	2.6%	7.0%	3.5%	18.1%	100.0%

表4 主題別貸出図書の利用率ランキングの移り変わり (貸出タイトル数の対蔵書比)

	1984年	2000年
1位	500	400
2位	400	500
3位	300	300
4位	100	700
5位	800	600
6位	600	800
7位	700	100
8位	900	000
9位	200	200
10位	000	900

表5 出版年別貸出図書の比較

2000年1月 7日～31日	～1975	1976 ～1980	1981 ～1985	1986 ～1990	1991 ～1995	1996 ～2000	合計
貸出冊数	1,407	1,593	2,476	3,364	5,006	6,227	20,073
%	7.1%	7.9%	12.3%	16.8%	24.9%	31.0%	100.0%

15年以内：72.7%
16年以上経過：27.3%

1984年度	～1960	1961 ～1965	1966 ～1970	1971 ～1975	1976 ～1980	1981 ～1985	合計
貸出タイトル数	415	730	1,335	1,470	9,512	13,001	26,463
%	1.6%	2.8%	5.0%	5.6%	35.9%	49.1%	100.0%

15年以内：90.6%
16年以上経過：9.4%

出版年不明616冊

と、自然科学 (12.8%), 社会科学 (10.6%), 言語 (10.4%) の順になる。また、利用頻度が高いために除籍を取り止めたり、買い換えた冊数、それらの除籍候補に対する比率を見ると技術 (11.2%), 自然科学 (11.0%) が社会科学の比率 (3.5%) を大きく上回り、次いで哲学 (4.8%) が社会科学よりも上位にきている。但し哲学の多くは心理学関係図書で占められる。一方、全蔵書に占める割合が19.1%と高い文学については、買い換えは0.2%とごくわずかであった。日吉メディアセンターでは1~2年生だけでなく隣接する矢上キャンパスの3~4年生、大学院生を含め理工学部の学生の利用が多く、それがそのまま自然科学、技術分野の利用の多さに如実に反映されている。総記の除籍率が少ないのは、ここ10数年で激増している情報処理、コンピュータ関連の図書が出版年を基準とした今回の除籍対象とならなかった為と考えられる。

5. 蔵書構成と利用実態

蔵書構成の調査・分析、利用統計による学生の利用実態の把握も同時に行った。表2に貸出対象となった図書が1タイトル当たり何回利用されているかを示す。冊数では社会科学、自然科学、技術の順となるものの1タイトル当たりの利用頻度では自然科学、社会科学、技術の順となる。

表3、表4に貸出対象図書の主題別蔵書冊数 (1984年・2000年) と利用率 (貸出図書がその主題の蔵書数に占める割合) ランキングの移り変わりを示す。表3の蔵書比率を見ると1984年当時も今も、自然科学が約11%を占めている。また表4の利用率ではいずれも自然科学と技術が上位を占めている。このことから藤山記念図書館時代から自然科学、技術の需要が多いことを考慮した選書・収集をしていたことがわかる。

蔵書の増加が目立つのが、総記と技術である。これは情報科学 (007)、データ通信 (547)、情報工学 (548)、および環境問題 (519) などの主題が多く収集され利用されていることの現われであろう。逆に哲学、文学が利用率・蔵書比率とも下がっている。

表5に出版年別に見た貸出図書の割合 (1984年・2000年) を示す。やはり出版年が新しいものほど

貸し出されている傾向は同じであるが、出版から16年以上経過した図書の貸出割合は、1984年の9.4%に対し、2000年では27.3%である。

このことから古い図書が利用者の目に触れない閉架書庫にあった当時は、目録カードがあまり利用されず貸出も少なかったのに対し、現在は同じ配架状況 (地下保存書庫など) でもWeb上のKOSMOS II OPACが活発に利用されて古い図書も利用されるようになったことが推測できる。但し、更に調査した結果、山中資料センターへ移管されている1965年以前の図書に対する貸出はわずか1%に過ぎなかった。

このことから山中資料センター資料の他地区との重複除籍を進めることの妥当性が読み取れる。

これらの分析結果は表1に示した数字を裏付けるものでもあり、今後の蔵書再編成の目安として大いに役立てたい。

6. 終わりに

今回の蔵書再編成は永久保存を目的としない日吉メディアセンターの学生コレクションだからこそ可能なものであるが、まとまった廃棄というのは他大学図書館でもあまり例のないことである。今回の措置は限られた書庫スペースを有効に使うにはどのような策が有り得るのかということ、1~2年生を主たる利用者とする大学図書館の現実に適用して考えてみた一つの結論である。

今後実施手順に沿って作業を進めていくと同時に蔵書評価をしたうえで、日吉の特色あるコレクションを構築するための収集方針を策定していきたい。

また全塾で検討し始めている分担収集という観点で更なる蔵書の見直しを行うことが日程にのぼりつつある。一機関内でのリソース・シェアリングであって遅きに失した感無きにしてもあらずだが、日吉メディアセンターもこれに真剣に取り組んでいきたい。

参考文献

- 1) 3) 天野善雄 “新しい選書体制” KULIC Vol.19 p.2-6 (1985)
- 2) 宮入暁子 “学生用コレクションを対象とする日吉メディアセンターの蔵書再編成について” MediaNet No.3 p.9-10 (1995)

外国雑誌価格と出版社の動向について

ひらぶき かよこ
平吹 佳世子

(医学メディアセンター係主任)

はじめに

図書予算の大部分を雑誌で占めている自然科学分野の図書館においては、ここ数年、雑誌価格に対して非常に敏感になっている。これは、外国雑誌価格が諸物価以上に高騰しており、世界的な問題となっているためであるが、特に我が国では、年間予約購読料契約（リニューアル）時期の円為替相場により、さらに価格が左右されるという状況にあるからである。一方、毎年の図書予算額は、雑誌価格に対応して増額されるわけではない。まさしくこの状況下にある医学メディアセンター（以下当センター）では、どのように対処してきたかをここに述べるとともに、今後の出版社の動向やそれに伴う動きについても述べることにする。

1. 外国雑誌価格の高騰

近年の外国雑誌価格上昇がどの程度のものかわかりやすくするために、外国雑誌過去5年間の支払価格を比較してみた。外国雑誌本体価格上昇プラス為替変動を含めた価格で比較したため、同じ雑誌を講読しつづけた場合に、当センターで支払わなければならなかった額の推移となる。比較にあたっては、高額な雑誌ほど値動きが激しいことと、5年の間に講読を中止した雑誌もあるため、2000年予約価格が10万円以上で、5年間継続して購入している雑誌に限定し、2000年予約支払総額（1999年度予算に全額支払）を100としてグラフにした。（図1）

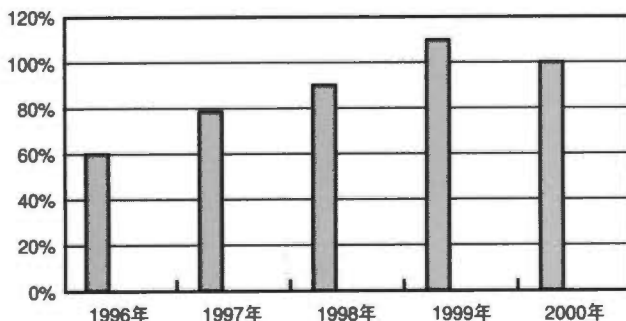


図1 外国雑誌過去5年間の価格推移

これによると、1996年から1997年には16%上昇、1997年から1998年で12%上昇、1998年から1999年は20%上昇、と毎年10%以上の上昇となっている。驚くことに、1996年から1999年の4年間では48%も上昇していることがわかる。一方、5年間の外国雑誌本体価格のみの平均上昇率は約10%であった。1996年から1998年は為替相場が比較的安定していたため、この期間は外国雑誌本体価格の値上げの影響といえる。しかし、1999年には、これに円安が重なったため、値上げと為替の二重の影響を受けることとなった。また、2000年は円高となったため、外国雑誌本体価格は値上がりしたものの、わずかな減少となった。

このように、外国雑誌本体価格は毎年上昇しつづけており、継続購入が原則の雑誌においては、上昇分の予算増額がない限り、何らかの対応策を取らなければならない。また、為替相場による影響も大きい。予算申請時期に翌年の為替相場を正確に予測することは不可能である。

2. 1999年度購読中止について

このような状況下においても、図書予算額は3%～10%未満の増加しか認められず、当センターでは苦肉の策を取らざるをえなかった。まずは、単行本の購入削減である。図書予算枠内で、前年と同タイトル数の雑誌を維持するために、年度の始めは単行本を買い控え、リニューアル後の予算残額により単行本の購入をした。しかし、新刊書を確実に選書していかなければならない日進月歩の医学分野においては、買い控えにも限度がある。単行本予算確保のため、予算に占める雑誌の割合は8割を超えないように努力する必要があった。

その結果、1999年分のリニューアルにおいては、168タイトルもの購読中止となってしまったわけである。168タイトルの選定においては、塾内他地区

所蔵雑誌や、Impact Factorの数値などを考慮して選定したが、削減タイトル数を最小限に押さえるため、高額なものをリストアップして選定資料とした。

新規に購読雑誌を決める際も同様であるが、本来、選書はエディタの陣容や拒絶率、Impact Factorなど、雑誌の質で判断すべきものだが、現状では価格が優先されてしまう。図書館員としてはつらいところである。

3. 大手出版社の動向

雑誌の価格高騰の主な要因としては、印刷体の基本的コストの高騰や、電子ジャーナルへの投資などがあげられている。さらに、購読削減による減収も次年度への価格高騰の要因となっている。これでは、価格高騰→購読削減→価格高騰→購読削減と、出版社と図書館間で悪循環を繰り返すばかりだ。さらに、出版社間での吸収合併がかなり頻繁に行われ、大手寡占状態となりつつあり、出版社業界が厳しい状況にあることは間違いない。

このような中、エルゼビア・サイエンス社は、為替相場に左右される日本の状況を見て、2000年度から円価格のみの設定とした。この円価格の算出方法が不透明であり、当時の実勢レートとの誤差が大きかったため、私立大学図書館協会、日本医学図書館協会、日本薬学図書館協議会などの団体が、エルゼビア・サイエンス社に説明を求める文書を出した。

また、海外では、ARL (Association of Research Libraries) の推進のもと、1997年にSPARC (Scholarly Publishing & Academic Resources Coalition : 学術出版と大学の資源との協力) と呼ばれるプロジェクトが発足した。これは、出版社に対抗して競争を促進する目的の組織であり、実際、同じ分野の同質の雑誌が安い価格で出版できることを示した。

さらに、エルゼビア・サイエンス社は、1999年度から3年間の印刷体購読を確約するために、印刷体と電子ジャーナルを合わせて特典を付けた契約方式SD21を打ち出した。また、アカデミック・プレス社は、電子ジャーナルの契約をすると印刷体が25%価格になるというDDP (Deep Discount Price) 方式を取っている。いずれも、印刷体購読確保と割安感をアピールした出版社側の販売戦略である。

一方、1997年にDOI(Digital Object Identifier ; デジタルオブジェクト識別子)を大手出版社が合意したことにより、論文単位での切り売りも可能となってきた。このDOIが出版業界をどのように変えていくか興味のあるところである。

おわりに

この原稿を執筆している現在も2001年の雑誌価格上昇の情報が続々と入ってきている。日々の為替相場情報にも一喜一憂している。少なくとも為替相場に憂慮しなくてすむように、円高時に外貨預金をして、図書予算を運用するような措置ができることを切に願っている。個人的には、数年後の電子ジャーナルを取り巻く環境が落ち着いた段階で、価格高騰にも歯止めがかかるのではないかと希望的観測をしているが、確実な予測はできない。現在のインターネット普及率と図書館の利用状況から考えると印刷体がなくなるとは考えられないが、やがて印刷体の雑誌が必要ないという時代が来るのかも知れない。また、論文が雑誌媒体を離れて一人歩きするということは、研究者側の情報利用行動にも変化をもたらすだろう。Journal of biological chemistryに載ったとかProceedings of the National Academy of Sciences of the United States of Americaに載ったなどという雑誌のブランド意識がなくなり、やがては、雑誌という形態そのものがなくなる時代が来るのだろうか。

完成した矢上新棟： 拡張された理工学メディアセンター

さかい あきお
酒井 明夫

(理工学メディアセンター課長代理)

着工から竣工まで2年の歳月をかけた新棟が理工学部の新しいシンボルとして矢上キャンパス正面中央に完成した。東西約80m, 南北約40m, 地上7階, 地下2階, 延べ床面積約22,000㎡のこの建物は、楕円(オーバル)を底面とする直円柱状の吹き抜けドーム(1階から6階まで)を中心に、イーストウィング(東側部分)とウェストウィング(西側部分)に施設が展開される形となっている。建物の構造的特徴のひとつは、地下の基盤部分にセミアクティブ免震システム(世界初)¹⁾を採用していることである。従来の免震システムよりも揺れの少ない設計となっており、安全性・快適性の大幅な向上を意図している。

理工学メディアセンター(松下記念理工学図書館)は新棟建設予定地と隣接していたこともあって、幸いにも新棟スペースの一部(イーストウィング1階および同地下1階)が割り当てられることになり、新棟東側1階とこれまでのメディアセンター(以下、本館)西側1階が通路で連結(構造的には分離)されることになった。この際、本館西側にあった正面玄関へのアプローチは新棟の敷地として吸収削除され、正面玄関は入口が新棟に移ったため改装された。なお、玄関脇にあった「松下記念図書館」のプレート²⁾は竣工後に連結通路に移設された。

新棟建設の目的と機能

本年4月に大学院理工学研究科が改組され、3つの専攻に生まれ変わった(学部は大学院に先行して1996(平成8)年4月に改組された)が、新棟の建設は実はこの新組織の発足に合わせて進められてきた。

このことについて安西祐一郎理工学部長は、「新しい大学院は、従来とは異なる分野横断型の組織と

して、独立の気概を持った大学院生を創ることを大きな目標としており、新棟の建設はこの目標を実現するための手段でもある。(中略)新棟の機能は、教育と研究に関わる多様な人々がさまざまな利用する場として、特に共通利用の場(コモンスペース)とオープンスペースを基調としたさまざまな機能の総合的な建物としていることである」³⁾と述べている。

冒頭で触れたように建物中央のドームは楕円(オーバル)になっている。オーバルは幾何的に2つの焦点を持つが、それは学部長がこれからの大学の役割として掲げる「社会中立」(大学は政治・経済・社会の短期的変化に惑わされることなく学問を蓄積し、未来への羅針盤とならねばならない)と「社会コミット」(大学は組織として社会に積極的に貢献しなければならない)という2つの理念を象徴している。

新棟の施設

新棟内の主要な施設は以下のとおりである。

- 先端専門研究室(3～7階)
大学院生のためのオープンな研究スペース。
- 新専門研究室・実験室(4～6階, 地下2階)
大学院新組織で重点分野となった空間・環境デザイン工学と生命理工学のための施設。
- 先端科学技術研究センター(3～6階, 地下2階)
やはりこの4月から発足した組織で、学内外との各種共同プロジェクトの推進や、公募による萌芽の研究の育成などを支援し、その研究スペースを提供する。
- メディアセンター(後述)
- ワークステーションルーム
- セミナールーム
- ディスカッションルーム

- 学生コミュニケーションルーム
- マルチメディアホール
- 学術交流センター

メディアセンターの拡張

新棟におけるメディアセンターのスペースをどう使うかについての検討は、評議員会で建設が承認された1996(平成8)年以降本格化する⁴⁾。全体の会議体においてセンター側の意向を代表者が適宜提案するという形で進められたが、決定にいたるまでには紆余曲折があった。

当初の施設の課題は不足している機能を1階と地下にどのように配置するか、また、業務的な課題としては事務的機能をどのように切り分けるか、であった。

1階についてはまず、入口・入退館ゲート・カウンターの配置で苦慮した。結果としてはオーバルの曲面と柱の位置をうまく取り込んだ形で終決した。BDSゲートは新設となり、本館にあった老朽化したゲートは撤去された。これまで入館はノッチェックであったが、新棟ではバーコード方式による管理システムを導入した。

次に問題となったのはどのような資料を展開するかということであった。新着雑誌や索引・抄録誌を移動する案も出たが、スペースや業務上の動線の問題もあって、代わりにデータベース検索・蔵書検索用の端末や視聴覚用のブースを多数配置することになった。しかしながらこのプランは、いわばハイテクを指向した空間とは逆の方向で落ち着くことになる。というのは学部長の強い意向により、新棟1階はゆったりとして思索ができるような空間をめざすことになったからである。このため、ラウンジや閲覧席には十分なスペースを配し、端末の台数も必要最低限に押さえることにした。閲覧カウンター、OPAC端末のブース、データベース検索端末の机、AVブースは、ディスプレイの画面がなるべく利用者の視界に入らないよう設計されている。

地下1階にはキュービクル、スタジオ、編集室などを置く案も出たが、最終的にはプレゼンテーションルーム、グループ学習室、閲覧席を設置することになった。

事務的機能についてはカウンター部門すべてを新

棟に移転する案も出されたが、スペースの拡張を機に、これまで一体となっていた閲覧・レファレンス・ILLのうち閲覧機能を新棟側に分離し、それぞれのサービス体制を強化することになった。

1階および地下1階の面積、設備概要は以下のとおりである。メディアセンター全体の面積については2,498㎡から1.3倍強増えて3,315㎡になった。

<1階> 527㎡

入退館管理ゲート
 閲覧カウンター
 多目的ラウンジ(31席)
 閲覧席(24席)
 AVブース(6席)
 データベース検索端末(12台)
 OPAC端末(4台)
 書架(24連)
 事務室

<地下1階> 290㎡

閲覧席(42席)
 プレゼンテーションルーム(18席)
 グループ学習室(12席)
 書架(20連)
 倉庫

新棟オープン前後

余談であるが着工して間もなく本館の玄関は封鎖され、男子手洗所を改装して仮の入口が設けられた。この通路しか知らずに卒業した学生諸君には機会があればぜひ新棟を見に来てほしいと願っている。

完成直前には連結通路がアプローチとなり、改装されたかつての玄関からの出入りとなったが、この頃からスタッフは日常業務と新棟オープンの準備作業で日々追われた。そして臨時閉館することなく、本年3月31日、無事にオープンの日を迎えたのである。

建物が完成して改めて眺めてみると、とりわけ1階のラウンジは豊かな緑が借景となって、新棟の中でもやすらぎと開放感を与える指折りの空間となっている。

4月15日には矢上新棟落成記念式典が盛大に催され、多数の見学者をお招きした。また、7月から

はプレゼンテーションルーム、グループ学習室の運用を開始した。

オープンしてすでに半年近くが経過し、新しい環境でのサービス体制が定着しつつあるが、同時に問題点もいくつか出てきている。これらを着実に改善しながら、新棟を中心に展開される新時代の理工学部の研究・教育体制を強力に支援していきたい。

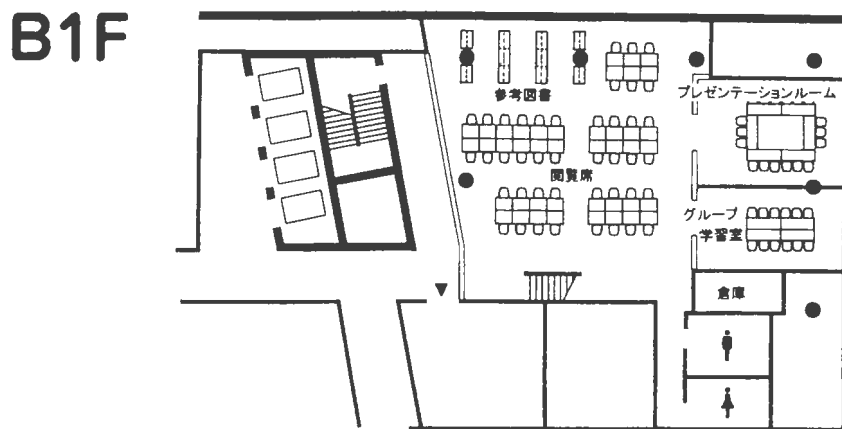
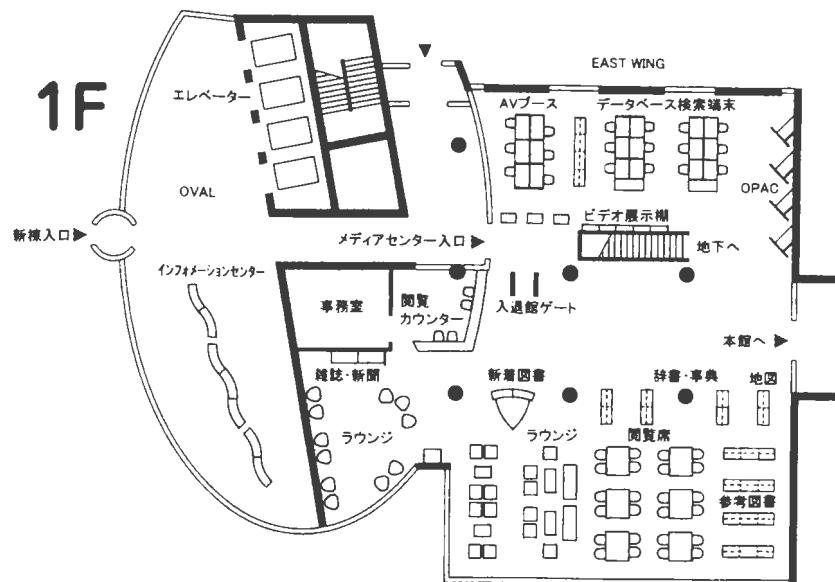
なお、仮称だった矢上新棟はこの8月に「創想館」と正式に命名された。

注・参考文献

1) 本塾理工学部, 吉田和夫教授によって開発され

たシステム

- 2) 建物の別称が1993(平成5)年のメディアネット発足時に「松下記念理工学図書館」となったが、プレートにはそれまでの「松下記念図書館」と刻まれている。
- 3) 安西祐一郎, “新棟完成間近の理工学部矢上キャンパス:新ミレニアムへのメッセージ”. 三田評論. No. 1020, 2000, p. 44 - 46.
- 4) 新棟構想はかなり以前から存在し, 1994(平成6)年1月, センターから最初のプラン「研究教育支援のための新たな情報施設について」が当時の新棟建設委員会に提出されている。



スタッフルーム

電車の発車音楽は体に悪い？

よしい ゆきこ
吉井 由希子

(医学メディアセンター)

最近読んだ本に、作曲家でバイオリニストでもある玉木宏樹著の「音の後進国日本」というのがある。その中で著者は、JR駅の発車音楽をはじめ、からくり時計の時報音楽や横断歩道で流れる音楽など、街に流れる音楽を、精神にも体にも悪いと批判し、日本人の大半は本当の美しい「ドミソ」を知らない、街の音を自然な純正律に染め上げよう！と訴えていた。私は趣味で音楽をやっている、音にはとても興味をもっているのですがこの話には妙に納得してしまった。

そういえば、少し前に中央線沿線で自殺者が多いことが話題となり、発車音楽もその原因の一つだ、などとワイドショーなどで騒がれたことがあった。それはちょっと言い過ぎかとも思うが、もし街に流れる音楽が安らぎではなくて実はストレスになっていたら思うと少し怖い気はする。

発車音楽が体に良くないのは何故か？その最も大きな原因は平均律という調律のために起こる不協和音にある。発車音楽の響きは、実は不協和音なのだ。平均律とは、一オクターヴを完全に十二等分する調律のことで日本の音楽シーンのほとんどにこの調律法が使われている。でも実際はこの世に十二の音程しか存在しない訳はなく、無理矢理十二等分された音程で「ドミソ」の和音を出しても完全にハモることはできない。これはちょっと聴いている分には分からなくても、美しくハモった状態の和音と聞き比べると誰にでも分かるほどはっきりした違いがでる。駅のサイン音のように響きが残るような所でこの平均律の和音を使うと不協和音がワンワンと唸っている上に次の音が重なり、更に美しくない響きになる。

完全にハモった天国的な響き（著者はこう表現している）は平均律では出すことができない。例えば美しいコーラスの「ドミソ」の響きを作るとき、はじめの「ド」に合わせて、「ミ」と「ソ」をうたう。（具体的には「ミ」の音程は平均律に

よる「ミ」の音程より低めにとると美しくハモる）こうして一番美しい響きに聞こえるとき、この音程の取り方を純正律という。電車のサイン音のような単純なメロディはこの純正律で作った方が耳にもやさしい。コーラスやオーケストラはこの純正律で音程をとる（ことを目指す）。

あまり関心のない人は、電車の発車サイン音ひとつなんてと思うかも知れないが、聴いていないつもりでも音は知らず知らずの内に人に影響を与えている（はずだ）。例えばテレビドラマのバックミュージック。見ている方はストーリーを見ているのであって音楽を聴いている訳

ではないが、感動的なシーンを演出するのに実は音楽が一役も二役もかっているに違いない。更に最近ではワイドショーでもニュースでも常にバックミュージックが流れている。私は話を聞かずに音の方に気を取られていることも多くて、どうしてここでこんな音楽を使うのかなあ、と

思うこともあるが、とにかく音楽が人に影響を与え、言葉や演技で伝えきれないものを補う効果があるとされているのは確かだ。ならば、故意に音を作って流す時は、気づかない内にストレスになるなんてことがないように気を付けて作らなくてははいけない。

音によるストレスといえば、最近は携帯電話の着信メロディに悩まされている。好きな曲を張り切って作成したのは良かったが、自分の携帯の曲の一番始めの音と同じ高さの音が聞こえると自分の携帯かと思って反応するようになってしまった。気にしているからか、耳は雑音の中からもその音ばかり拾ってしまい、電源を切ったはずなのに鳴っているのかと思うこともしょっちゅうだ。電子音はどこから音が出ているか分かりにくい上、音質も聞き分けにくいせいで、やたらと耳につく。たとえ不協和音が解消され美しい和音が作られたとしても、そんな電子音が街中に溢れていくのはどうかと思う。



電子ジャーナルの導入 — 理工学メディアセンターの事例

たち たづこ
館 田鶴子

(医学メディアセンター課長代理)*

すぎもと わかば
杉本 若葉

(理工学メディアセンター)

※2000年5月まで理工学メディアセンター勤務

理工学メディアセンターでは1996年当時、IOP(英国物理学会)学会誌への登録を始めたのが、電子ジャーナル導入の第一歩であった。その後、APS(米国物理学会)等の理工系学会およびSpringer LINK等の商業誌が相次いでオンラインで論文フルテキストを公開するようになり、まずプリント購読に付随する無料アクセスの登録から開始した。1999年には慶應義塾大学メディアセンター本部がAcademic Press/IDEALとPQD(ABI/Inform, Academic Research Library, Social Science Plus, Medical Library)を全塾契約し、電子ジャーナルの導入に弾みがついた。2000年、理工学メディアセンターでも有料契約を結び今日に至っている。

1. 電子ジャーナルの特徴

速報性、時間・場所・製本中などによる利用上の制約が少ない、プリントにない情報が得られる(supporting information, online only articles)、検索機能に優れている等の基本的な特徴に加えて、論文間のレファレンスリンク、書誌データベースとの間でオープンリンクが進み、益々その有用性は高まっている。また、フルテキストへ連動したリンク付きのTOC(Table of Contents)アラートサービスが無料で配信されるなど、多くの出版社で付加的なサービスも見受けられる。

一方、電子ジャーナルは突発的な事故によるサーバのダウン、設定ミス、ネットワークの不具合等の原因で利用に支障が出る。また、利用者自身のコンピュータとネットワーク環境に依存するため、提供側だけの整備では解決しない問題も抱える等、プリント版にない側面をもつ。

図書館間のリソースシェアリングの観点からみれば、プリント版よりは電子ジャーナルが向いてい

る。しかし、過去の資料の保存・アクセスという大学図書館の役割のひとつに電子媒体がどこまで応えてくれるのか、まだ実験段階で確たる保証はない。よって、電子ジャーナルの導入がスペースの節約、受入・製本管理に関わるコストの削減につながっていくのか、まだ答えはないし、出版社の価格政策の与える影響も大きい。

2. 理工学メディアセンターの電子ジャーナル契約 2.1 導入経緯

前述のように1996年電子ジャーナルのテスト的な利用を開始後、1997年に「オンラインジャーナルリスト」を作成し利用者のためにタイトル毎のリンク情報をWWW上公開した。以降、主要な学協会誌を中心に、徐々にアクセスできる雑誌を増やしていった。

1999年、出版社が次々と電子ジャーナルの刊行を本格化した。特にプリント版団体購読者に対して無料アクセスを提供するところが飛躍的に増加したため、HighWire Pressを始め、理工系のコアジャーナルで無料アクセス可能なものはできるだけ登録するように心がけた。1996年秋に導入していたMathSciNet(MathSciのInternet版サービス)では、まもなくAMS(米国数学会)、SIAM(米国工業応用数学会)等の学会誌を始めいくつかの提携先出版者のフルテキストへのリンクが可能となった。全世界に無料で公開されているPubMedのLinkOut機能も同様に出版者サイトへのリンクを提供している。こういった書誌データベースの動きもオンライン登録を進める牽引力となった。

1999年は各出版団体が有料化の実現性を高めた時期でもあった。"Science Online"(AAAS, HighWire Press)も2000年からはサイト契約が認

められたので、メディアセンター本部で一括契約を結び、全誌でフルテキストが読めるようになった。理工学メディアセンターとしても、電子ジャーナルの有料契約に踏み切った年となり、いくつかのコアジャーナルのオンライン購読契約を結んだ。その時に考慮したことは、電子出版として高品質なもの、契約額が適正であるもの、かつ理工学部の利用者に強く求められている雑誌であることであった。まず、キャンパス外への複写申し込みの最も多いライフサイエンス分野を優先的に考え、医用工学の研究者へアンケートを実施し、その分野の学協会誌を中心に出版しているHighWire Pressのタイトルリストに希望を入れてもらった。その結果、21誌を選出した。リストになくても希望タイトルがあがったもので契約に結びついた雑誌("Oncogene")もある。大学院改組に関して、ライフサイエンス系の研究者・学生数は理工学部で増加傾向にあり、雑誌コレクションを強化する必要が出たこともオンライン購読契約を進める要因であった。この分野は塾内医学部ですでにプリント版を購読しているものが多いため、リソースシェアリングを図る意味でオンラインのみの契約があれば優先した。しかし、現実には出版社の価格政策からプリント版の購読を前提とするものも多く、希望が出たなかには契約に至らなかった雑誌もあった。先行して医学部が契約していたCell Pressの電子ジャーナル("Cell", "Molecular Cell")の場合は、交渉によって日吉地区(矢上と日吉キャンパス)は医学部の追加サイトとして認められた。

理工系のコアジャーナルでは、パッケージ商品を中心に選んだ結果、ACS(米国化学会)のコア・ケミストリー・パッケージとIEEE(米国電気・電子技術者協会)の雑誌及び会議録パッケージのオンライン契約をした。商業誌に関しては価格政策がまだ見えない部分があったので慎重に扱ったが、仲介した書店の努力もあってWiley InterScienceを理工学部及び医学部で契約するに至った。

理工学メディアセンターで維持している「オンラインジャーナルリスト」(<http://www.lib.st.keio.ac.jp/ejournal/online.html>)は矢上キャンパス(理工学部)で利用可能な電子ジャーナルのアルファベット順リンク集である。契約しているパッケージ

商品や主な出版者サイトをお知らせする「電子ジャーナル案内」(<http://www.lib.st.keio.ac.jp/ejournal/DL.html>)も別ページに用意している。いずれもリンクをクリックして該当サイトへ行き、雑誌名から電子ジャーナルを読んだり、論文を検索することができる。

「オンラインジャーナルリスト」には、雑誌名、出版者、注記(全文が読める年代、トライアル情報、online only注記など)を掲載している。HighWire Pressの電子ジャーナルのなかには、一定期間を過ぎた内容は無料で公開するものがあるので、理工学部の利用者に関係したタイトルはリストに適宜追加した。分類別リストは作成していないため、ブラウザの検索機能で単語・フレーズから探しやすいようにリスト全体を1ページにおさめて、かつ記述も軽くし、表示に時間がかからないようにした。将来的には、理工学メディアセンターのWWWで公開しているコレクションページの継続受入中洋雑誌タイトルリスト(タイトル順と大まかな分類別リスト)にリンク情報を移植できれば洋雑誌コレクションの全貌が掴めて便利である。

2.2 コレクションとしての評価

現在のオンラインジャーナルリストの評価と今後の方向性を知るために、T. Stankus²⁾ほかによる化学・物理系科学の基本雑誌リストとの比較を試みた。雑誌リストは雑誌名に加えて可能な限りWWWアドレスが記述されているので、そのURLから出版者を同定し、出版者別に集計した。(表1)なお、Stankusのリストにはライフサイエンス分野も挙げられているが、ここでは割愛する。

表1について、大きく学協会誌と商業誌に分けると、シャドウ部分が学協会誌で157件、商業誌は263件であった。リスト中のタイトルはランク付けもされている。それによると、化学ではACSの優位性が明らかである。(リスト中、ACSのランキングは常に1位か2位)また、ACSはSPARC(the Scholarly Publishing and Academic Resources Coalition)(<http://www.arl.org/sparc/>)の最初のパートナーとなり、1999年7月にオンラインを先行させた雑誌"Organic Letters"を出版している。これは先述のコア・ケミストリー・パッケージに含まれる。物

表1. 理工系コアジャーナルの出版者別リスト — Stankusのリストをもとに —

		化学	物質科学	物理学・ 応用物理学	地球科学・ 地球物理学	計
1	Elsevier	31	14	22	26	93
2	Wiley	28	4	1	5	38
3	Springer	7	1	9	8	25
4	Academic Press	11		6	1	18
5	Institute of Physics (IOP)		1	17		18
6	American Chemical Society (ACS)	14	1			15
7	Royal Society of Chemistry (RSC)	14	1			15
8	Kluwer	2	1	5	5	13
9	Marcel Dekker	7	3		1	11
10	American Institute of Physics (AIP)			10		10
11	American Geophysical Union (AGU)			1	8	9
12	Allen Press				7	7
13	Annual Reviews	1	1	4	1	7
14	Taylor & Francis	1		6		7
15	American Physical Society (APS)			6		6
16	Institute of Electrical and Electronics Engineers (IEEE)			5	1	6
17	Gordon & Breach	3		2		5
18	Optical Society of America (OSA)			5		5
19	Cambridge Univ Press			3	1	4
20	International Union of Crystallography	4				4
21	NACSIS	3			1	4
22	National Res Council of Canada	1		1	2	4
23	PennWell Publishing			4		4
24	Univ Chicago Press			3	1	4
25	World Scientific	1		3		4
26	Blackwell Science	1		1	1	3
27	CRC Press	1		2		3
28	MRS (Materials Research Society)		3			3
29	Thieme	3				3
30	Geological Society of America				2	2
31	Grune & Stratton			2		2
32	Lippincott W & W			2		2
33	Minerals, Metals & Materials Society		2			2
34	Plenum	1		1		2
35	William & Wilkins			2		2
	その他の学協会出版	7	5	8	26	46
	その他の商業誌	6	4	4		14
	出版者不明		1	3	2	6
	計	148	37	138	103	426

(シャドウ部分は学協会出版物)

理学では"Physical Review"の出版者であるAPS及びSPIN Web (Searchable Physics Information Notices) (<http://ojps.aip.org-spinweb/>)を提供するAIPがランキング上位誌を多く占めていた

一方、理工学メディアセンターで導入した電子ジャーナルを出版者別にしたのが表2である。タイトルリストにある雑誌546誌中、有料契約は251誌である。パッケージ商品のIEEE, PQD, Elsevier SDWEはそれぞれ検索エンジンを持つまとまったサービスなので別枠とした。パッケージ商品のタイトル数は1,093誌、このうち963誌が有料契約である。出版者によって契約内で利用可能なバックファイルの年代は異なる

表1, 2を比較したところ、主要な出版者はほぼ重なっていることがわかった。しかしながら、いくつか見落としとしていた出版者も見つかった。そのうち有料契約を必要とするものは、今後の導入候補のひとつとして考えられるであろう。

出版者が提供する利用統計からみた評価は緒についたばかりで、実績を比較する材料を持ち合わせていない。しかし、個別に参照できるいくつかの統計を比較したなかでは、ACSからきた利用開始後3ヶ月統計にみる"Journal of the American Chemical Society"の利用は飛びぬけて多かった。開始したばかりで多数の利用がついたということは利用者に待たれていた感がある。全熟で利用しているIDEALはAcademic Pressの電子ジャーナル全誌の契約だが、雑誌ごとの利用統計からは、つぎの点が興味深い。プリント購読誌であるか否かによるアクセス数の差、購読誌であってもオンライン利用のないタイトルの評価、熟内でプリント版が重複しているタイトルの扱い等である。まだ蓄積が少ないので説得力に欠けるが、今後数年先にコレクションを見直す際には、プリント版の利用との相互補完関係を押さえながら、電子ジャーナルをも含めたコレクションの評価をしていくことが重要である。

3. 契約・登録・管理に関わること

出版者によって差があるが、オンライン購読ライセンス契約の利用条件は、プリント版と同様の著作権を守ることを前提とし、図書館外来者の利用、ILLでの利用に関わる制約に加えて、正規ユーザと

契約サイトの定義、リモートアクセスの許可などの要素を含む。また、交渉が個別に行われるため、適性価格であるかどうか慎重に判断しなければならない。(通常はプリント購読料の10%~25%程度)Cell Press Online Publisherのように国内代理店を介しない契約もあるが、大部分は書店が間に立って価格交渉をすることになる

価格設定は、学協会と商業誌の出版者では、若干異なる。後者ではタイトルごとの契約よりも購読誌全体をコンソーシアム契約することを求める傾向にある。それは、購読管理を1点ずつ行う手間が省けることと、市場の拡大、そして大学図書館では現実には相互利用が頻繁に行われることを予測してのことであろう。益々、個々の図書館の枠を超えた協体制度が望まれている。団体ライセンス契約の場合には契約サイトの範囲をIPアドレスのレンジで指定することになるが、サイトの定義も出版者によって微妙に異なるため、なるべく有利に契約できるような交渉が必要である。

また、2000年契約についていえば、出版者も公開時期を先取りして早めに価格設定をした感がある。IEEEも3月予定で契約した新バージョンのサービスがIP認証方式で正式に稼働したのは5月にはいつからであったし、他の出版者でもタイトルによる遅れも見られた。過渡期の現象であるが、可能な限りトライアルを先行させてから導入するなどの対策を講じるべきであろう。一般的に、一定期間は無料アクセスでテストしておいて徐々に有料化する出版者が多いので、無料アクセス期間に登録・利用するとよい。

また、電子ジャーナルは、提供されるファイル形式(pdfが一般的であるが、htmlもあるとより有効。抄録と参考文献部分だけでもhtmlがあると良い)、公開時期、検索と表示にかかる時間などが最も使い勝手に影響する。出版者サイトによって差が認められるので、事前にトライアルで試した方が安全である。

導入後に気づいた問題としては、オンラインジャーナルリストの維持管理の手間が予想以上に上がることが挙げられる。タイトルの変遷はプリント版と同様に絶えずあるし、バックの電子化も徐々に進んでいく、出版者の変更も起こる、このような変

表2. 出版者別にみた理工学メディアセンター「オンラインジャーナルリスト」
および「電子ジャーナル案内」中の雑誌タイトル数（期間限定のトライアルは除く）

2000年8月現在

オンライン ジャー ナル リス ト	Academic Press IDEAL (1999-)	176 * 全塾
	Elsevier Science	73
	Wiley InterScience (1997-)	42 *
	SpringerLINK (Springer + Birkhaeuser)	42
	HighWire Press (AAAS, APS, Am Physiological Soc, Annual Reviews" FASEB, MIT Press, Nat Academy Sciences, Oxford Univ Press" Physiological Society, Rockefeller Univ Press, ...)	34 * (21)
	CatchWord (Taylor & Francis, Institution of Chemical Engineers...)	19
	American Society for Mechanical Engineers (ASME)	17
	Royal Society of Chemistry (RSC)	16
	Institute of Physics (IOP)	15
	American Institute of Physics (AIP)	15
	Society for Industrial and Applied Mathematics (SIAM)	10
	American Chemical Society (ACS) (1996-)	9 *
	American Mathematical Society (AMS)	9
	American Physical Society (APS)	9
	American Society for Civil Engineers (ASCE)	6
	Oxford Univ. Press	5
	Optical Society of America (OSA)	4
	Electrochemical Society	3
	American Vacuum Society (AVS)	2
	Cell Press	2 *
	EDP Sciences	2
	Acoustical Society of America	1
	Inst for Condensed Matter Physics	1
	Materials Research Society	1
	SPIE	1
Stockton Press	1 *	
Univ Chicago Press	1	
J-Stage	20	
Others	10	
	546 * 251	
EJ 案内	IEEE journals package (1998-)	105 *
	IEEE proceedings online (1998-) *1	1 *
	PQD/ABI Inform *2	857 * 全塾
	Elsevier SDWE *3 (プリント購読誌最新12ヶ月分のみ無料アクセス)	130
	1,093 * 963	

* 有料オンライン購読契約 (251+963=1,214 タイトル HighWire Pressは有料契約21)

*1 IEEE proceedings onlineの年間出版点数は約130件程度

*2 全塾契約しているPQDのデータベースは3種類あるが、ここでは理工でよく使われるABI Informのみ数に入れた。

*3 SDWEタイトルは「オンラインジャーナルリスト」との重複を含む。

化に対して適切な処理が必要とされる。特に見落としがちなのは、オンラインのみを購読している場合の雑誌の動きである。現実にものが見えないだけに、フォローのためのノウハウを積んでいく必要がある。登録の手間は出版者側の努力で徐々に改善されてきているが、コンタクトパーソンの変更は電子メールアドレスと密着しているために、プリント版の宛名住所よりも影響は大きく、その維持も必要である。また、オンライン登録後、更新時あるいは出版者側のサーバ管理の都合上起こる設定トラブルもあった。

今後、電子ジャーナルの契約・登録に関わるノウハウは図書館もある程度持っている必要はあるが、代理店へ任せられる範囲を拡大していくことになるであろう。

4. おわりに

理工学メディアセンターでは、館内に置いてあるNTサーバ機にERLを搭載し、理工系の主要な書誌データベースINSPEC, COMPENDEX, MathSciを運用している。出版者サイトの全文へリンクするテーブルをもつSilverLinkerと呼ばれるソフトがERL上動く。書誌データベースでヒットした文献から直接、出版者の電子ジャーナルフルテキストを表示できる。SilverLinkerの新バージョンでは、雑誌ごとにリンクを選択できるようになったので、理工学メディアセンターで利用可能な雑誌のみ有効とすることで、データベース検索サービスの付加価値が高まる。書誌データベースからフルテキストへの流れをイントラネットでも実現可能となってきた。

電子ジャーナルが与える影響は年ごとに大きくなっている。従来の学術雑誌の形態に拘らないところで密な論文同士のリンク関係が学術コミュニケーションの形を変えている。出版者の垣根を超えて雑誌間のレファレンスリンクによる論文単位のつながりが強化されているのは電子ジャーナルならではの特徴であり、HighWire Press, IOPのHyperCite等のサービスにその雛形を見ることができる。

速報性という面でも、物理学、数学のように以前からプレプリントに重要性が認められている分野ではすでにLosAlamos e-printサーバで未審査論文が公開されており、ピアレビュー誌が中心である分野

では、論文単位での速報的な流通に変化がでてきている。Online-First (SpringerLINK), ASAP (ACS)等、プリント版よりも早くオンラインで公開される出版形式が増えている。こういった論文レベルのアクセスに対応するため、より標準的な番号としてDOI(デジタルオブジェクト識別子)(<http://www.doi.org/>)が採用され、複数の大手出版社が関連論文同士を直接リンクすることに合意して共同で仕組みを作ったCrossRef(<http://www.crossref.org/>)も2000年6月にサービスを開始した。またAPSの発行するPhysical Review C,Dのように、プリント版のページ付けをなくして、論文単位に与えた固有の番号で雑誌を出版する動きも見られる。

出版者の吸収合併、提携、グループ化によって、書誌データベースと電子ジャーナルが合体した大型商品も出現し、益々図書館予算に大きな影響を与えている。それに対抗するように米国にはHighWire Press, SPARCがあり、商業誌の高騰を押える勢力となっている。

めまぐるしく変化している環境のなかで、最も効率よく目的とするサービスを実現させる方法を、メディアセンターは模索中である。何よりも、利用者に対して最善のアクセス手段を保証していきたい。そのために、数多く存在する選択肢のなかから利用者の要求に合う情報を選び、それを統合化し、使う側からは単純に見えるしくみを構築するという大きな仕事が私たちの次のステップである。

注

- 1) 市古みどり, "医学メディアセンターにおける電子ジャーナル導入実験" MediaNet No.7, 1999, p.50-52 (ただし, PQD Medical Libraryについては次年度に契約更新しなかった)
- 2) Stankus, Tonyほか, "The Best Original Scientific Research, Review, Methods and Symposia Journals with Their Current Web Addresses Ranked Within Their Primary Subject Category". Science & Technology Libraries, Vol.18, No.2-3, 1999, p.111-182

白楽サテライト・ライブラリーへの蔵書移管について

— 湘南藤沢メディアセンターの事例報告 —

すぎやま よしこ
杉山 良子

(湘南藤沢メディアセンター係主任)

I. はじめに

湘南藤沢メディアセンターの建物が完成したのは1991年4月。電子図書館ということばが巷で良く聞かれ、F.W.ランカスターのシナリオによると21世紀には紙から電子への移行が進みペーパーレス社会となり、図書館はなくなるだろうと言われていた。デジタルキャンパスを旨とする湘南藤沢キャンパスでは、従来の文献情報中心ではない新しい図書館をイメージして小規模な館が建設された。

2階、3階がライブラリーエリアで、2階はレファレンスセクションとシリアルズセクション、一般書の書庫部分は3階のワンフロアのみ。創設時の蔵書数は図書77,254冊、雑誌1,874冊で、容量は30万冊程度と言われていた。

創設から10年。現実にはペーパーレスの時代とはならず蔵書数は増加の一途を辿り、他地区が10年で1.3倍の蔵書数となったのに対し、SFCは2.76倍の蔵書数となってしまった。(表1)そこで書庫の狭隘化を解消するため、蔵書の白楽サテライト・ライブラリーへの大移動が行われることになった。

三田、医学、理工学メディアセンターの書庫がすでに飽和状態となり蔵書の一部が保存書庫へ移動されたことは周知のことであるが、最も新しく建設された湘南藤沢でも蔵書の移動が行われたことはあまり知られていない。

ここでは、その経緯と方法について報告したい。

表1 所蔵冊数の変化

図 書			雑 誌				
	1990年	2000年	増加率		1990年	2000年	増加率
三 田	1,342,086	1,653,658	1.232	三 田	337,873	447,568	1.325
日 吉	403,521	549,098	1.361	日 吉	75,451	110,026	1.458
医 学	69,633	91,566	1.315	医 学	150,109	224,402	1.495
理 工 学	79,478	104,352	1.313	理 工 学	141,985	186,818	1.316
湘南藤沢	77,254	213,230	2.760	湘南藤沢	1,874	54,617	29.145

II. 経緯

湘南藤沢メディアセンターでは1997年に利用実態調査を行った。その目的は、蔵書内容と利用実態

を調査することによって蔵書構成を見直し、今後役に立てることにあった。結果の詳細はMediaNet No.5に掲載したが、分析の結果、蔵書構成と貸出構成の出版年のアンバランスが明確となった。

1985年以降に出版された図書が全貸出数の83%を満たしているにもかかわらず、これらが蔵書に占める割合は58%でしかないという結果が出た。つまり、蔵書の42%が1984年以前の出版物であり、それらの貸出率が極めて低いことが明らかになったのである。

出版年が古い資料の多くは、創設時に三田から移管された主として1970年代前半までに出版された学生用基本図書(SA,SB)であることが判明した。

これを踏まえて、1999年より蔵書の移管計画を練り始めた。10段以上を占めるシリーズを移管対象と考え、ほとんど利用されない「四庫全書」2,183冊を昨年すでに移管したが、小型サイズの図書で、1連を9段組配架していたので、移管によって生じた空き棚数は図書全体の1%に留まった。その後、移管候補として全集の実測を行ったが全体の3%程度にしかならないことがわかり、小手先の移動ではなく抜本的に考え直す必要があるということで、今年度の春にプロジェクトを立ち上げ、現状調査から行うこととなった。

III. 調査および分析

1段(90cm)を4つに区切ったテープを書架に持っていき、1.4単位で空き棚数を実測した。単位未満のものは切り下げて空き率を計算した結果が表2である。図書、雑誌・新聞、年鑑・統計の3つのブロックに分けて空き率を見たところ、書庫が効率的に利用できる空き率(14%)に比べ、雑誌5.6%、図書8.0%と極めて逼迫していることが明らかになった。しかし、年鑑・統計類の24.1%についても、一度に大量に増える資料も多いため、楽観視できない

数値である。

一方、年間受入冊数、所蔵冊数はどうなっているかを調べたものが表3、表4である。これを見ると、図書の年間増加冊数は15,000冊、雑誌は4,000冊程度である。それぞれの増加冊数を棚数で換算すると年間、図書は500段、雑誌は160段（それぞれ1段30冊、25冊計算とする）必要となる。

表2の結果を見てわかるように、計算上ではすでに今年の増加分が入らないことになってしまった。

そこで、今後3年は移動しなくて良いようにしたいということで、図書30,000冊(1,000段分)、雑誌220段分を移管することにした。該当冊数をどうするかについては和洋別、出版年別にさまざまなブロックを作成し検討した結果、移管対象は利用率を鑑み、和書は出版年が1969年以前、洋書は1979年以前の図書とし、点検リストは出版年不明の図書も含んで作成した。そして、リストアップされたものはほぼ30,000冊となった。

雑誌については、出版年で区切るのがわかりやすいということで、一度は和雑誌を1979年以前、洋雑誌を1989年以前と決めたものの、相互貸借などサービス面について再検討することになり、現時点ではオンライン化されたMoody'sのバックナンバー48段、マイクロフィルムを購入した洋雑誌の1989年以前の8タイトル分49.5段を移管することのみ決定している。

IV. 移管作業

移管作業は資料を棚から抜き出し、箱詰めまでをスタッフがを行い、移送と白楽での棚への配架は外注することにした。

抜き出し作業は書架にリストを持っていき、現物を点検しながら行った。図書の貸出記録が10回を超えるもの、近年の利用が多いものについては移管対象から除いた。逆に、リストに載っていないがSA,SBと判る図書については移管対象とした。

表2 書架使用状況

フロック	請求記号	標容量 段	空き棚数	空き率
図 書	000-233	1,250	123 00	9.8%
	233-332	1,218	79 00	6.5%
	332-399	1,218	23 75	1.9%
	400-699	912	138 50	15.2%
	700-999.FM.X	786	67 25	8.6%
	小 計	5,384	431 50	8.0%
雑誌・新聞		1,845	102 75	5.6%
年鑑・統計		912	219 50	24.1%
合 計		8,141	753 75	9.3%

またAUD（建築・都市デザイン）プログラムに必要な都市計画、建築などの主題は出版年が古くても利用率が高いことから年代で区切らず、すべて残すことにした。

図書は閲覧管理システムで配架場所を「保存書庫」に変更した上で箱詰めし、箱には順番に番号をふっていった。館内3個所に50箱ずつ積み上げ、約150箱になった都度業者に移送等の依頼した。

作業の進行状況については、他地区からも把握できるようにするため、図書館業務ネットワークシステム（Mcvpn）に毎日更新データを掲載している。

なお、所蔵データについては、作業完了後、所蔵館を「白楽」に一括変換してもらう予定である。

V. おわりに

今回の蔵書移管は一時的な避難措置であり、これで終わりではない。特に、製本雑誌については書庫スペースが限られている上に増加量も著しく、早急に移管を検討しなければならない。しかし、相互貸借など考慮すべき点も多く、どのタイトルをどれだけ移管すれば良いのかの判断がむずかしい。

書庫スペースについては全塾で抱える永遠の課題である。これからは蔵書構築、分担保存、保存書庫のあり方などについて、ワーキンググループ等を設置し、全塾的に検討すべきだと思われる。

表3 年間受入冊数（非図書を除く）

	図書			雑誌			総計
	和	洋	小計	和	洋	小計	
1990	—	—	—	—	—	—	—
1991	3,021	7,272	10,293	4,686	3,473	8,159	18,452
1992	8,407	7,029	15,436	3,635	2,090	5,725	21,161
1993	14,327	7,752	22,079	5,144	4,112	9,256	31,335
1994	12,625	6,933	19,558	4,058	3,549	7,607	27,165
1995	8,550	6,864	15,414	2,672	2,476	5,148	20,562
1996	11,511	6,547	18,058	2,577	2,491	5,068	23,126
1997	11,887	4,132	16,019	2,976	2,335	5,311	21,330
1998	7,629	2,349	9,978	2,156	2,421	4,577	14,555
1999	13,451	4,650	18,101	2,219	1,725	3,944	22,045

*1990年度は創設年のため、年間受入数はなしとする

表4 所蔵冊数累計（非図書を除く）

	図書			雑誌			総計
	和	洋	小計	和	洋	小計	
1990	40,632	36,622	77,254	602	1,272	1,874	79,128
1991	43,653	43,894	87,547	5,288	4,745	10,033	97,580
1992	52,060	50,923	102,983	8,923	6,835	15,758	118,741
1993	66,387	58,675	125,062	14,067	10,947	25,014	150,076
1994	78,063	63,114	141,177	18,086	13,492	31,578	172,755
1995	85,783	69,459	155,242	20,674	15,559	36,233	191,475
1996	96,322	75,654	171,976	23,188	17,873	41,061	213,037
1997	107,971	79,030	187,001	26,102	19,951	46,053	233,054
1998	115,015	81,409	196,424	28,320	22,458	50,778	247,202
1999	127,540	85,690	213,230	30,437	24,180	54,617	267,847

白楽サテライト・ライブラリーの現状と今後

みやぎ
宮木 さえみ

(メディアセンター本部課長)

1. はじめに

白楽サテライト・ライブラリーは、開設後約1年と半年を経過した。(開設は1999年3月1日)設立経緯や開設準備については、前号の「MediaNet」¹⁾において、詳述されているので、本稿では現状と問題点を紹介し、今後の運営の参考に供することとする。

2. 現状

2.1 書庫の状況

開設当初は、三田メディアセンターの蔵書の一部を預かり、書庫の棚占有率は、約36%であった。2000年6月から、湘南藤沢メディアセンターの蔵書の移設が開始された。約3万5千冊の図書・雑誌が本年度中に白楽へ移される予定である。その結果、棚占有率は42%になる。

2.2 閲覧環境

開設当初は、閲覧スペースの照明が不備であったが、11月に貸主である東京通運(株)に依頼して、配線工事を行ってもらい、すべての閲覧席に照明をつけることができた。

2.3 運用状況

白楽サテライト・ライブラリーの開館時間は、平日が8時45分から18時まで、土曜日が16時までである。日曜・祝日、夏期と冬期の休業中の一定期間が休館で、閉講期も短縮開館日は設けていない。専任職員1名とフルタイムの業務委託職員2名とで、この時間帯を運用している。²⁾

日々の業務としては、次のようなものがある。

- ① 塾内現物 ILL のための書庫からの取り出しと移動処理・梱包・発送
- ② 塾内現物 ILL 返送本の返却処理と配架
- ③ 早稲田大学図書館からの現物 ILL の取り出し・梱

包・発送とその返却処理・配架

- 4 塾内からの ILL 複写依頼の複写作業と発送
- 5 直接来館者の応対、貸出・返却処理、複写サービス
- 6 閲覧管理(督促業務、長期貸出設定など閲覧業務にかかわる諸設定)
- 7 書庫管理
- 8 他地区メディアセンターや他大学からの所蔵状況問い合わせへの回答
- 9 レファレンスブックの内容確認依頼や、書誌情報の確認依頼に対する調査と回答(メディアセンター本部、及び三田メディアセンターからの依頼)
- 10 入金、物品の調達、コピー機の管理、統計作成などの庶務・総務業務

塾内現物 ILL については、朝9時30分までに予約がかけられたものについては、必ず当日の塾内便にのせるようにしている。また、至急の場合は、9時30分を過ぎても、塾内便に間に合う限り、対応している。

閲覧・貸出は、ほぼ、三田メディアセンターのものと同一規則で運用している。開設時、三田メディアセンターの蔵書のみでスタートしたためである。

上記以外に、三田メディアセンターの特殊なコレクションの整理を行っている。³⁾

2.4 利用状況

1999年度1年間の利用状況を図1～3と表1に示す。直接来館者は開館日1日平均1.2人で、非常に少ない。(図書の返却のみの場合は、入館者統計にカウントしていない。)

参考業務の中の文献所在調査・事項調査で教職員の件数が多いのは、業務に伴う所在確認やレファレンスブックの記述確認が多いためである。また、初めての来館者が大部分であるため、利用指導の件数

表1 1999年度ILL処理数

	整内	早稲田大学	合計
現物ILL(冊数)	3,602	44	3,646
複写(件数)	23	0	23

図1 1999年度入館者数

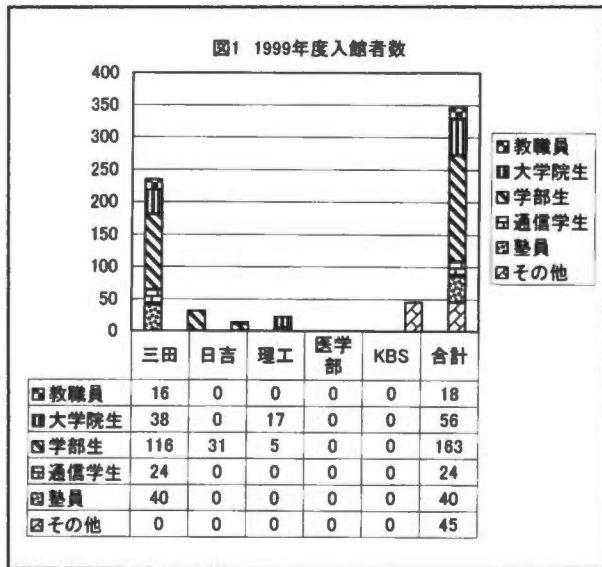


図2 1999年度参考業務件数

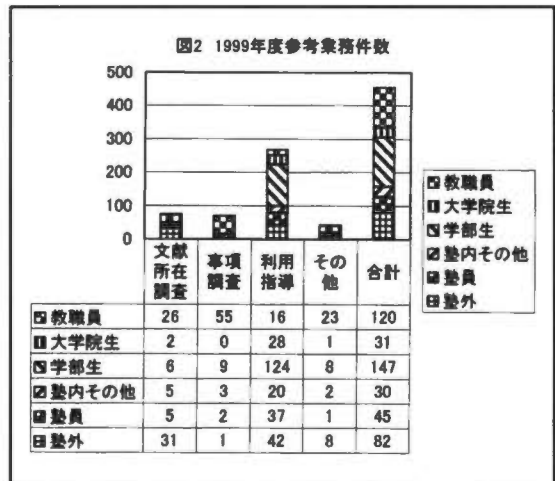


図3-1 1999年度館外貸出冊数(和書)

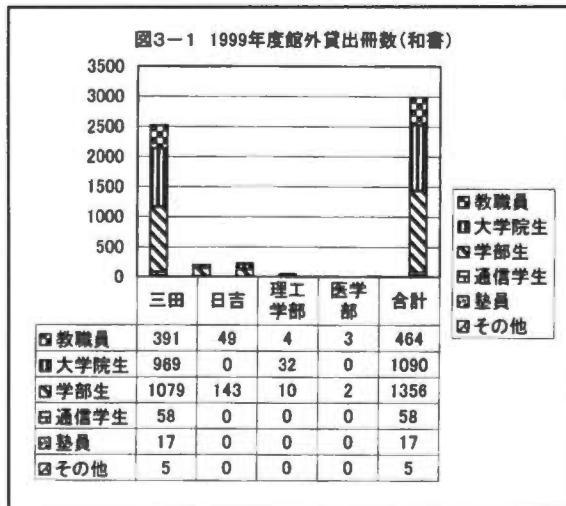
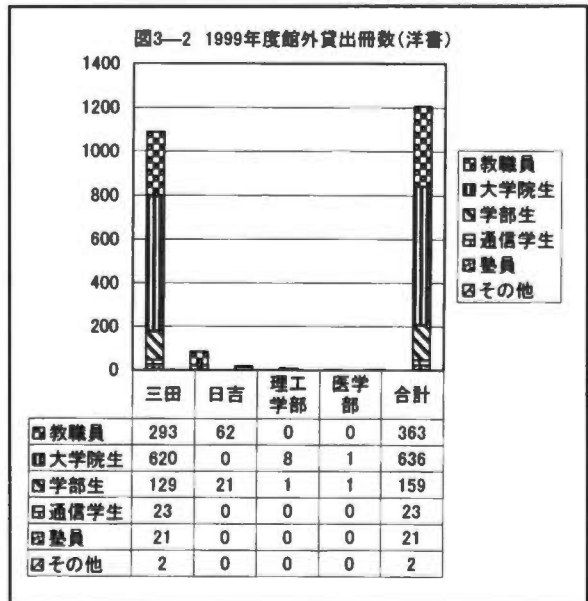


図3-2 1999年度館外貸出冊数(洋書)



が多くなっている。

現物ILLの1日平均の処理冊数は12.8冊である。(総処理冊数を開館日数で割ったもの。)館外貸出冊数は、白楽サテライト・ライブラリーの窓口で貸出をした場合と塾内現物ILLによって、各地区メディアセンターに取寄せをして貸し出されたものが含まれている。

3. 問題点と今後の課題

3.1 書庫・閲覧環境

書庫・閲覧スペースともに、冷房はあるが、暖房設備がないため、冬期は非常に寒い。昨冬は長時間閲覧者には事務室内にて閲覧してもらったが、スタッフが冬期に書庫にて作業を行うにも、支障をきたす状態である。閲覧スペースだけでも何らかの対策を講ずる必要がある。

3.2 目録データの未整備

白楽サテライト・ライブラリーで、預かっている資料のうち、書誌・所蔵データが不備で、資料の特定に困難が伴うものがある。三田メディアセンター蔵書の内の旧分類図書やレファレンスブックの一部である。早急に、データの整備が望まれる。

3.3 資料の傷み

塾内現物ILLが活発に行われることにより、資料の傷みがさらに激しくなっている。特に三田メディアセンターの旧分類図書はももとの保存状態が悪かったこともあり、傷みが顕著である。利用か保存かという選択は、図書館の永遠のテーマであるが、梱包・運送に注意を払うとともに、傷んでしまった資料の修復を考える必要がある。

3.4 運用体制

8時30分から18時まで、土曜日16時までの開館時間を運用するためには、業務が繁忙でなくても、フルタイム換算で最低4名のスタッフが必要である。専任職員を配置するにせよ、業務委託をするにせよ、業務量とコストのバランスを考慮して運用体制を構築していかなければならない。また、入館者が少ないとはいえ、スタッフは閲覧・ILLに係わるすべての業務をこなさなければならない上に、旧分類データベースなど書誌を読み取る能力も要求される。これらを習得し、効率的に業務を遂行する資質を持ったスタッフを配置することが重要である。

4. おわりに

白楽サテライト・ライブラリーは、慶應義塾大学各地区メディアセンターの保存図書館として、書庫に余裕がある限り蔵書を受け入れ、迅速に利用に供する義務がある。

しかし、あくまで借りている書庫であり、有限のものである。白楽サテライト・ライブラリーの行く末を含めて、慶應義塾大学メディアセンター全体の長期的な蔵書構築・書庫管理計画の立案が緊急の課題である。

注・参考文献

- 1) 宮崎貞治. “白楽サテライト・ライブラリー”. MEDIANET. No.7, 1999. p.32-34
- 2) 土曜休暇の確保が困難な場合などは、三田メディアセンターからスタッフの応援を受けている。
- 3) フルタイムの3名以外に特殊な資料の整理のためのパートタイムスタッフも在籍している。フルタイムスタッフも特殊な資料の整理に従事している。

スタッフルーム

情報基盤について

いしはら ともこ
石原 智子

(湘南藤沢メディアセンター)

インターネット、という言葉を知らない人の存在が珍しい時代になりました。

メディアセンターでも、最近1～2年の間にWebページ上で新聞記事を読んだりデータベースを検索してオンラインジャーナルを読んだりと様々なサービスメニューが用意され、とても便利になりました。このコラムでは、図書館に来館せずに上記の新しいサービスを利用する場合、特に一般家庭からインターネットを通じて図書館を利用することについて日頃思ったことを書いてみたいと思います。

自宅に専用線を持っている方は少ないと思いますが、一般家庭から接続するインターネットの利用料金はどの程度が妥当な金額でしょうか。最近ではCATVや衛星、携帯電話などを使ってインターネットの利用ができるサービスが始められていますので、公衆電話回線だけが情報基盤とは言いがたい面はあります。しかし、文頭にあげたメディアセンターの各種のサービスは慶應義塾内のドメインに接続されたコンピュータでのみ受けられるサービスであるため、現在のところ利用者は自宅からダイヤルアップ接続で塾内のコンピュータへアクセスする必要があります。ユーザーの立場で考えた場合、その際に必要となる通信料金が接続する際の負担にはなっていないのか気になるところです。

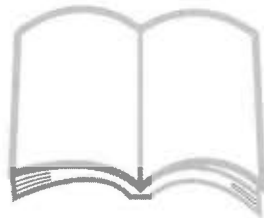
早くて安くてもいつでもつながる(と書くと某牛井屋さんのコピーのようですが)ネットワーク環境が、これからの図書館にとってはとても大切だと思います。通信時間に比して課金される現在のNTTの市内通信料金は国際的に見ても飛び抜けて高いと言われていています。今年7月に行われた日米規制緩和協議においてNTTが2000年4月から3年間で接続料金を22.5%引き下げることで合意したことは記憶に新しいところです。でもこれを実行するとNTTは赤字になってしまうそうです。接続料金を引き下げても消費者

にその利益を還元することは難しいでしょう。市内の通信市場では実質的にNTTが独占しているため、この分野では資本主義の原則がうまく働いていないように思います。法律を改正し、規制緩和を行ったり完全民営化をするよりも、ドコモを含めたNTTグループ各社を完全に分割したり、同業他社がNTT回線を利用しやすくするために値下げすることが先に行われるべきだと思います。高いお金を払った人だけが情報

を入手することができる社会は教育の機会均等という意味では望ましい環境ではないからです。慶應義塾内の情報基盤は整備されているので、メディアセンターやキャンパスの中ではTCP/IPネットワークを快適に利用することができます。しかし仮に図書館を24時間開館して、自由に利用できるコンピュータをキャンパスの人口相当数備えたとしても、社会の情報基盤が使いやすいものでない限り、真の意味での電子図書館と

は言い難いのではないのでしょうか。最近よく耳にする「デジタルデバイド」という言葉があります。個人の情報処理能力の差を指すこともありますが、居住地によるものを考えてみましょう。自治体により情報基盤整備に差があった場合、住んでいる場所により情報格差が生まれてしまいます。どんなにすばらしいサービスを提供している図書館があっても、使い勝手の悪い通信インフラを抱えた地域では図書館をリモートで利用することは難しいかもしれません。些か誇張した表現かもしれませんが、世界全体から見れば「デジタルデバイド」であるのは日本そのものになってしまわないでしょうか。

インターネットがコミュニケーション、そして教育や研究のツールとして非常に大きなウェイトを占めてきた昨今において、誰でもが情報を受信でき、そして発信できるようになるためにも情報基盤整備の課題は非常に大きいと思いませんか。



三田メディアセンターホームページ改訂に携わって

まつもと かずこ
松本 和子

(三田メディアセンター課長代理)

2000年5月8日、三田メディアセンターのホームページ（以下HP）<http://www.mita.lib.keio.ac.jp>がリニューアルされた。1999年9月HPガイドライン委員会の下、ワーキンググループ（以下WG）が組織され、改訂作業に着手してから9ヶ月後のことである。しかし7月31日現在英語版のリリースが遅れているため、WGの活動はまだ終わったわけではない。

<ワーキンググループの結成>

改訂の必要を求める声は1年近く前から上がっていた。その主な理由は、現行のHPが何がどこに書かれているかがわかりにくい、特に電子ジャーナルやデータベースを検索しにくいというものだった。WGは改訂にあたって、従来の印刷体の利用案内をWebで見せるというある意味で静的な（来て貰えば見せるものがある程度の）サービスから、①メディアセンターからの情報の発信の要となる、②三

田キャンパス在籍者のための情報検索の入り口となる、動的な（利用してもらえばそれだけ付加価値のある）サービスを提供できるHPを作成することを目標においた。勿論その延長線上には電子図書館を考えたが、WG発足時にはまだ具現化されていなかったのを見送ることにした。このことから今回の改訂後1～2年後に更なる改訂が必要と判断し、全面的な改訂ではなく、既存のHPで提供する情報のうち使用可能なものはできるだけ再利用し、新しい機能や必要とされている情報を絞って新規に作成することとした。

WGのメンバーはレファレンスのスタッフ3名、メディアセンター本部データベースメディア担当（以下DBメディア）2名に、主査として閲覧課長を加えた5名で構成された。

<WG改訂作業の概要>

まずHPの顔といえるトップページのデザインと



図1. 三田メディアセンターホームページ

各情報へどのようにナビゲートさせるかについて既存のHPでの問題点を洗い出しながら、考えていった。次にサーバ上でHPの情報のディレクトリ構造をどうするか、ファイルの保護や書き込み権限など情報をどのように管理するかについてもあわせて検討していった。

トップページのデザインはフレームを使い、左側が目次の役割を果たすと同時にサイトの全文検索機能(Namazuruを採用)を持たせることとした。また右側のフレームでは常に最新情報のコンテンツが見え、学外からの訪問者のために開館スケジュールや、図書館概要へ案内できるようにした。目次の大項目はできるだけ情報発信と情報検索の項目に重点を置いて選択し、用意されたプルダウンメニューで小項目が一覧できる形を取った。トップページはきりだけスクロールをせずに表示したかったためである。(図1参照)

左側に用意した項目をディレクトリに置き換えて、ファイル構造とコンテンツを詰めていった。現行のページ内容をスタッフに回覧し修正をすると同時に新規に作成するページについては担当を割り当て作業に取りかかった。

<作業の外注>

コンテンツが出揃った時点で、「魅せる」サイトにする、メンテナンスをできるだけ簡単にすることについて検討した。現行のHPについては作成からメンテナンスまでDBメディア担当に頼るところが大であったので、今回の改訂以降はできるだけその負担を減らすことを目標とし、限られた予算であるが外注することとした。WGとしては専門業者に発注したかったが、予算的な制約と年度末で受けてくれる業者を見つけることができなかった。DBメディア担当の了解のもとスキルのある学生たちに依頼することとなった。三田メディアセンターでAVコンサルタントをしている学生を中心に声をかけ、SFCの5名の学生に担当してもらった。委託の条件としてトップページのデザインは選択ができるよう3種類程度作成すること、主要なブラウザに対応するサイトであること、今後のメンテナンスが簡易になるようスタイルシートを作成することを依頼した。しかし、トップページを見せるために

JavaScriptを使ったため、表示のできないブラウザがあることがわかり、正式オープン後に新たにJavaScriptに対応していないブラウザでも見られるよう別のページも用意することとなった。

また現行のHPは英文ページの“工事中”表示が多いことも問題点として取り上げられた。Webでの情報発信は日本国内だけではなく、海外への情報発信も無視できないと判断したが、日本語版と並行して翻訳をスタッフで行うことは不可能だったので図書館関連の翻訳を請け負っている業者に外注することにした。

<今後の課題>

前述したように、三田メディアセンターのHPの改訂はまだ終了していない。新装オープン時はかなり好意的な評価をいただいてWGメンバーはほっとしたが、改訂が終わった部分についてもまだ改善の余地のあるものも多い。未完の部分と改訂すべき主な点を挙げると以下の点になる。

①最新情報の管理

現在はスタッフから送られるメールをもとにDBメディア担当が手作業で改訂しているが、それを自動化する。

②セキュリティの確保

新HPでは利用者からの依頼(購入希望やレファレンス)を受付ける仕組みを予定していたが、セキュリティの問題でまだ実現していない。

③ナビゲート機能の強化

今回トップページではプルダウン表示を採用したが、どの情報がどこにあるか、一目でわかるコンテンツの一覧表を作成したい。

全文検索機能については品詞分解を使って検索率をあげたい。

④更なる情報発信

メディアセンターの統計情報等、公開すべき情報がまだあると思われる。今後は改訂を計画しているメディアセンター本部や他地区メディアセンターのコンテンツを見ながら更に情報を発信していきたい。

また、Macintoshやフレームに対応していないブラウザなどに対応するため、グローバルスタンダードの形式に対応させたい。

日吉メディアセンターホームページ

とよだ のりこ
豊田 紀子

(日吉メディアセンター)

1. はじめに

1995年より公開を始めた日吉メディアセンターホームページ（以下、日吉メディアHP）は、1999年夏にコンテンツの内容とデザインを全面的にリニューアルした。日吉キャンパス全体のデジタルキャンパス化に伴い、これまで主として広報媒体として存在していた日吉メディアHPの機能を、より利用者ニーズに合わせた形で進化させ、充実した情報源としてのメディアセンターをPRすることを目指した。

2. リニューアル版構築までの経緯

第Ⅰ期(1995.2～1995.11)

WWWサーバの立ち上げと同時に、日吉メディアHPの作成を始める。当初は職員が個人的に塾生向けの図書利用案内のHTML化を試み、HPを試験的に公開した。

第Ⅱ期(1995.11～1999.3)

各部署よりメンバーを1名ずつ選出したHP運用ワーキンググループ「日吉メディアセンターWWW広報委員会」が発足。主に塾生向けに利用案内のWeb版や広報紙「Information」を掲載。

1996年6月、日吉メディアセンターHP（日本語版）を正式公開。併せてHP上でのアンケート調査を開始。

1997年、利用案内（英語版）・教員用図書館利用案内（日本語版）の公開。Webサイト経由の塾内ILL orderシステムのサービスを開始。

第Ⅲ期(1999.4～)

HPリニューアルのためのワーキンググループ「日吉メディアセンターHP改良サブワーキンググループ」が発足。既存HPのコンテンツ再編・フレームデザイン構築などの作業を行い、同年9月下旬

にリニューアルバージョンとして正式公開した。

3. 利用者アンケート結果

(1996.6～1998.12 集計数 計399件)

日吉メディアHPの利用状況を把握し、利用者ニーズを調査するため、初期の日吉メディアHP上にて任意のアンケート調査を行なった。回答の結果、8割以上は学内からの学部生のアクセスであった。よく閲覧している情報は、「What's New」「Information（広報紙Informationのweb版）」などに集中した。記述式のアンケートには、今後掲載して欲しい情報として、「蔵書検索システムOPACへのリンク」「Book List」「各種問合せ先」「データベース等へのリンク」などが挙げられた。

4. コンテンツの構築

新しいHP構築に際して、利用者アンケートは多に役に立った。従来のような、単なる案内指示的な情報提供だけでなく、ページ上で利用者自身が自由にデータベースや他のサイトへの検索を行なうことができ、サイトを主体的に活用しうる場となること、つまり、一方通行的な「掲示板的スタイル」から、利用者との「相互コミュニケーション」の場作りが、次期HP構築の課題となるべきものであった。

委員会では、色々な大学や企業のWebサイトを検証し、魅力あるHP構築のためのコンセプトを練り直した。討議を重ねた結果、コンセプト構築において着眼したのはまず下記の4項目である。

<内容>

- ・単なる広報媒体としての機能を薄め、インタラクティブな機能を盛り込んだ「サイバー図書館」的な機能を前面に出す。
- ・利用対象となるユーザは明確化する。
- ・特定の情報ページにおいて常に新しい情報

(News&Information)をリアルタイムで提供する。

<デザイン>

- ・シンプルかつ見やすく機能的なデザイン 日吉キャンパスの若々しいイメージを活かし明るい色彩を用いる。
- ・全ページ通じてデザインや色調を統一感のあるものにする。
- ・トップページの情報は多くし過ぎず、スクロールせずに目次全体が見られるようにする。

<機能>

- ・メディアセンターが提供している各種検索データベースを充実させ、利用者が自由に検索できるシステム構築をする。
- ・Web上で申込が出来る図書館サービスの充実
- ・「利用者からの要望」入力フォームの構築

<更新>

- ・Webの速報性を活かし、新着情報は直ちにアップロードする。HPをチェックするユーザーが常に目新しい情報を得られるよう情報の鮮度に留意する。

5. フレームデザインの検討・業者の選定

コンテンツの方向性を固め、いよいよデザインについて検討を始める段階となった。今回のリニューアルでは、「視覚的に魅力のある斬新なデザイン」を目指したため、大枠となるフレームデザインについては、プロの業者に委託しデザインを考案してもらうことにした。業者選定にあたっては、作業日程、価格、技術の正確さ、日吉メディアセンター側のコンセプトの実現性、業者側からの提案事項などを鑑み、決定した。

実作業を依頼する前に、ワーキンググループと業者の間で十分に話し合いを行い、コンセプトや方向性の共有化を図った。全体的なデザインやインターフェース、配色、MAPなどの作業は業者側に一任した上で、作業の進捗とほぼリアルタイムでページ内容の確認を行い、作業開始後の1ヶ月の間でほぼすべてのページについての作業が完了した。

6. 今後の課題

リニューアル版公開より約1年が経過し、HP上のコンテンツも徐々に整備されてきた。リニューアル版の目玉として、当初より最も力を注いできたのが、「Digital Library」略して「dLib」パートである。このパートでは、日吉メディアセンターで提供している様々なデータベースや情報コンテンツなどを満載している。提供するデータベースや電子ジャーナルの数も、この1年で格段に増え、内容もより充実したものとなった。

利用者自らがHP上の検索機能を使って情報を入力し、自主的に調査・研究を進められるスタイルが、日吉メディアHPの目指すデジタルリファレンスサービスの形である。多くの利用者に、これらの情報源の存在を知ってもらい、その検索技術を習得してもらうことが日吉メディアセンターの役割ともいえるが、その第一歩として、メディアセンターが関わる「情報リテラシー」の授業においては、日吉メディアHPを効率よく利用して情報を扱う方法を中心に講義を行なっている。

また、パブリックサービスのパートにおいては、利用案内の見やすさや、ユーザへのインタラクティブなサービス提供がメインとなる。ユーザが知りたい情報に効率よく辿り着くためには、インターフェースを含めた分かりやすいサイトの構築が必要である。また、ユーザが潜在的に持っているメディアセンターHPへのサービス要望も積極的に取り入れ、今後のサイト構築に反映させていくべきものである。その一例として、日吉メディアHPではリニューアル後、利用ガイドや利用案内シリーズのPDF版を作成し、利用者が館外からも自由にガイドを入手できる形にした。

7. 最後に

今回のリニューアルは、メディアセンターの職員と利用者の声とHP作成業者との、いわば三位一体のアイデアにより完成したものである。先にも書いたが、日吉メディアセンターHP委員会は、各担当部署のメンバーが集まる委員会であるため、様々な観点から意見を出しあうことができた。今後も魅力あるホームページ作りを担っていくべく、意見の活発な委員会でありたい。

ホームページのリニューアル

—湘南藤沢メディアセンター—

しまだ たかし
島田 貴史

(湘南藤沢メディアセンター)

1. リニューアルの概要

湘南藤沢（以下、SFC）メディアセンターのホームページがリニューアルしたのは2000年3月1日である。見た目も、旧ホームページの白地の背景にポップな図柄（図1）から、慶應カラーを基調としたレイアウトに変更された。リニューアル作業自体は1999年夏頃から開始し、専任スタッフ1名が全体を設計した。新ホームページの特徴は以下の通りである。

1) フレームの採用

階層の多重化を避ける

見やすさ、使いやすさを優先

2) 更新作業の簡便化

文字コードをS-JISへ変更

ディレクトリを業務単位に整理

3) アクセスポイント

WEBソースへのゲートウェー

オンライン・リクエストの項目の増加

フレームを採用したのは、旧ホームページの構造が複雑で、行きたいページには何度もクリックしないと辿り着けなかった、という反省からである。フレームに登録された目次部分にはほぼ全てのページを登録し、基本的にクリック1回の操作を原則とした。文字コードをEUCからS-JISに変更したのは、手元の業務端末（PC）からソースの変更ができるようにするためである。旧ホームページでは、キャンパス・ネットワーク・システム（CNS）のUNIX端末にログインして作業していた。また、複雑だったディレクトリ構造を業務単位に（データベースサービスなら“db”）整理し、業務単位ごとのメンテナンスとした。

リニューアルにあたって、ホームページに対する考え方も変わってきた。それは、ホームページは広報の一種という認識から、情報へのアクセスポイントという認識である。この背景には、商用データ

ベースのWeb化、オンラインジャーナルの普及といったWebベースの情報資源が急増し、ユーザが利用しやすい形でこれらの資源を提供する必要が出てきたためである。また、SFCメディアセンターが開発したオンライン・リクエスト・サービス（申込手続きのオンライン化）へのユーザからの認知が高まり、サービスメニューの増加に伴う人口の整備も必要であった。

以下、SFCメディアセンターの特徴である「WEBソースへのゲートウェー」「オンラインリクエストの増加」について詳述する。

2. WEBソースへのゲートウェー

1999年度はWEBソースで提供する情報が飛躍的に増加した1年であった。具体的には提供データベースの約3分の1近くがWEBベースとなり、オンラインジャーナルのタイトル数では、延べ約4,300タイトル（重複分を抜くと約3,600タイトル）がWEB上で利用可能となっている。

データベースへのアクセスは、ホームページの左フレーム→“DATABASES”を選択する。目次部分は3つのパートから出来上がっている。

1) 主題から探す（○×を探す）、2) 契約データベース一覧、3) その他、利用上の諸注意の3つである。主題からであれ、一覧からであれ、データベースを選択した時点で、個別データベースのページに飛ぶ。個別データベースのページには、概要説明、接続方法、注意事項の他に、“Telerate Channel”のように操作マニュアルを載せているものもある。

個別データベース・ページのコンテンツはスタッフが作成している。幸いSFCメディアセンターは「データベースガイド」という冊子を毎年刊行しており、このガイドやマニュアルが素材となっている。

3) その他では、端末の設定方法（認証システムの設定方法など）、利用上の注意（著作権に関する



図1 湘南藤沢メディアセンターのホームページ

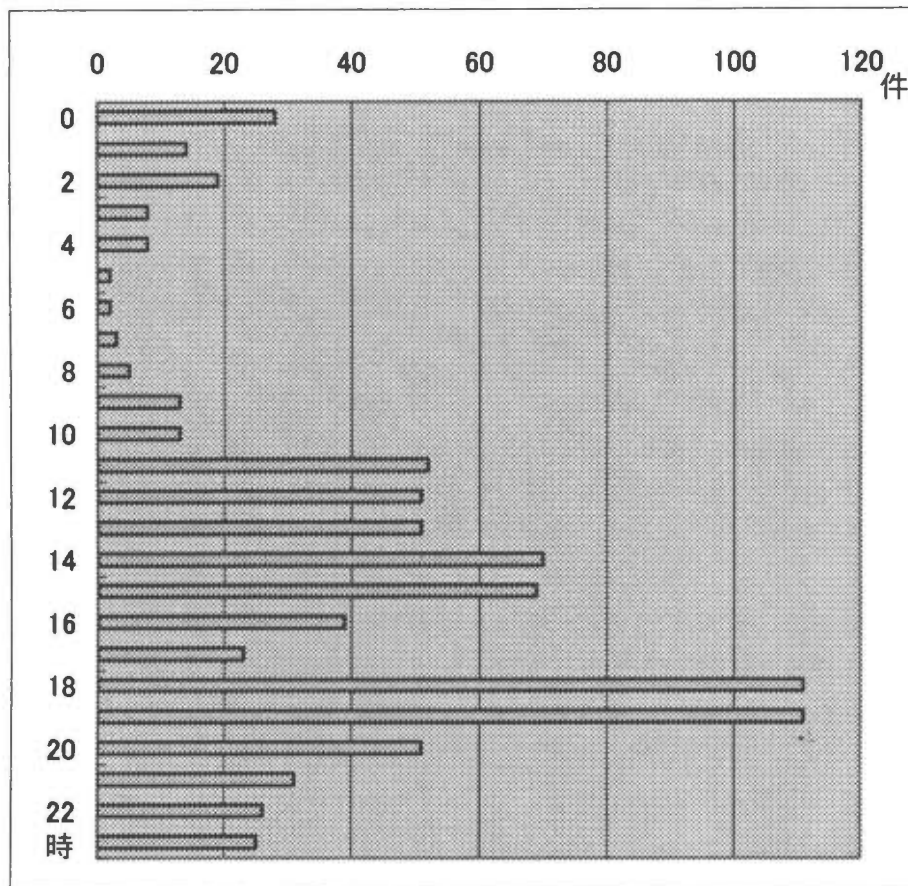


図2 オンラインリクエスト（文献複写）申込件数

注意)などを掲載している

オンラインジャーナルは、ホームページの左フレーム→"ONLINE JOURNALS"からアクセスできる。1999年度に最も変化の大きかったサービスである(1998年度以前は100タイトル前後)。これは、PQD、SD21といった大規模オンラインジャーナル・パッケージを契約したためである

オンラインジャーナルリストは、EXCELのピボットテーブルを使って作成している。雑誌名のアルファベットごとにA～Zに分類し、一覧表を掲載している(縦列が雑誌名、横列がオンラインジャーナル・パッケージ名)。表内にある"HW""SD21"といったボタンをクリックすると、その雑誌の目次ページに飛ぶ。利用者が書庫から「雑誌名」で探すイメージで設計されている

将来的には雑誌論文データベースとオンラインジャーナルとを機械的にリンクさせることが望ましいが、現状ではそれぞれのアクセスポイントを設けることはできていると思う

3. オンライン・リクエスト項目の増加

オンライン・リクエストは、ホームページの左フレーム→"ONLINE REQUEST"でアクセスするCGIプログラムで作った書式を用意しているのが特徴である。2000年8月末日現在で登録されているサービスは

- 資料購入依頼・文献取寄せ
- 紹介状発行
- 施設予約
- CNSリクエスト

である。

オンライン・リクエストの最大の特徴は「利用者手続きの簡素化」である。例えば、文献複写の申し込みをする場合、メディアセンターに足を運ぶ回数が、以前の申込時、受取時の2回から、受取時だけで済むようになった。もう一つの特徴は「サービス

時間の拡大」である。図2は、文献取り寄せサービスへのオンラインによる申込時間別グラフである。データは2000年4月1日～7月31日分の複写物取り寄せサービスへの申込件数である。平日17時に終了するカウンター業務終了後の18～19時台の利用が最も多い。また、20時～0時までの利用が午前中の利用よりも多いのも特徴である。利用者はいつでも申し込むことができる

問題はオンライン化の割合とメンテナンスである。例えば、文献取り寄せのオンライン・リクエストは、利用者からの申し込み部分だけをオンライン化したので、利用者側のメリットは大きかったが、件数の急増でスタッフ側の処理がパンクしてしまった。一方、受付から予約の管理の全てをプログラムで制御している「施設予約」では、重複予約など紙による管理では発生しやすいミスも全て機械がコントロールしてくれる。オンライン化の割合によって、その後の処理に差が発生する。

メンテナンスという側面から見ると、機械によるコントロールの割合が高くなればなる程、プログラミングが高度となり、スタッフの技量では維持できなくなるという問題もある。

4. まとめ

最後に、今後の課題を挙げてみたい。WEBによる情報提供が今後も増加すれば、ホームページがメディアセンターの入口となり、今後は広報手段だけでなく、サービスそのものをホームページ上で行う必要があるだろう。また、良いページを作っていくためには、技術やセンスの面での知識が必要となり、スタッフだけで全てを賄うのは難しくなる。しかし、完全に外部に委託するとなると、新鮮で確実な情報の提供という面で問題が発生してしまう。これらの課題を考えながら、より良いものを作ってゆきたい。

高鳥正夫先生の思い出

みやぎ
宮木 さえみ

(メディアセンター本部課長)

20数年前に私が慶應義塾に就職した時、高鳥正夫先生は情報センター所長であり、図書館長でいらっしゃいました。いつもニコニコ顔で、私達新人にも気さくに声をかけてくださっていました。お話をなさりながら、いつも図書館員の考えや業務上の問題点などを確かめていらっしゃったように思います。

当時は、キャンパス全体に冷房設備などは無く、図書館（現在の旧図書館）4階の雑誌室などは、夏には40度近い室温になる日が続いていました。ある時、各学部長室と図書館長の部屋にだけ冷房設備が取り付けられることになりましたが、高鳥先生は「図書館長の部屋はそれほど暑くないし、毎日執務に使っているわけではないので、冷房は要りません。代わりに毎日働いている図書館の中で、一番暑い雑誌室につけてください。」とおっしゃり、雑誌室の事務スペースに冷房を入れてくださったのです。

三田の新図書館建設の時には、率先して建設計画を推進されました。新しい図書館のサービスはどの

ようにあるべきか、そのための施設設備はどのようなものにしないかなどについて、私達現場の担当者とも熱心に議論されて、それを大学当局との交渉の時にも活かしていらっしゃいました。新図書館が完成した時も、先生のゼミの学生がキャブテンをしているクラブの学生をアルバイトとして紹介してくださり、移転作業がスムーズに進むように配慮してくださいました。先生のご専門は商法研究でしたが、図書館長としても、図書館運営に邁進され、とうとう「大学図書館の運営」という本まで著されました。

お元気でいらっしゃった頃から、決して「現状に甘んじる」ようなことは、なさらなかった高鳥先生です。亡くなられても、あのやさしい中にも強い意志をうかがわせる笑顔で、天国の改革にいそしんでいらっしゃることでしょう。

ご冥福をお祈りいたします。

心に残る1枚 ～安西郁夫さんを偲んで～

さかい あさお
酒井 明夫

(理工学メディアセンター課長代理)

義塾における安西さんの輝かしい業績については昭和58年度の義塾賞授賞がそれを物語っているののでここでは触れません。仕事以外での安西さんのキーワードを拾うとしたら、コーヒー、たばこ、カメラ、それにダンディー、といったところでしょうか。

私の社会人1年め（昭和53年）は研究室棟にあった三田情報センター（現三田メディアセンター）第2閲覧でした。当時、パブリックサービス部長だった安西さんは、ほぼ毎朝、関連部署を巡回されるのでした。仕事の話が済み、時間に余裕があると一服しながら私のような若輩にも声をかけてくれます。その時の話題はもっぱらカメラでした。安西さんをご存知の方はわかりかもしれませんが、とまどったのは会話におけるあの独特の間（ま）です。険しい表情を崩さぬまま、ちょっと間を置いて返事をされるのです。微笑む場合はさらにその後です。初めは怒られているのかなと錯覚しました。

安西さんとの会話の間合いにも慣れた頃でした。ある朝、うれしそうに大きな包みを抱えてこられました。それは半切か全紙だったか覚えていませんが、パネルに伸ばした1枚の白黒写真でした。みぞれまじりの金沢、鮎で有名な俵屋の前の景色だったと記憶しています。写した日のことや撮影の状況をととてもうれしそうに語ってくださいました。会心の1枚だったに違いありません。

第2閲覧時代には他にもいくつか作品を見せていただきましたが、私にとってもとりわけその1枚が心に残りました。思いの深さに差はあっても、写真にはそれを撮った人の気持ちが込められているのですが、今頃になってあの景色の意味を考えたりします。その答を伺うことはもうできませんが、どのような心象風景だったのでしょうか。私もいつか人の心に残る1枚を撮りたいと思います。安西さん、どうか安らかに休んでください。

メディアネット・メディアセンターに関する書誌

1999.8 ~ 2000.7

A. 新聞記事

- (イブニングマガジン) 大学図書館 (下) 慶応義塾大学
産経新聞 東京夕刊 ページ5-7 2000/04/24
- 歴史の一瞬, 天気が左右——白石 克
日本経済新聞 朝刊(文化) ページ40 2000/4/17
- 松森胤保の代表作, 「両羽博物図譜」デジタル化に
朝日新聞 山形 ページ029 2000/01/30

B. 雑誌論文

- 井田進也. "東海散士「佳人之奇遇」合作の背景……慶応義塾図書館所蔵稿本を読む (特集 新世紀への課題集……未来へのストラテジー……歴史, 国家, ネイティブ)". 国文学解釈と教材の研究. Vol.44, No.12, 1999.10, p.36~43
- 渋谷雅俊. "義塾の20世紀 慶応義塾図書館の二〇世紀……図書館の発展と蔵書の形成". 三田評論. No.1017 1999.10, p. 26 ~ 34

スタッフによる論文発表・研究発表

1999.8 ~ 2000.7

[論文発表]**[三田]**

- 加藤好郎. "大学図書館の日本複写権センターへの対応について". 私立大学図書館協会会報. No. 114, 2000.8, p.77-82.
- 村上篤太郎. "ナレッジ・マネジメントを目指して". 大学と教育. No.26, 1999.10, p.47-48.
- 市古健次. "ヴァージニア大学稀観書講習会の受講及び米国図書館における閲覧と視察". 大学図書館研究. No.57, 1999.12, p.43-50.
- 市古健次. "(ニュートン) 自然哲学の数学的原理(解説)". 三田評論. No.1024, 2000.5, p.106-107.
- 松本和子. "(要訳) 講演: 21世紀の情報専門家 - David Bender". 専門図書館. No. 178., 1999. 11, p.30-36.
- 松本和子. "(訳) 大学図書館の深夜開館について - Scott DiMarco ; Scott Van Dam". 情報の科学と技術. Vol.50, No.2, 2000.2, p.88-93.
- 金子康樹. "大学図書館におけるWebサイト構築とマネジメントの実際". 情報の科学と技術. Vol.49, No.12, 1999.12, p.626-631.
- 金子康樹. "利用者公開PCのセキュリティについて". 情報の科学と技術. Vol.50, No.2, 2000.2, p.73-79.

- 布目和美. "統計の読み方 (5) 家計編". 情報の科学と技術. Vol.49, No.10, 1999.10, p.521-526.
- 布目和美. "統計の読み方 (11) 貿易編". 情報の科学と技術. Vol.50, No.4, 2000.4, p.247-253.
- 永嶋千夏子. "統計の読み方 (4) 労働編". 情報の科学と技術. Vol.49, No.9, 1999.9, p.464-471.
- 永嶋千夏子. "統計の読み方 (10) 商業編". 情報の科学と技術. Vol.50, No.3, 2000.3, p.166-171.
- 保坂 睦. "統計の読み方 (9) 企業編". 情報の科学と技術. Vol.50, No.2, 2000.2, p.103-108.
- 保坂 睦. "統計の読み方 (12) 情報化編". 情報の科学と技術. Vol.50, No.5, 2000.5, p.308-313.
- 村田優美子. "統計の読み方 (3) 教育編". 情報の科学と技術. Vol.49, No.8, 1999.8, p.411-416.
- 村田優美子. "統計の読み方 (6) 物価編". 情報の科学と技術. Vol.49, No.11, 1999.11, p.580-584.

[日吉]

- 藤井康子. [村井のり子(国学院大学法学部資料室), いしかわまりこ(バーチャル法情報資料室)との共著], "図書館へ行こう". 別冊法学セミナー 法学入門 2000. No.165, 2000.4.20, p.146-156.
- 上岡真紀子. "統計の読み方 (8) 金融編". 情報の科学と技術. Vol.50, No.1, 2000, p.41-47.

[信濃町]

平吹佳世子.“第3回JMLAヨーロッパ研修報告：電子情報化社会における日本医学図書館協会の役割”.**医学図書館**.Vol.47,No.2,2000.6,p.202-206.

小澤ゆかり.“年代別蔵書構成とキャンパス外への別置”.**医学図書館**.Vol.47No.1,2000.3,p.61-67.

岡野純子.“海外の医療情報サービスに学ぶ”.**カレントアウェアネス**.No.246,2000.2,p.4-6.

[矢上]

廣田とし子.“図書館界の国際交流”.**図書館年鑑**2000,p.124-126.

[湘南藤沢]

市古みどり.“レファレンスサービスとインターネット”.**医学図書館**.Vol.47,No.2,2000.6,p.149-154.

関 秀行.“教室環境のデジタル化 —デジタルキャンパスの実現に向けて—”.**塾監局紀要**.Vol26.,999,p.25-26.

河野江津子.“統計の読み方(7)財政編”.**情報の科学と技術**.Vol.49,No.12,1999.12,p.639-646.

[研究発表]

[本部]

入江 伸.“INFOSTA シンポジウム2000図書館システムの現状と今後の展開”.2000.6.26.
於総評会館

[三田]

加藤好郎.“ネットワーク時代の図書館”.文部省学校図書館司書教諭講習会.1999.8.11 於都立工業高校

加藤好郎.“私立大学図書館協会の国際協力”.学術情報センター国際協力シンポジウム.1999.8.30 於軽井沢国際セミナーハウス

加藤好郎.“国公立大学図書館協力委員会と日本複写権センターとの対応”.私立大学図書館協会東地区研修会.1999.12.21 於 東京女子大学

加藤好郎.“海外における日本資料提供の協力体制”.日本研究司書研修国際交流基金.2000.1.21 於 国際文化会館

加藤好郎.“私立大学図書館協会の国際図書館協力”.北米日本語調整委員会年次大会.2000.3.16 於 San Diego (米国)

加藤好郎.“慶應義塾図書館のリエンジニアリン

グ”.OCLC館長会議.2000.3.21.

於Columbus(米国)

加藤好郎.“私立大学図書館協会の自己点検 自己評価ガイドライン作成経過”.私立大学図書館協会東地区PS分科会.2000.4.19 於 明治大学

加藤好郎.“グローバル・リソース・シェアリングのパネラー”.私立大学図書館協会国際図書館協力委員会国際シンポジウム.2000.5.22 於 慶應義塾大学

加藤好郎.“日本複写権センターとの交渉経過”.私立大学図書館協会東地区研究大会.2000.6.9 於 実践女子大学

加藤好郎.“ネットワークと図書館”.文部省学校図書館司書教諭講習会.2000.8.7 於 東京都立晴海総合高等学校

加藤好郎.“ネットワークと図書館”.文部省学校図書館司書教諭講習会.2000.8.21 於 東京都立晴海総合高等学校

村上篤太郎.“図書館員のための論文の書き方”.私立大学図書館協会東地区部会パブリックサービス研究分科会.1999.9 於 東洋大学箱根保養所

松本和子.“ブリュッセル セミナー報告”.第21回 EDCセミナー.2000.5. 於 東京

松本和子.“私の薦める最適WEB情報源・人物情報源”.専門図書館協議会全国研究集会.2000.7 於 愛知県名古屋市

梁瀬三千代.“大学院生活を振り返って”.人事部主催研修報告会.2000.3.27 於 慶應義塾大学

金子康樹.“Strategies and challenges of the Keio Univerity Library (加藤好郎氏と共同発表)”..18th Annual International Conference of Research Library Directors.2000.3. 於 OCLC, Dublin, OHIO

金子康樹.“デジタル情報の統合化”.CALISユーザー会.2000.5. 於 慶應義塾大学

金子康樹.“慶應義塾大学のZ39.50サーバーと書誌フォーマットについて”.OCLCワークショップ.2000.5. 於 慶應義塾大学

金子康樹.“ICPSR 代表者会議参加報告”.ICPSR国内利用協議会.2000.3. 於 東京大学

古賀理恵子.“多様化するレファレンスツールとその運用”.私立大学図書館協会東地区部会平成11

年度第2回研修会.1999.10 於 慶應義塾大学
 村田優美子.“企業等派遣研修報告会”.人事部主催
 研修報告会.2000.3.24 慶應義塾大学
 村田優美子.“企業等派遣研修報告会”.人事部主催
 研修報告会.2000.3.28 慶應義塾大学

[信濃町]

平吹佳世子.“電子雑誌導入事例—慶應義塾大学 医学メディアセンターにおいて”.第6回医学図書館研究会.1999.9.29 於 東京大学検見川セミナーハウス

小澤ゆかり.“蔵書の古い部分をキャンパス外へ。

事例報告と今後の展望”.第6回医学図書館研究会.1999.9.29 於 東京大学検見川セミナーハウス
 [湘南藤沢]

市古みどり.“慶應義塾大学における事例報告”.ISI Symposium.1999.11.19. アルカディア市ヶ谷 (東京)

関 秀行.“慶應義塾大学湘南藤沢メディアセンターの映像メディアサービス”.1999年度私立大学図書館協会西地区部会研究会.1999.10.8. 京都精華大学 (京都市)

三田メディアセンター小展示ニュース

平成 12 年 3 月 7 日～4 月 24 日

明治時代の鉄道錦絵 (2)

平成 12 年 5 月 1 日～5 月 13 日

『三田文学』刊行90周年記念と三田の文人たち (1910-1940)

平成 12 年 5 月 15 日～5 月 27 日

『三田文学』刊行90周年記念と三田の文人たち (1941-1970)

平成 12 年 6 月 26 日～7 月 8 日

新収貴重書展

平成 12 年 7 月 24 日～8 月 5 日

各学部における古典

平成 12 年 10 月 2 日～10 月 14 日

『三田文学』刊行90周年記念と三田の文人たち (1971-2000)

平成 12 年 11 月 6 日～11 月 20 日

日蘭交流 400 年記念展示

三田メディアセンターニュース3

全館禁煙

4 月から図書館 2 階に設けられていた喫煙コーナーを以下の理由で廃止し,全館禁煙としました。

- 1 喫煙しながらの資料閲覧行為は,資料保存上適さないこと
- 2 既に喫煙に対して苦情があったこと
- 3 完全な分煙は,現施設の構造上不可能であること
- 4 床が黒く焦げ付くなど,施設保全上,適さないこと

図書館図書を国内他大学図書館に貸出開始

6 月から図書館予算で購入した1960年以降出版の和書と洋書を対象 (一部例外あり) に,国内の4

年制大学及び大学院大学の図書館から依頼があった場合に,貸出をする相互貸借サービスを開始しました

学生環境サークル ECO 団体への書籍引渡

対象資料:三田メディアセンターに寄贈された資料のうち,重複のため不要,選書基準に合わないなどの理由により受入れないと決めたもの

目的:資料の有効利用のため,資料交換コーナーに置く

※古本屋への売却,生協店頭との競合を避けるための対策は講じています。

年次統計資料〈平成11年度〉

1. 図書費〈平成11年度実績及び12年度予算〉

慶應義塾大学メディアセンター

内訳	平成11年度実績〈単位：円〉			平成12年度予算〈単位：千円〉		
	図書支出	図書資料費	計	図書支出	図書資料費	計
各地区メディアセンター						
本 部		43,362,021	43,362,021		51,561	51,561
三田メディアセンター	674,380,865	62,773,170	737,154,035	690,910	77,233	768,143
図書館	319,424,342	62,773,170	382,197,512	300,093	77,233	377,326
指定寄付金			(1,282,000)			
学部*	354,956,523	0	354,956,523	390,817		390,817
(私大研究設備相当額)			(27,908,847)			
日吉メディアセンター	175,128,798	14,672,440	189,801,238	57,150	15,177	72,327
図書館	60,149,967	12,177,342	72,327,309	57,150	15,177	72,327
指定寄付金						
学部*	114,978,831	2,495,098	117,473,929	127,931	2,621	130,552
(私大研究設備相当額)			(16,095,000)			
医学メディアセンター	190,799,741	21,252,672	212,052,413	227,680	20,864	248,544
指定寄付金			307,618			
理工学メディアセンター	200,672,388	30,470,352	231,142,740	220,743	31,342	252,085
指定寄付金			500,000			
(私大研究設備相当額)			0			
湘南藤沢メディアセンター	160,996,583	50,044,436	211,041,019	161,000	50,032	211,032
(私大研究設備相当額)			0			
合 計	1,401,978,375	222,575,091	1,624,553,466	1,357,483	246,209	1,603,692

*印 特別図書費は含まない。
(私大研究設備相当額)は合計欄に加算しない。

2-1. 蔵書統計<年間受入及び所蔵冊数>

各地区メディアセンター	内訳	単行書			製本雑誌			合計
		和	洋	計	和	洋	計	
年間受入冊数	三田メディアセンター	16,744	17,515	34,259	4,391	6,704	11,095	45,354
	図書館			0			0	0
	学部			0			0	0
	日吉メディアセンター	12,344	6,035	18,379	1,815	2,351	4,166	22,545
	図書館	10,369	944	11,313	1,303	357	1,678	12,991
	学部	1,975	5,091	7,066	512	1,976	2,488	9,554
	医学メディアセンター	2,078	875	2,953	3,020	6,754	9,774	12,727
	理工学メディアセンター	3,803	1,342	5,145	1,190	4,680	5,870	11,015
	湘南藤沢メディアセンター	13,451	4,650	18,101	2,219	1,725	3,944	22,045
	合計	48,420	30,417	78,837	12,635	22,214	34,849	113,686
所蔵冊数累計	三田メディアセンター	785,783	867,875	1,653,658	220,201	227,367	447,568	2,101,226
	図書館			0			0	0
	学部			0			0	0
	日吉メディアセンター	365,912	183,186	549,098	48,342	61,684	110,026	659,124
	図書館	276,135	26,988	303,123	31,748	4,096	35,844	338,967
	学部	89,777	156,198	245,975	16,594	57,588	74,182	320,157
	医学メディアセンター	46,137	45,429	91,566	71,443	152,959	224,402	315,968
	理工学メディアセンター	68,294	36,058	104,352	49,164	137,654	186,818	291,170
	湘南藤沢メディアセンター	127,540	85,690	213,230	30,437	24,180	54,617	267,847
	合計	1,393,666	1,218,238	2,611,904	419,587	603,844	1,023,431	3,635,335

2-2. 蔵書統計<逐次刊行物：タイトル数>

各地区メディアセンター	カレント			ノンカレント			カレント・ノンカレント合計
	和	洋	計	和	洋	計	
三田メディアセンター	5,979	4,790	10,769	6,070	3,854	9,924	20,693
図書館							
学部							
日吉メディアセンター	948	863	1,811	1,213	1,600	2,813	4,624
図書館							
学部							
医学メディアセンター	1,792	1,826	3,618	1,252	1,907	3,159	6,777
理工学メディアセンター	1,199	1,317	2,516	3,150	5,725	8,875	11,391
湘南藤沢メディアセンター	1,274	1,249	2,523	549	693	1,242	3,765
合計	11,192	10,045	21,237	12,234	13,779	26,013	47,250

2-3. 蔵書統計<非図書資料>

各メディアセンター	種別	光学・磁気媒体	A-V資料	合計	
				タイトル数	冊数
年間新規	三田メディアセンター	タイトル数	158	78	236
		冊数	1,490	401	1,891
	日吉メディアセンター	タイトル数	198	382	580
		冊数	638	1,123	1,761
	医学メディアセンター	タイトル数	63	54	117
		冊数	73	191	264
	理工学メディアセンター	タイトル数	115	86	201
		冊数	177	179	356
	湘南藤沢メディアセンター	タイトル数	300	225	525
		冊数	989	605	1,594
	合計	タイトル数	834	825	1,659
		冊数	3,367	2,499	5,866
累計	三田メディアセンター	タイトル数	2,706	8,610	11,316
		冊数	95,250	16,509	111,759
	日吉メディアセンター	タイトル数	1,233	4,062	5,295
		冊数	13,109	10,840	23,949
	医学メディアセンター	タイトル数	468	1,771	2,239
		冊数	2,418	4,152	6,570
	理工学メディアセンター	タイトル数	684	263	947
		冊数	2,150	608	2,758
	湘南藤沢メディアセンター	タイトル数	1,243	2,449	3,692
		冊数	13,093	4,603	17,696
	総累計	タイトル数	6,334	17,155	23,489
		冊数	126,020	36,712	162,732

3-1. 利用統計<貸出及び閲覧冊数>

各メディアセンター	内訳	館外貸出				計	館内閲覧		前年度比 館外貸出
		教職員	学生	その他	塾外		一般図書	貴重書	
三田メディアセンター		18,507	158,825	7,165	1,781	186,278	/	1,030	0.95
日吉メディアセンター		11,628	144,074	5,418	0	161,120	/	/	1.07
医学メディアセンター		53,746	19,230	4	46	73,026	/	/	0.98
理工学メディアセンター		1,688	54,213	5	12	55,918	/	/	1.01
湘南藤沢メディアセンター		4,254	99,296	595	711	104,856	/	/	1.17
合計		89,823	475,638	13,187	2,550	581,198	/	1,030	平均 1.03

3-2. 利用統計<相互貸借(複写依頼を含む)>

各メディアセンター	内訳	依頼を受けた(貸)			依頼した(借)		
		国内	国外	計	国内	国外	計
三田メディアセンター	現物(冊)	583	0	583	487	370	857
	複写(件)	5,484	23	5,507	2,625	529	3,154
日吉メディアセンター	現物(冊)	106	0	106	60	3	63
	複写(件)	711	0	711	458	69	527
医学メディアセンター	現物(冊)	63	0	63	41	1	42
	複写(件)	25,786	169	25,955	2,714	77	2,791
理工学メディアセンター	現物(冊)	12	0	12	17	0	17
	複写(件)	19,057	0	19,057	2,572	82	2,654
湘南藤沢メディアセンター	現物(冊)	194	0	194	267	2	269
	複写(件)	572	1	573	850	25	875
合計	現物(冊)	958	0	958	872	376	1,248
	複写(件)	51,610	193	51,803	9,219	782	10,001

参考データ：早慶ILL(内数)

依頼を受けた(貸)			依頼した(借)		
	現物	複写		現物	複写
三田メディアセンター	583	760	三田メディアセンター	409	966
日吉メディアセンター	106	131	日吉メディアセンター	50	106
医学メディアセンター	11	547	医学メディアセンター	0	74
理工学メディアセンター	12	622	理工学メディアセンター	17	662
湘南藤沢メディアセンター	52	79	湘南藤沢メディアセンター	98	279
合計	764	2,139	合計	574	2,087

*現物は冊数、複写は件数

3-3. 利用統計<複写サービス>

各メディアセンター	内訳 種別	学 内		学 外		合 計	
		件 数	枚 数	件 数	枚 数	件 数	枚 数
三田メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	4,399	54,119	5,730	65,302	10,129	119,421
	電子コピー(セルフ式)	/	4,211,506	/	/	/	4,211,506
	OHP・スライド作成	4	6	/	/	4	6
	マイクロ資料コピー	1,719	85,352	192	2,988	1,911	88,340
	簡易印刷	142	50,606	/	/	142	50,606
日吉メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	611	4,457	711	5,677	1,322	10,134
	電子コピー(セルフ式)	/	/	/	1,299,076	/	1,299,076
	マイクロ資料コピー(セルフ式)	89	7,000	6	1,236	95	8,236
医学メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	17,562	112,197	95,470	581,594	113,032	693,791
	電子コピー(セルフ式)	568	495,943	/	/	/	495,943
	OHP・スライド作成	28	123	/	/	/	123
	マイクロ資料コピー	/	/	5	45	/	45
理工学メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	1,313	13,886	18,778	151,279	20,091	165,165
	電子コピー(セルフ式)	/	918,055	276	7,228	/	925,283
	OHP	363	1,761	/	/	363	1,761
	マイクロ資料コピー	29	415	3	28	32	443
湘南藤沢メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	515	4,371	478	3,968	993	8,339
	電子コピー(セルフ式)	/	520,572	/	/	/	520,572
	OHP・スライド作成	15	584	/	/	/	584
	マイクロ資料コピー	/	/	/	/	/	/
	簡易印刷	1,040	4,908,454	/	/	1,040	4,908,454
合 計	電子コピー(オペレーター付)	24,400	189,030	121,167	807,820	145,567	996,850
	電子コピー(セルフ式)	568	6,146,076	276	1,306,304	844	7,452,380
	OHP・スライド作成	410	2,474	0	0	410	2,474
	マイクロ資料コピー	1,837	92,767	206	4,297	2,043	97,064
	簡易印刷	1,182	4,959,060	0	0	1,182	4,959,060

*斜線は計上不能

3-4. 利用統計<レファレンス・サービス>
利用者別

内訳 各メディアセンター	学 内 者		学 外 者	合 計
	教 職 員	学 生		
三田メディアセンター	2,318	21,821	4,455	28,594
日吉メディアセンター	991	5,662	303	6,956
医学メディアセンター	1,879	209	1,494	3,582
理工学メディアセンター	964	8,192	1,632	10,788
湘南藤沢メディアセンター	160	2,431	99	2,690
合 計	6,312	38,315	7,983	52,610

3-4. 利用統計<レファレンス・サービス>
業務内容別

	文献所在調査	事項調査	利用指導	その他	合 計
三田メディアセンター	10,189	1,060	15,546	1,799	28,594
日吉メディアセンター	1,421	443	5,063	29	6,956
医学メディアセンター	1,423	1,651	508	0	3,582
理工学メディアセンター	7,205	121	3,361	101	10,788
湘南藤沢メディアセンター	188	33	2,465	4	2,690
合 計	20,426	3,308	26,943	1,933	52,610

訃 報

高鳥正夫元図書館長は1999年12月31日、ご病気のため逝去されました 享年77

高鳥先生は69年6月に図書館長に就任され、館長としては異例の長い任期を勤められて82年3月末をもって退任されました。この間、図書館から研究・教育情報センターへの移行や三田の新図書館の建設について多大な貢献をされ、まさに4月から新図書館が開館するいうときに退任されました。別項に追悼の記事を掲載いたしました。あらためて謹んで哀悼の意を表します。なお、「慶應義塾報」1899号に訃報が、「法学研究」73巻6号に追悼記事、略歴、主要著作目録が掲載されています。

安西郁夫元三田情報センター副所長は1999年12月31日、ご病気のため逝去されました 享年76

安西さんは文学部図書館・情報学科事務主任として長く勤務された後、三田情報センター副所長として勤務され、図書館業務の機械化などを大きく推進されました。謹んでご冥福を祈ります。

寄 付 報 告

高鳥正夫元図書館長のご遺族から「メディアセンターの発展のために」とのご趣旨で慶應義塾図書館あてに金1000万円のご寄付を頂戴致しました。お気持ちに沿えるように活用させていただく所存です。記して感謝の意を表します。

編 集 後 記

- ◎職業人としての基本に「学ぶ」ことがあり、「研修」は大きな意味を持っている。勤務時間内の30分間の研修から数年間に及ぶ研修まで、さまざまな研修が整えられている。海外研修も、見学訪問から、会議出張、国際会議への出席と多岐にわたる。ただ研修を受けるだけではなく、その経験を共有し、発展させていくことが求められる。最近の研修成果をそれぞれ一ページにまとめて特集とした。
- ◎編集委員の小松君から本誌の改善提案を受けた。次号で実現させたい。
- ◎校正が最終段階にあるとき、ニュースが届いた。平成12年の文化勲章に石川忠雄前塾長が、文化功労者に速水融大学名誉教授が受章者に決まった。ご本人はもちろん、義塾にとっても慶事である。速水先生は図書館長を務められていたので、より身近に感じられる。共に喜びたい。

MediaNet 第8号 2000年10月31日 発行

編 集 MediaNet 編集委員会
発行者 岡林 隆
発 行 慶應義塾大学メディアセンター本部
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電話 03-5427-1644
表紙デザイン 株式会社 AXHUM (藤田明浩)
印 刷 共立コミュニケーションズ(株)

MediaNet 編集委員会

編集長 佐藤 和貴
編集員 宮崎 貞治(本部) 小松 雅高(三田) 中村 和美(三田) 森 三枝子(日吉)
加藤 孝明(医学) 杉本 若葉(理工学) 三瓶美和子(湘南藤沢)
E-mail: medianet-edit@mita.lib.keio.ac.jp

「MediaNet No.8」正誤表

・72ページの左コラム12行目、[湘南藤沢]（明朝）は[湘南藤沢]（ゴシック）

・74ページの1. 図書費<平成11年度実績及び12年度予算>は次の表に差し替え（訂正箇所は、イタリックでアンダーライン）。

内訳	平成11年度実績<単位:円>			平成12年度予算<単位:千円>		
	図書支出	図書資料費	計	図書支出	図書資料費	計
各地区メディアセンター						
本部		43,362,021	43,362,021		51,561	51,561
三田メディアセンター	674,380,865	62,773,170	737,154,035	690,910	77,233	768,143
図書館	319,424,342	62,773,170	382,197,512	300,093	77,233	377,326
指定寄付金			(1,282,000)			
学部*	354,956,523	0	354,956,523	390,817		390,817
(私大研究設備相当額)			(27,908,847)			
日吉メディアセンター	175,128,798	14,672,440	189,801,238	<u>185,081</u>	<u>17,798</u>	<u>202,879</u>
図書館	60,149,967	12,177,342	72,327,309	57,150	15,177	72,327
指定寄付金						
学部*	114,978,831	2,495,098	117,473,929	127,931	2,621	130,552
(私大研究設備相当額)			(7,481,317)			
医学メディアセンター	190,799,741	21,252,672	212,052,413	227,680	20,864	248,544
指定寄付金			307,618			
理工学メディアセンター	200,672,388	30,470,352	231,142,740	220,743	31,342	252,085
指定寄付金			500,000			
(私大研究設備相当額)			0			
湘南藤沢メディアセンター	160,996,583	50,044,436	211,041,019	161,000	50,032	211,032
(私大研究設備相当額)			0			
合計	1,401,978,375	222,575,091	1,624,553,466	<u>1,485,414</u>	<u>248,830</u>	<u>1,734,244</u>

*印 特別図書費は含まない。

指定寄付金、(私大研究設備相当額)は合計欄に加算しない。

・77ページの3-2. 利用統計<相互貸借(複写依頼を含む)>は、塾外の数値のみ。

・78ページの3-3. 利用統計<複写サービス>は次の表に差し替え。

内訳	種別	学内		学外		合計	
		件数	枚数	件数	枚数	件数	枚数
各メディアセンター							
三田メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	4,399	54,119	5,730	65,302	10,129	119,421
	電子コピー(セルフ式)		4,211,506				4,211,506
	OHP・スライド作成	4	6			4	6
	マイクロ資料コピー	1,711	85,352	170	1,739	1,881	87,091
	簡易印刷	142	50,606			142	50,606
日吉メディアセンター	マイクロフィルム作成	8	28	24	1,260	32	1,288
	電子コピー(オペレーター付)	611	4,457	711	5,677	1,322	10,134
	電子コピー(セルフ式)		1,299,076				1,299,076
	マイクロ資料コピー(セルフ式)	89	7,000	6	1,236	95	8,236
	電子コピー(オペレーター付)	17,562	112,197	95,470	581,594	113,032	693,791
医学メディアセンター	電子コピー(セルフ式)		495,943				495,943
	OHP・スライド作成	28	123			28	123
	マイクロ資料コピー			5	45	5	45
理工学メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	1,313	13,886	18,778	151,279	20,091	165,165
	電子コピー(セルフ式)		918,055	276	7,228	276	925,283
	OHP	363	1,761			363	1,761
	マイクロ資料コピー	29	415	3	28	32	443
湘南藤沢メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	515	4,371	478	3,968	993	8,339
	電子コピー(セルフ式)		520,572				520,572
	OHP・スライド作成	15	584			15	584
	簡易印刷	1,040	4,908,454			1,040	4,908,454
合計	電子コピー(オペレーター付)	24,400	189,030	121,167	807,820	145,567	996,850
	電子コピー(セルフ式)		7,445,152	276	7,228	276	7,452,380
	OHP・スライド作成	410	2,474			410	2,474
	マイクロ資料コピー	1,829	92,767	184	3,048	2,013	95,815
	簡易印刷	1,182	4,959,060			1,182	4,959,060
マイクロフィルム作成	8	28	24	1,260	32	1,288	

* 斜線は計上不能

展示会予告

『福澤先生没後百年記念 慶應義塾の経済学』

主催：慶應義塾図書館（協力：慶應義塾福澤研究センター 協賛：丸善株式会社）

会期：2001年1月29日（月）～2月3日（土）
午前10時～午後7時（最終日は午後5時まで）

会場：丸善・日本橋店4階ギャラリー

講演会： 4階特設会場（各日とも午後2時30分～3時30分、先着80名）

1/29（月）『福澤門下の経済論』

セイコー株式会社取締役会長 服部禮次郎

1/30（火）『慶應義塾と近代経済学の確立』

慶應義塾大学助教授 池田幸弘

1/31（水）『高橋誠一郎と慶應リベラリズムの伝統』

慶應義塾図書館長 飯田裕康

2/1（木）『慶應義塾とF. ウェーランド』

千葉商科大学教授 藤原昭夫

2/2（金）『戦間期経済と日本の経済学』

明治大学教授 柳澤 治

幕末から戦後までの日本の経済学の歴史を、慶應義塾の理財科・経済学部の歩みとともにふりかえります。塾の経済学者の著作を中心に、スミス『国富論』初版本など、慶應義塾図書館所蔵の経済学の古典もあわせて約八十点を展示いたします。

慶應義塾大学メディアセンター

MediaNet ^{NO.8} 2000



www.mita.lib.keio.ac.jp
三田メディアセンター



www.hc.lib.keio.ac.jp
日吉メディアセンター



www.lib.med.keio.ac.jp
医学メディアセンター



www.lib.st.keio.ac.jp
理工学メディアセンター



www.sfc.keio.ac.jp/mhtml
湘南藤沢メディアセンター



Keio University
MediaCenter